

中川原C遺跡

第4次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第163集



2007

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



な　か　が　わ　ら

中川原 C 遺跡

第4次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第163集

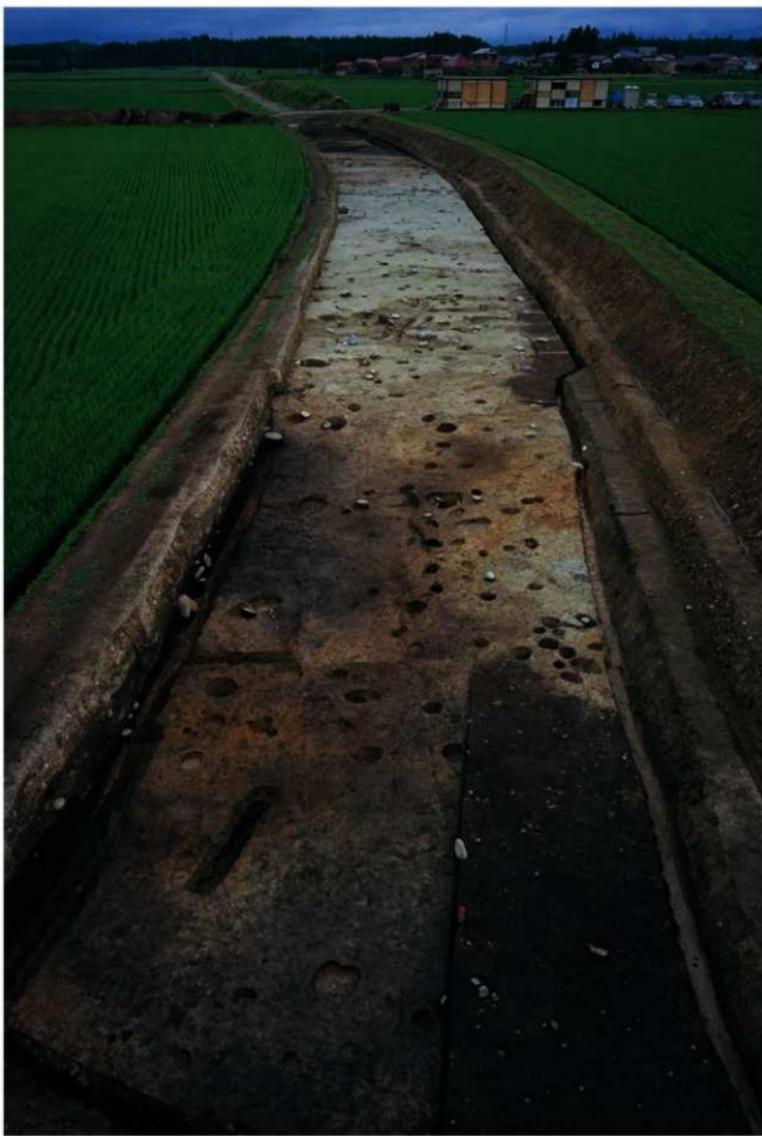
平成19年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





遺跡遠景（南東上空から 手前は泉田川）



調査区全景（南から）



縄文時代の石器



縄文時代の石錘



水晶片（左RQ14、右RQ16）



石器（主に石鏽）に利用された石材各種

序

本書は財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した中川原C遺跡の調査成果をまとめたものです。

中川原C遺跡は山形県の北部に位置する新庄市に所在します。新庄市は最上地域の産業の中心地として農業をはじめ商工業など広い分野で発展してきました。現在もこの地域の拠点都市として知られています。中川原C遺跡の周辺は昭和62年国指定史跡となった新庄藩戸沢家墓所や旧石器時代の良好な石器群が検出された乱馬堂遺跡などをはじめ数多くの遺跡が存在するところあります。

この度、ふるさと農道緊急整備事業（野中地区）建設工事に伴い、工事に先立って中川原C遺跡の発掘調査を実施しました。調査では縄文時代の土壙やピット群、中世から近世にかけての溝跡などを検出しました。また、数多くの縄文土器や石器が出土しました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産と言えます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査において御協力いただいた関係各位に心から感謝を申し上げます。

平成19年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 山口常夫

本書は、ふるさと農道緊急整備事業（野中地区）に係る「中川原C遺跡」の第4次発掘調査報告書である。

既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は山形県農林水産部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物、調査記録類は報告書作成後、山形県教育委員会に移管する。

調査要項

遺跡名	なかがわら いせき 中川原C遺跡
遺跡番号	平成8年度登録
所在地	山形県新庄市十日町字中川原
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
理事長	山口 常夫
受託期間	平成18年4月1日～平成19年3月31日
現地調査	平成18年5月11日～平成18年7月7日
調査担当者	調査第一課長 野尻 健（農林関連事業担当） 主任調査研究員 石井 浩幸（調査主任） 調査員 須賀井明子
調査指導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室
調査協力	山形県最上総合支庁産業経済部農村計画課 山形県教育庁最上教育事務所 新庄市教育委員会 新庄土地改良区

凡　　例

- 1 本書の作成・執筆は石井浩幸が担当した。
- 2 遺構図に付す座標値は平面直角座標系第X系（日本測地系）により、高さは海拔高で表す。また、方位は座標北を表す。
- 3 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S K…土壤	S P…小穴	
S D…溝	S G…河川	S X…性格不明遺構
P…土器	S…礫	W…木
R P…登録土器・土製品	R Q…登録石製品	
- 4 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。
- 5 調査区は南北に長い調査範囲を勘案して北側を北区、南側を南区、中央部分を中央区とした。
- 6 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図の方位は磁北を示している。
 - (2) 遺構実測図は1/200・1/80・1/40・1/20の縮図他で採録し、各挿図にスケールを付した。
 - (3) 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/4その他で採録し、其々スケールを付した。遺物図版については任意としたが、重要なものについてはスケールを入れている。断面図にスクリーントーンを入れたものは陶磁器を表している。
 - (4) 本文中の遺物番号は遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通の番号とした。写真図版中遺物番号のないものは出土地点を示す。
 - (5) 土器の拓影の内、中近世の陶磁器については裏面→断面→表面として図を作成した。
 - (6) 遺物観察表中の数値は、実物の計測値、図上復元による推定値、または残存値を表している。
 - (7) 基本層序及び遺構覆土の色調記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲げた。
- 7 発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の機関や方々からご協力、ご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。（順不同・敬称略）

新庄市役所農林課 新庄土地改良区 新庄市ふるさと歴史センター
川崎利夫 長澤正機
- 8 委託業務は下記のとおりである。

基準点測量業務	株式会社 共同測量設計センター
遺構写真解析・測量業務	株式会社 ワクニ
遺跡俯瞰撮影業務	株式会社 ワクニ
報告書編集業務	藤庄印刷株式会社

目 次

I 調査の経緯.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 調査の経緯.....	2
II 遺跡の概観.....	4
1 地理的環境.....	4
2 歴史的環境.....	6
3 調査の方法.....	10
4 基本土層.....	12
5 遺構・遺物の分布.....	13
III 検出した遺構と遺物.....	23
1 土壙.....	23
2 溝跡.....	30
3 ピット群.....	32
4 焼土跡.....	33
5 河川跡.....	33
6 遺物包含層（S G 1）.....	42
7 遺構外の出土遺物.....	44
8 第3次調査（E区）出土の土器	44
IV まとめ.....	81
1 縄文時代の遺構について.....	81
2 縄文時代の遺物について.....	82
3 中世の遺構と遺物について.....	84
4 まとめ.....	84
報告書抄録.....	卷末

表

表1 調査工程表	3	表7 縄文土器観察表(2)	76
表2 周辺の遺跡一覧	8	表8 縄文土器・陶磁器・土製品等観察表	77
表3 中川原C遺跡遺構別遺物出土数(土器類)	21	表9 石器・石製品等観察表(1)	79
表4 中川原C遺跡遺構別遺物出土数(石器・礫器類)	22	表10 石器・石製品等観察表(2)	80
表5 ピット群(小穴)観察表	35	表11 最上地域における縄文時代後期前葉の土器群対応	
表6 縄文土器観察表(1)	75		82

図版

第1図 中川原C遺跡の位置	1	第31図 第3次調査(E区)出土の土器(3)	47
第2図 周辺の地形と横断図	5	第32図 縄文土器(1)	48
第3図 周辺の遺跡位置図	7	第33図 縄文土器(2)	49
第4図 中川原C遺跡周辺の遺跡位置図	9	第34図 縄文土器(3)	50
第5図 中川原C遺跡調査区位置図	11	第35図 縄文土器(4)	51
第6図 基本順序図	12	第36図 縄文土器(5)	52
第7図 遺構全体図	14	第37図 縄文土器(6)	53
第8図 遺構分割図(1)	15	第38図 縄文土器(7)	54
第9図 遺構分割図(2)	16	第39図 陶磁器類(1)	55
第10図 遺構分割図(3)	17	第40図 陶磁器類(2) 土製品他	56
第11図 遺構分割図(4)	18	第41図 石錐・石錆	57
第12図 出土した遺物の数量(1)	19	第42図 石錐・石匙	58
第13図 包含層・グリッド別遺物出土数	20	第43図 石匙・石錆・小型搔器	59
第14図 出土した遺物の数量(2)	20	第44図 搗器・削器	60
第15図 土壙(1) SK10・SK11・SK12	26	第45図 削器	61
第16図 土壙(2) SK14	27	第46図 削器	62
第17図 土壙(3) SX15	28	第47図 削器・石核	63
第18図 土壙(4) SK16・SK17	29	第48図 磨製石斧	64
第19図 土壙(5) SX21	30	第49図 磨製石斧・石製品等	65
第20図 溝跡 SD18	31	第50図 石錆(1)	66
第21図 ピット群の規模	33	第51図 石錆(2)	67
第22図 ピット(1)	36	第52図 石錆(3)	68
第23図 ピット(2)	37	第53図 石錆(4)	69
第24図 ピット(3)	38	第54図 四面・磨石	70
第25図 ピット(4)	39	第55図 磨石・石皿(1)	71
第26図 ピット(5)	40	第56図 磨石・石皿(2)	72
第27図 河川跡	41	第57図 磨石・石皿(3)	73
第28図 遺物包含層(SG1)断面	43	第58図 磨石・石皿(4)	74
第29図 第3次調査(E区)出土の土器(1)	45	第59図 中川原C遺跡第3次調査(E区)遺構配置図	
第30図 第3次調査(E区)出土の土器(2)	46		81

写真図版

- | | |
|------------------------------|--------------------------|
| 卷頭写真1 遺跡遠景 | 写真図版21 ピット群 (1) |
| 卷頭写真2 調査区全景 | 写真図版22 ピット群 (2) |
| 卷頭写真3 出土した石器 | 写真図版23 ピット群 (3) |
| 卷頭写真4 水晶・黒曜石・石英他 | 写真図版24 遺物出土状況 |
| 写真図版1 調査の経過 | 写真図版25 繩文土器 (1) |
| 写真図版2 調査区全景（上空北から） | 写真図版26 繩文土器 (2) |
| 写真図版3 調査区全景（上空南から） | 写真図版27 繩文土器 (3) |
| 写真図版4 遺構完掘状況 (1) | 写真図版28 繩文土器 (4) |
| 写真図版5 遺構完掘状況 (2) | 写真図版29 繩文土器 (5)・陶磁器類 (1) |
| 写真図版6 遺構完掘状況 (3) | 写真図版30 陶磁器類 (2) |
| 写真図版7 遺構完掘状況 (4) | 写真図版31 陶磁器類 (3)・瓦・古錢 |
| 写真図版8 遺構完掘状況 (5) | 写真図版32 土製品 |
| 写真図版9 基本割序・河川跡検出状況 | 写真図版33 石錘 |
| 写真図版10 土蟻群確認状況 1 | 写真図版34 石錘 |
| 写真図版11 土蟻群確認状況 2 | 写真図版35 石匙・管状石器 |
| 写真図版12 S K11・S K12・S K14検出状況 | 写真図版36 小型円形搔器 |
| 写真図版13 S X15・S K23遺物出土状況 | 写真図版37 猪器 |
| 写真図版14 S K16内 遺物出土状況 | 写真図版38 刨器 (1) |
| 写真図版15 S K16・S K17完掘状況 | 写真図版39 刨器 (2) |
| 写真図版16 S D18 断面・遺物出土状況 | 写真図版40 刨器 (3) |
| 写真図版17 S G 2・S G 3 検出状況 | 写真図版41 磨製石斧 |
| 写真図版18 S G 1 遺物包含層 調査状況 (1) | 写真図版42 磨製石斧他 |
| 写真図版19 S G 1 遺物包含層 調査状況 (2) | 写真図版43 磨製石斧・石核・石製円盤 |
| 写真図版20 S G 20河川跡検出状況 | 写真図版44 門石・磨石・石皿 |

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

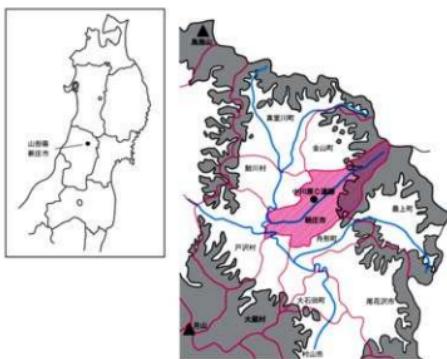
中川原C遺跡は水田や畠地の耕作などにより以前から土器や石器が出土することもあり、縄文時代の遺跡があることは知られていた。平成8年度に実施された遺跡分布調査によって、その存在が明らかにされ、「分布調査報告書(24)」(山形県教育委員会1997)において中川原C遺跡として登録されることになった。

そして平成11年から12年にかけて担い手育成基盤整備事業に係り中川原C遺跡の1次から3次にわたる発掘調査が実施されている。この時の調査成果は(財)山形県埋蔵文化財センター調査報告書第84集にまとめられた。遺跡は60,000m²に及ぶ広大な面積を持ち、縄文時代中期の大集落跡、後期の集落跡、中世の屋敷跡が複合した大遺跡であることが判明した。

平成16年、谷地小屋から野中地区への農道建設の計画が立ち上がり、その予定路線内の埋蔵文化財の所在確認と分布調査が必要となった。県教育委員会では平成17年度に計画路線内に沿って埋蔵文化財の有無を調べる分布調査を行った。その結果、計画路線は前回の第3次調査の発掘区に繋がる区域で、段丘中央部には中世の遺構も広がっている可能性があることが明らかになった。その成果をもとに県教育委員会と山形県農林水産部との協議の結果、中川原C遺跡の農道部分については(財)山形県埋蔵文化財センターが委託を受けて記録保存のための緊急発掘調査を行うことになった。

以上のような経緯をもって、(財)山形県埋蔵文化財センターでは山形県農林水産部との間で平成18年4月1日付けで緊急発掘調査についての委託契約を締結した。

中川原C遺跡の範囲は、東西300m、南北200mの広がりを持ち、大半は水田や畠地となっている。このうち今回の発掘調査は、農道建設にかかる区域の約1,000m²にわたって実施することとなった。



第1図 中川原C遺跡の位置

2 調査の経緯

(1) 現地での調査

中川原C遺跡第4次の調査は、山形県最上総合支庁産業経済部農村計画課や新庄市等関係機関との打ち合わせの後、5月11日から開始した。路線予定地内に調査区を設定後、17日から表土削除を始め、表土削除作業は5月下旬まで行われた。途中、残土量が多くなったため市道西側にも残土置き場が必要となり、隣接する地権者と話し合いを持ちながら表土除去を進めていった。全体として道路幅に沿って約1000m²の範囲を表土除去した。

5月下旬から調査区の南側から遺構検出及び精査を開始する。6月初めには基準点の設置(委託業務)をして、5mの方方形単位のグリッドを設定する。基準点測量は以前の調査区をも含めて遺跡全体を大きく含めて実施した。

6月上旬、全体の遺構検出が終了し、遺構検出状況の写真撮影と1/100で遺構配置図の作成をした。北側から遺構精査を開始した。調査区の中央部分は削平や開墾による土地の変更が著しく遺構の破壊や消滅している区域が存在した。

梅雨と冠水 6月中旬以降、梅雨の時期は調査区内が冠水する状況が続き、常時排水するようポンプを設置しての調査が続いた。個々の遺構の記録や写真撮影を並行して進めた。

6月下旬になると天候に恵まれ、溝跡や土壙等の掘り下げを精力的に進め、遺構精査はほぼ終了した。

6月25日から残っていた南端の河川跡の包含層下げを行い、遺構検出を始めた。斜面に沿って多数のピット群を検出した。縄文時代から中世以降の遺構が重複しているため、切り合いや遺物の出土位置について慎重に記録していった。

6月28日(水)に調査説明会を開催した。地元の北振小学校の児童30名をはじめ地域の人々や関係者など約80名の参加者がいた。6月29日以降、遺構精査を進め、記録図面作成や写真撮影・遺物の取り上げを進めていった。

7月に入り、梅雨による雨模様の天候が続いたが、完掘した部分の面整理をして、写真撮影や航空測量・撮影の準備を行った。

7月5日、空撮の委託業者(株)ワクニによる撮影・測量を行った。

7月7日に発掘器材の撤収を行い、現地における調査の全工程を終了した。現地調査は5月11日から7月7日までの延べ42日間となった。

(2) 整理・報告書作成

報告書作成 7月から報告書作成のため遺物の整理作業を開始した。7月は出土遺物の洗浄・ネーミングの基礎整理を進めた。整理対象となった遺構・遺物は土壙等11基・溝跡1条・ピット類63基・遺物包含層・河川跡である。遺物は整理箱で18箱になった。

8月には記録した図面類の整理と航空測量による測量図の校正を進め、図面の編集作業を業者に委託した。また、石器類の図化を開始し、9月末でトレースまでを終了し、10月からは土器や陶磁器類の実測や拓本作成を行った。

11月は遺構や遺物の図面編集を進め、並行して写真撮影を行っている。

12月、1月に図版や本文の執筆校正を行い、年度末の刊行となった。

表1 調査工程表

作業内容	発掘調査の工程					報告書作成の工程												8月			9月		10月		11月		12月		1月		2月	
	月 5月		6月			7月		月 7月		8月			9月		10月		11月		12月		1月		2月									
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4						
表土除去																																
グリッド設定																																
面整理・遺構検出																																
遺構精査																																
記録																																
写真測量																																
調査説明会																																
その他																																



調査風景（南から）



調査説明会（6/28）の様子（1）



調査説明会の様子（2）

II 遺跡の概観

1 地理的環境

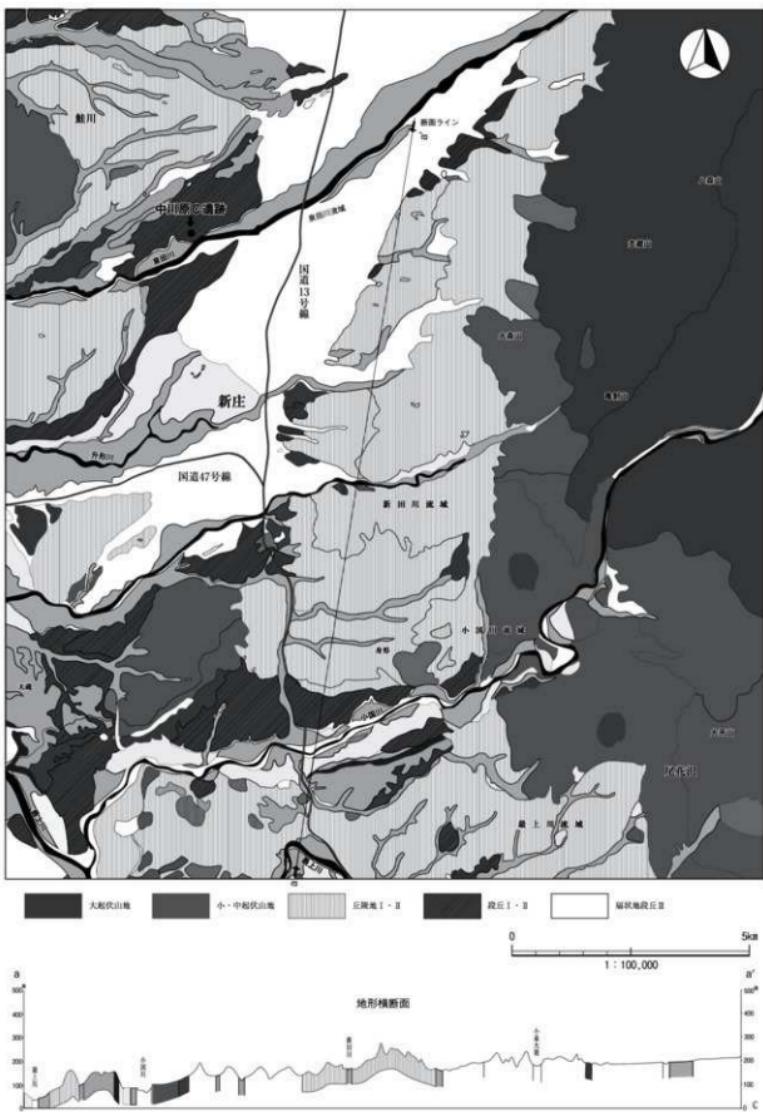
遺跡の所在 新庄市は最上地域の中心に位置し、東に神室山や八森山・杢藏山がそびえ、新庄盆地はその麓を意味する葛籠（かつろく）の名で知られている。南から新田川、戸前川、指首野川の合流した升形川、泉田川などが西流し、やがて最上川に注ぐ。JR奥羽本線が南北に通り、同陸羽西線と陸羽東線が新庄駅で交差し、これとはば並行して国道47号が通じる。この地域は古代前期は最上郡に属していたが、仁和2年（886）、最上・村山の二郡に分けられて、現在の最上地方と北村山地方は村山郡域となった。新庄市が最上郡となるのは近世初めになってからである。

遺跡の立地 中川原C遺跡のある野中地区は新庄盆地を流れる泉田川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は115mを測る。泉田川は奥羽山脈の神室山系に源を発し、西方に流れをとりながら最上川へと合流する。泉田川は盆地を流れ下る過程で扇状地と段丘を形成し、下流域には伏流水がいたるところに湧き出し、豊富な地下水は生活用水として利用されてきた。中川原地区はきれいな伏流水によりイバラトミヨが生息しているところとして注目されている。泉田川扇状地は横根山付近で二つに分岐し西に伸びるものと西南に伸びるものとにわかれるが、西南の扇状地は西山丘陵に近づくにつれ中位段丘を覆い、扇状地末端ではこの面と交差し、より低位の段丘に移行して終わっている。これらの段丘は新庄段丘と呼ばれ、中位段丘は尾花沢I面と対比同定されるもので、約3万年前の最終氷期に形成された面とみなされている。

周辺の土壤 段丘・台地に分布する土壤は多湿黒ボク土壤・黒ボク土壤があり、いずれも火山灰を母材とする。扇状地・自然堤防の低地には褐色低地土壤・灰色低地土壤・グライ土壤・黒粘土が分布し、砂・泥・礫などの非固結堆積岩また黒泥土壤は植物遺体の母材からなり、ほとんどは水田に利用されている。中川原C遺跡のある野中地区的河岸段丘は砂礫層が基盤にあり、表層土壤は腐植質多湿黒ボク土壤で非固結堆積岩を母材とし、堆積物は水成と風成堆積による。表土層は腐植の富む黒色の土で粘性が強い性質を持ち、酸性が強くリン酸の固定力も強い土壤である。また表層地質は第四紀更新世の段丘堆積物（礫や砂）からなっている。

植被 生 植生を見ると、中川原C遺跡付近の丘陵の現在の植生は杉やコナラの2次林で自然植生はコナラ林であるとされる。新庄周辺の山地の植生を概観するとコナラ・ミズナラ・ブナなどの落葉広葉樹を主構成とする冷温帯林に覆われている。特にチシマザサやクマザサのようなササ類の分布からは雪の影響を強く受けた植物が広く分布していることが伺える。

遺跡ののっている段丘周辺は小河川の開拓や侵食により萎縮状に入り組んだ地形となり、平坦部分は水田地帯となっていたが、現在は平成11年以降の圃場整備による耕地造成により旧来の地形は大きく変化している。さらに高速道路や市道の建設設計画もあり、景観が大きく変貌していくものと考えられる。



第2図 周辺の地形と横断面
(米地丈夫1980をもとに作成・簡略化)

2 歴史的環境

山形県遺跡地図情報(2004改訂版)には、新庄市内に本遺跡を含めて150箇所ほどの遺跡が登録されている。新庄北道路建設に係わる遺跡分布調査でも新規登録の遺跡があり、今後さらに増加していくものとみられる。新庄市や中川原C遺跡周辺の遺跡に関して時代順に概観する。

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、新庄市街を囲むように山麓の台地、標高120~130mの地点に乱馬堂遺跡・山屋遺跡・横前遺跡・新堤遺跡・南野遺跡・上ミ野A遺跡などの遺跡が点々と分布している。石刃技法によるナイフ形石器の時期(約20000年~25000年前)が主で、かつて新庄盆地が湖であった頃の湖畔に生活する狩猟民の痕跡を伺うことができる。

縄文時代 縄文時代の遺跡は、河川流域や台地の上に分布しており、特に泉田川流域には多くの縄文遺跡が集中している。時期的には縄文時代中期の遺跡が多い。中川原遺跡は中川原C遺跡から直線で北東に約1.5km離れたところにある遺跡で昭和45年新庄市教育委員会により調査され中期(大木8b式)と晩期の遺物が出土し、竪穴住居跡も確認されている。立泉川遺跡は、平成11年に(財)山形県埋蔵文化財センターによって、圃場整備に先立ち発掘調査が実施された。遺物の包含層から大量の遺物が出土し、縄文時代中期の集落の一部分を検出した。市街地に位置する宮内遺跡は晩期の遺跡で大量的遺物を出土している。鮭川流域でも縄文時代の遺跡が多数発見されており、津谷遺跡や名高遺跡・小反遺跡などで発掘調査が実施され、多くの住居跡や遺物が得られている。

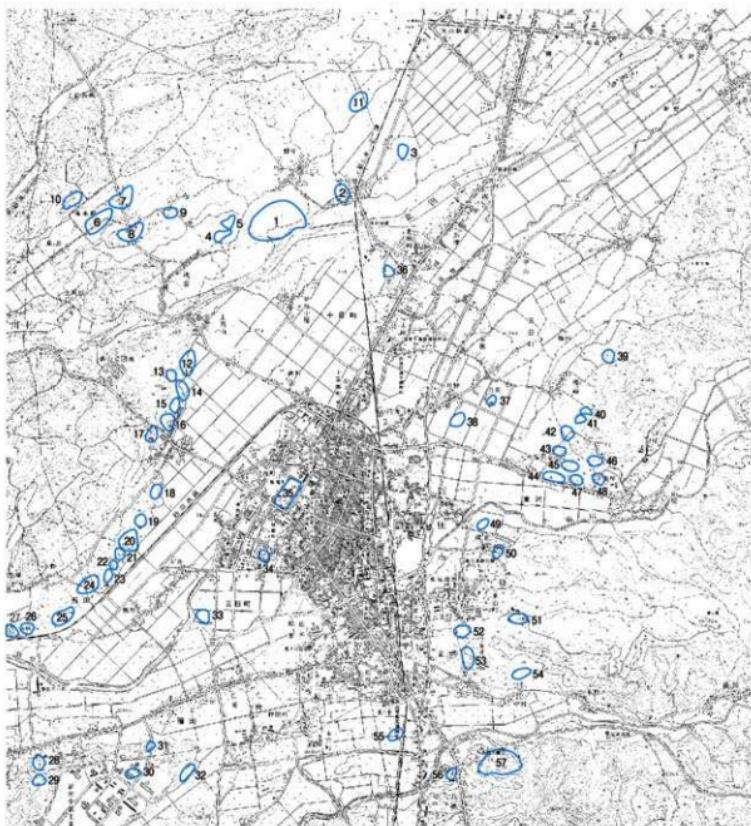
弥生時代 はっきりとした弥生時代の遺跡の存在は把握されていない。新田川流域の福田山遺跡群から弥生時代後期天王山式期の土器が出土しているが、撲点的な遺跡ではない。

古墳時代 古墳時代から古代にかけての遺跡についても確認されている遺跡は少ない。「続日本紀」天平九年(737)三月一日条の「比羅保許山」の地名や天平宝字三年(759)8月26日条の「平戎」駅設置の記事から古代の官道が新庄を通ったことは十分に考えられる。福田の八幡原に平安時代の須恵器窯跡がみつかったり、本合海周辺には須恵器を出土する遺跡が散在するなど、交通の要衝だったとみられ、水駅の存在や「和名抄」に載る梁田郷を比定する説もある。11世紀中頃には村山郡の中に折闇家領の寒河江・小田島荘が成立し、新庄村近は中世の国衙領として残ったと考えられる。

中世の城館跡 戦国時代の最上地方は鮭延氏・清水氏・細川氏の三勢力が分立し新庄はほぼ清水氏の支配下にあった。清水氏のもとに多くの在地領主が権力を構えており、平成12年にまとめられた『山形県中世城館跡調査報告書3 最上・庄内』では、新庄市域だけで海藤橋・安岐橋・角沢橋・鳥越橋など20ヶ所ほどの橋跡が登録されている。七代にわたって当地域を支配した清水氏は慶長19年(1614)、山形最上氏により滅ぼされ、新庄には最上家の日野将監が配置された。日野将監により現在の新庄市街の基礎が築かれた。

参考文献

- | | |
|--|------|
| 米地文夫 他 1979 「五万分の一土地分類基本調査 新庄」 | 山形県 |
| 大友義助 他 1988 「新庄市史第一巻」 | 新庄市 |
| 大友義助 他 2004 「図説 新庄市史」 | 新庄市 |
| 喜田・横山他 1986 「角川 日本地名大辞典6 山形県」 | 角川書店 |
| 長澤正機 他 2000 「山形県中世城館跡調査報告書第3集 庄内・最上地域」 山形県 | |

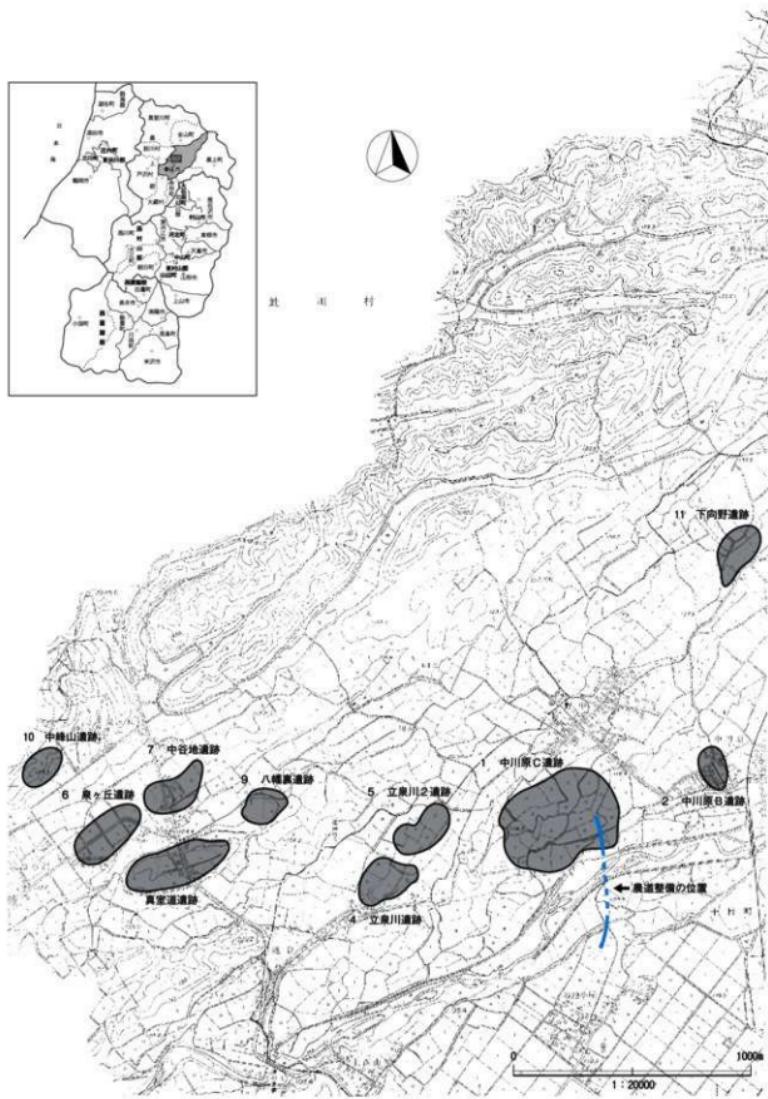


No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	中川原C遺跡	(縄文中期・後期・中世)	21	白山A遺跡	(旧石器)	41	山崎山C遺跡	(縄文)
2	中川原D遺跡	(縄文)	22	白山B遺跡	(旧石器・縄文)	42	山崎山D遺跡	(縄文中期)
3	中川原E遺跡	(縄文中期)	23	白山C遺跡	(縄文)	43	山崎山E遺跡	(縄文中期・後期)
4	笠置川遺跡	(縄文中期～後期)	24	上野遺跡	(縄文初期)	44	大根田A遺跡	(縄文)
5	立桑原C2遺跡	(縄文)	25	下上野遺跡	(縄文中期)	45	大根田C遺跡	(縄文)
6	風が丘遺跡	(縄文)	26	下高井遺跡	(縄文中期)	46	山崎山A遺跡	(縄文)
7	中澤遺跡	(縄文中期・中世・後期)	27	上高井遺跡	(縄文中期・後期)	47	大根田B遺跡	(縄文中期・後期・縄文晩期)
8	中澤遺跡	(旧石器・縄文早期)	28	高森A遺跡	(旧石器)	48	高森B遺跡	(旧石器)
9	八幡真北遺跡	(旧石器)	29	丸森C遺跡	(旧石器)	49	丸井山遺跡	(旧石器・中世)
10	中澤山遺跡	(縄文中期)	30	福田山A遺跡	(縄文・前期・後期)	50	柳原遺跡	(旧石器)
11	下野原遺跡	(縄文中期)	31	福田山B遺跡	(縄文)	51	安岐遺跡	(中世)
12	中澤山遺跡	(縄文中期)	32	中澤山A遺跡	(縄文・後期・縄文晩期)	52	新町後遺跡	(中世)
13	山崎C遺跡	(旧石器)	33	海老原遺跡	(中世)	53	新尾遺跡	(旧石器)
14	山崎D遺跡	(縄文初期)	34	宮内遺跡	(縄文)	54	猪ノ鼻遺跡	(中世)
15	山崎E遺跡	(旧石器)	35	新庄城	(中世～近世)	55	新町後	(縄文中期)
16	丁山崎A遺跡	(縄文)	36	高木小山遺跡	(旧石器・縄文)	56	鶴崎A遺跡	(縄文)
17	丁山崎B遺跡	(旧石器・縄文)	37	高木山遺跡	(縄文・後期・縄文晩期)	57	鳥越御跡	(中世)
18	山厚遺跡	(旧石器)	38	大津水道跡	(縄文中期)			
19	白山A遺跡	(旧石器)	39	梅ヶ崎山日遺跡	(縄文)			
20	白山D遺跡	(旧石器)	40	梅ヶ崎山A遺跡	(縄文中期)			

第3図 周辺の遺跡位置図（国土地理院発行）5万分の1地形図「新庄」使用

表2 周辺の遺跡一覧 (Noは第3図 周辺の遺跡位置図と同じ)

登録番号	種別	名 称	時 代	所 在 地	現 状	立 地
1 分244-17	集落跡	中川原C	縄	新庄市大字十日町字中川原	水田	段丘 114m
2 分26-4-14	散布地	中川原B	縄(晚期)	新庄市大字十日町字中川原	宅地、畠地	段丘 122m
3 887	集落跡	中川原	縄(中期)	新庄市十日町字中川原	畠・水田・境内	段丘 132m
4 分244-18	散布地	立巣川	縄(中期)	新庄市大字十日町字立巣川	水田、畠地	段丘 120m
5 分244-19	散布地	立巣川 Z	縄	新庄市大字十日町字立巣川	水田	段丘 110m
6 886	集落跡	泉ヶ丘	縄(中期)	新庄市十日町字泉ヶ丘	水田・畠地・宅地	台地 112m
7 59-26-81	散布地	谷谷地	縄(早・中・晚期)	新庄市大字十日町字谷谷地	畠地、水田	小丘陵 115m
8 分24-28-9	散布地	真室道	旧・縄(早期)	新庄市大字十日町字真室道	畠地、雜木林	小丘陵 111m
9 59-26-83	散布地	八幡裏	旧	新庄市大字十日町字八幡裏	畠地	小丘陵 113m
10 59-26-82	散布地	中峯山	縄(早期)	新庄市大字十日町字中峯山	畠地、荒地	小丘陵 120m
11 59-20-84	散布地	下野向	縄(前期)	新庄市大字十日町字下野向・向野	畠地、水田	平地 127m
12 59-24-74	散布地	山崎D	旧・縄(早・中期)	新庄市大字十日町字山崎、植子沢、上山崎	畠地、水田、杉林	小丘陵 118m
13 59-24-73	散布地	山崎 C	旧	新庄市大字十日町字山崎、植子沢	栗樹園	小丘陵 120m
14 59-24-72	散布地	山崎 B	縄(前期)	新庄市大字十日町字山崎、植子沢	畠地	小丘陵 100m
15 59-24-71	散布地	山崎 A	旧	新庄市大字十日町字山崎、西山、植子沢	畠地、雜木林	小丘陵 110m
16 59-24-70	散布地	下野崎 A	縄	新庄市大字十日町字下野崎、西山、植子沢	畠地、水田	小丘陵 110m
17 59-26-89	散布地	下山崎 B	旧・縄	新庄市大字十日町字下山崎	畠地、雜木林	小丘陵 110m
18 59-24-69	散布地	山岸	旧	新庄市大字飛田字山岸	畠地、荒地	小丘陵 95m
19 59-24-68	散布地	白山 E	旧	新庄市大字飛田字白山、後田	畠地、荒地	小丘陵 90m
20 59-24-67	散布地	白山 D	旧	新庄市大字飛田字白山、飛田	畠地	小丘陵 92m
21 59-24-66	散布地	白山 C	旧	新庄市大字飛田字白山、熊野堂、後田	畠地、杉林	小丘陵 92m
22 59-24-65	散布地	白山 B	旧・縄	新庄市大字飛田字白山、熊野堂、後田	畠地、水田、杉林	小丘陵 92m
23 59-24-64	散布地	白山 A	旧・縄	新庄市大字飛田字白山、熊野堂、後田	畠地、水田、杉林	小丘陵 90m
24 884	集落跡	上野	縄(前期)	新庄市大字飛田字上野	畠地、山林	段丘 90m
25 883	集落跡	下野上	縄(中期)	新庄市大字飛田字野上	畠地、山林	段丘 89m
26 882	集落跡	下馬札	縄(中期)	新庄市大字升形字下馬札	畠地、水田	段丘 85m
27 59-22-60	散布地	上木野 A	旧・縄	新庄市大字升形字上木野	畠地、桑畠、水田	段丘 86m
28 888	散布地	丸森 A	旧(後期)	新庄市大字本合字丸森 2642-1	水田、荒地、道路	丘陵 99m
29 889	散布地	丸森 B	旧(後期)	新庄市大字本合字丸森 1070他	ゴトク・練習場・道路	丘陵 100m
30 893	集落跡	福田山 A	縄(前・中)・弥	新庄市大字福田字福田山 735-101~104,770	工業団地・畠(花地)・山林	丘陵 88m
31 894	集落跡	福田山 B	縄・縄	新庄市大字福田字福田山 905,906,775他	畠・团地・山林	丘陵 95m
32 890	集落跡	仁原盛ノ沢 A	縄(晚期)	新庄市大字仁原字盛ノ沢 797~798	畠(荒地)・山林	丘陵 85m
33 59-26-90	城館跡	海藤館	中世	新庄市大字仁原字海藤館	水田	自然堤防 84m
34 885	集落跡	宮内	縄(後期)・平	新庄市官内町	宅地、水田、畠地	平地 94m
35 895	城館跡	新川城跡	室町・江戸	新庄市小田烏郭ノ内	宅地、原野	平地 98m
36 59-26-87	散布地	荒小屋	旧(未業)・縄	新庄市大字十日町字荒小屋	畠地、宅地、荒地	段丘 122m
37 59-22-41	散布地	桶荷前	縄・縄	新庄市大字五日町字桶荷前	畠地、水田	平地 117m
38 59-26-88	散布地	大清水	縄(晚期)	新庄市大字五日町字大清水	水田	自然堤防 110m
39 59-18-13	散布地	梅ヶ崎山 A	縄(中期)	新庄市大字五日町字梅ヶ崎山	畠地	段丘 125m
40 59-18-14	散布地	梅ヶ崎山 B	縄	新庄市大字五日町字梅ヶ崎山	畠地	山麓 145m
41 59-18-12	散布地	山崎山 C	縄	新庄市大字金沢字山崎山、大字五日町字梅ヶ崎山	畠地	段丘 130m
42 59-18-11	散布地	山崎山 B	縄(中期)	新庄市大字金沢字山崎山	畠地	平地 130m
43 59-18-9	散布地	大福裏 D	縄(中・後期)	新庄市大字金沢字大福裏	畠地	段丘 128m
44 59-18-7	散布地	大福裏 E	縄	新庄市大字金沢字大福裏・下山屋	畠地	段丘 125m
45 59-18-8	散布地	大福裏 C	縄	新庄市大字金沢字大福裏	畠地	段丘 130m
46 59-18-10	散布地	梅ヶ崎山 A	縄	新庄市大字金沢字梅ヶ崎山	畠地	段丘 135m
47 59-18-6	散布地	大福裏 A	旧・縄(前期)	新庄市大字金沢字大福裏・下山屋	畠地	段丘 135m
48 874	集落跡	山屋	旧	新庄市大字金沢字梅ヶ崎山	畠	丘陵 137m
49 875	集落跡	乱馬堂	旧・縄・中・近世	新庄市大字金沢字乱馬堂	水田、畠	段丘 110m
50 876	集落跡	横前	旧	新庄市大字金沢字金沢山	市営グラウンド・畠	段丘 114m
51 205-002	城館跡	安喰館	中世	新庄市大字金沢	山林	山頂 165m
52 59-18-3	散布地	前野	縄	新庄市大字金沢字前野・金沢山	畠地、荒地	段丘 120m
53 877	集落跡	新堤	旧	新庄市大字金沢字新堤	畠地、山林	段丘 113m
54 59-18-2	散布地	熊ノノ	中世	新庄市大字鳥越字熊ノノ堂	畠地、荒地	段丘 130m
55 59-16-1	散布地	新町後	縄(中期)	新庄市大字鳥越字新町後・本宮後	畠地、水田、山林	段丘 115m
56 59-19-14	散布地	胸場(田馬場 A)	縄	新庄市大字鳥越字胸場	畠地、一部山地	段丘 114m
57 205-001	城館跡	島越館	中世	新庄市大字鳥越字島山	山林、境内	山麓 190m



第4図 中川原C遺跡周辺の遺跡位置図

3 調査の方法

(1) 発掘調査

調査位置の基準 中川原C遺跡の調査では、遺跡・遺構の明確な位置を記録するために国土座標第IV系を基準としたグリッド網を設定した。測量基準杭の設定と水準点の移動にあたっては業者委託により、農道路線測量3級基準点のうち2点を標準点とし、調査区内に公共座標杭を設置し本遺跡のグリッド設定の基準杭とした。この公共座標のXY軸を基準に座標計算を行い、そのデータを基に、遺跡内に5m四方のグリッド網を設定した。各グリッドはX:-134.420.000 Y:-46.860.000を起点に、南から北に向かって1、2、3、4～と付した算用数字と、西から東に向かって1、2、3、4～と付した算用数字の組み合わせによって表示し、2-10グリッドや15-9グリッド等と呼称した。これらの各グリッドは、遺物の出土位置表示、遺構のおおまかな位置表示を行うためのものであり、遺構の平面断面の記録化作業の基準になるものもある。水準に関しては基準点2点に農道路線測量のBMを午点とし、3級水準測量に準じて行った。

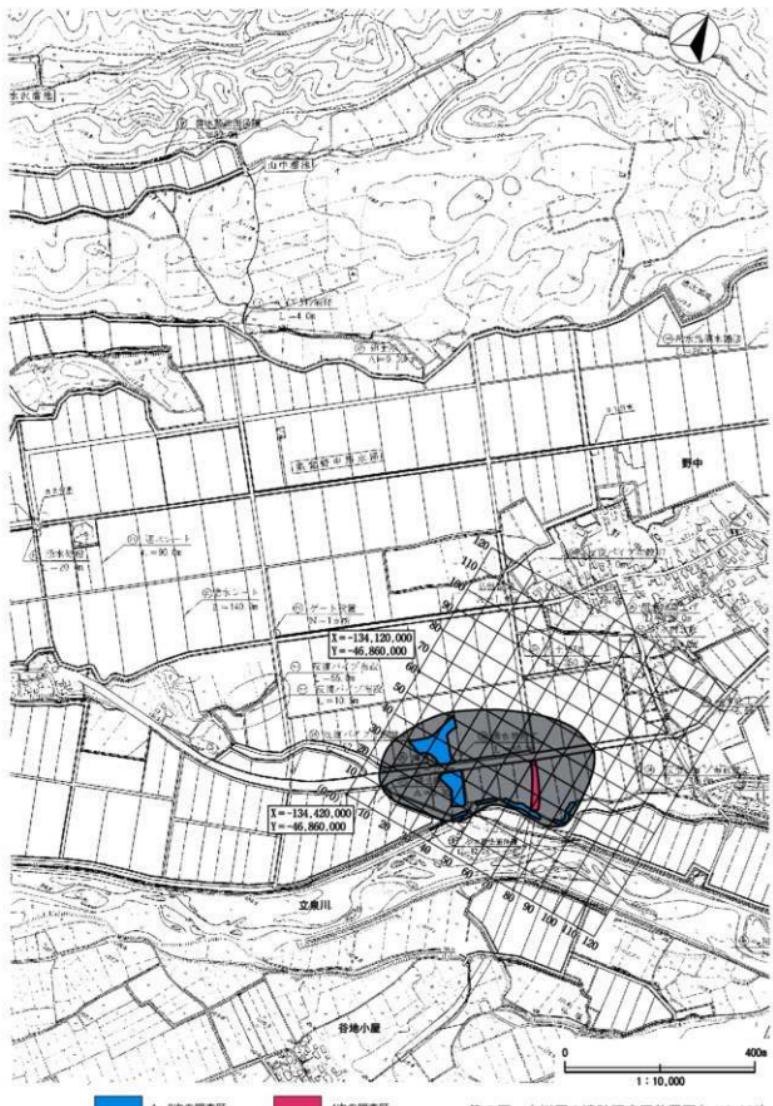
調査区 今回の調査区は道路建設予定地ということもあって調査範囲が南北に縱長であることから調査区を南北に横切る水路や傾斜面の境を目安として調査区を大きく北区・中央区・南区などと便宜的に区別した。これは本文においても調査区内におけるおおよその位置関係を示す場合に使用している。

記録方法 遺構の掘り込みにあたっては遺構の大きさや重複関係を考慮して土層観察用ベルトを随時設定し、写真撮影や実測図等の作成を行った。土層の注記には新版標準土色帖（1997年度版）を使用し目視による観察を行っている。遺構から出土した遺物は、遺構名や登録遺物番号を記載し、遺構外遺物はグリッド名や基本土層に準拠して取り上げている。

記録写真撮影は調査の進歩に合わせて随時6×7の中版カメラと35mm判のカメラとデジタルカメラを使用、全景は4インチ×5インチの大型カメラを併用した。フィルムはモノクロームとカラーリバーサルフィルムの2種を使用し、遺構の検出・土層断面・完掘状況の他、遺物の出土状態の撮影を適宜行った。調査の最後には、上空からの俯瞰撮影を行っている。遺構図は

遺構測量 1/20の縮尺を基本として作成した。より調査区内遺構の平面図・全体図の記録図作成は（株）ワクニに業務委託を行い実施した。

これらの発掘調査で得られた出土品・実測図・写真等の資料は、当センターの整理基準に準拠して整理を進め、デジタル処理した遺構図面については画像校正や図面編集を行い報告書作成に活用した。手取り図面や遺物実測図などは専用ケースに収納し、データ編集した記録類はDVDディスクに保存し、出土遺物は報告書作成終了後、収蔵庫に保管した。



第5図 中川原C遺跡調査区位置図(1/10,000)
(県営は場整備事業計画平面図を使用)

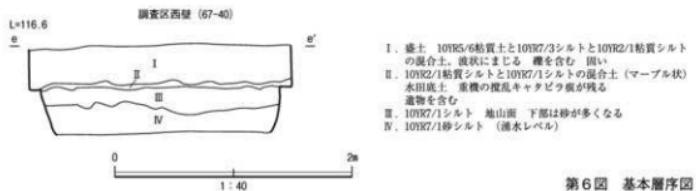
4 基本土層

中川原C遺跡における堆積土は、調査区内においてほぼ一様である。大きく4層に分層されI～IV層と表記した。土層観察は調査区西側壁面を利用し、南北に長い調査区の形状を勘案して、中央部e～e'、南部d～d'の2ヶ所で記録を行っている。また中央部の精査後、壁を掘り下げ、IV層以下の土層を記録した。基本堆積層の状態については、主に色調と土質、層厚を記し、合わせて観察時の所見を記した。以下各層の特徴を述べる。

- 盛 土 層**
- I a層：褐色粘質土層 30～40cm。造成盛土で調査区となった道路予定地全域に分布する。整地により移動攪乱されている。調査区外の水田地域では認められない。南半では層厚がやや薄い。
 - I b層：黒色粘質土と灰色粘質シルト土の混合土10～40cm。I層と同じ圃場整備時の盛土整地層である。小礫や遺物を巻き込み、粘性があり硬く縮まっている。南側の斜面部には厚さ40～60cmもの堆積が認められた。低い部分に多く盛土したと見られる。
 - 包 含 層**
 - II層：黒褐色土層 10～15cm。I層と粘質シルト層との間層で、土性としては腐植質土層で、旧堆積土ながら部分的に攪乱を受けている。縄文時代から現代にかけての遺物が出土していることを考えるとこの層中に縄文時代の生活面があったものと考えられ、部分的に後世の攪乱を受けたとみる。本層を遺物包含層と推定できる。

遺構面確認

 - III層：灰色粘質シルト層 層厚さ20cm。下部からグライ化し、白色化が強い。この面の上面を遺構確認面とした。段丘堆積層で薄く全域を覆っている。斜面部や河川跡ではやや褐色を呈している。この層中からは大きい礫が目立って入っており、わずかに窪んだところに、より多くの礫が堆積している。縄文時代の遺構はこの層に掘り込んでいる。
 - IV層：灰色砂質シルト層 25～35cm。調査区北側から中央付近に広がる。この層から湧水がみられる。
 - IV層以下はシルト層や砂層であり礫層に達する。本遺跡周辺の基盤層が礫・砂などの段丘堆積物であるとの認識と矛盾しない。また、IV層になると湧水が認められるが地下の伏流水が浸みだすためである。調査区周辺はかっての圃場整備時の造成により大半の包含層と遺構面が破壊されていた。



第6図 基本層序図

5 遺構・遺物の分布

(1) 遺構の分布

中川原C遺跡の第4次調査で検出された遺構は、土壌等11基、溝跡1条、ピット群、河川跡などである。この中で、ピット（小穴）については、近世以降から最近のものも登録しており、縄文時代のピットは若干検出数が減るものと考えられる。

遺跡周辺においては、平成11年以降に大規模なほ場整備事業等が実施され、水田区画や排水管・用水路・農道建設に伴う著しい削平や整地によって地表が改変された経緯があり、本遺跡内においても造成盛土などで削平された部分があった。また、以前は水田や道路になっていたこともあり、暗渠水路による擾乱が3箇所ほど見られ、一部遺構を破壊している状況が確かめられた。調査区の中央ではこれら圃場整備による造成工事により遺構が削平されたり、造成土による整地によって、他地区的遺物が紛れ込んだりするなどの状況を残す結果となっている。

遺構全体の配置は第7図に掲載した。また、これとは別に地形や隣接する遺構同士の関係を明確にするために第8～11図に区域ごとの遺構分布を示した。検出した遺構の分布状況を概観すると全体的に遺跡内に散在するが調査区中央の高まり部分と南端に多く認められた。検出された遺構は縄文時代のものが大半を占める。北側の河川跡付近はピットなどが僅かに分布するのみであった。

遺構の配置



表土の除去



遺構検出

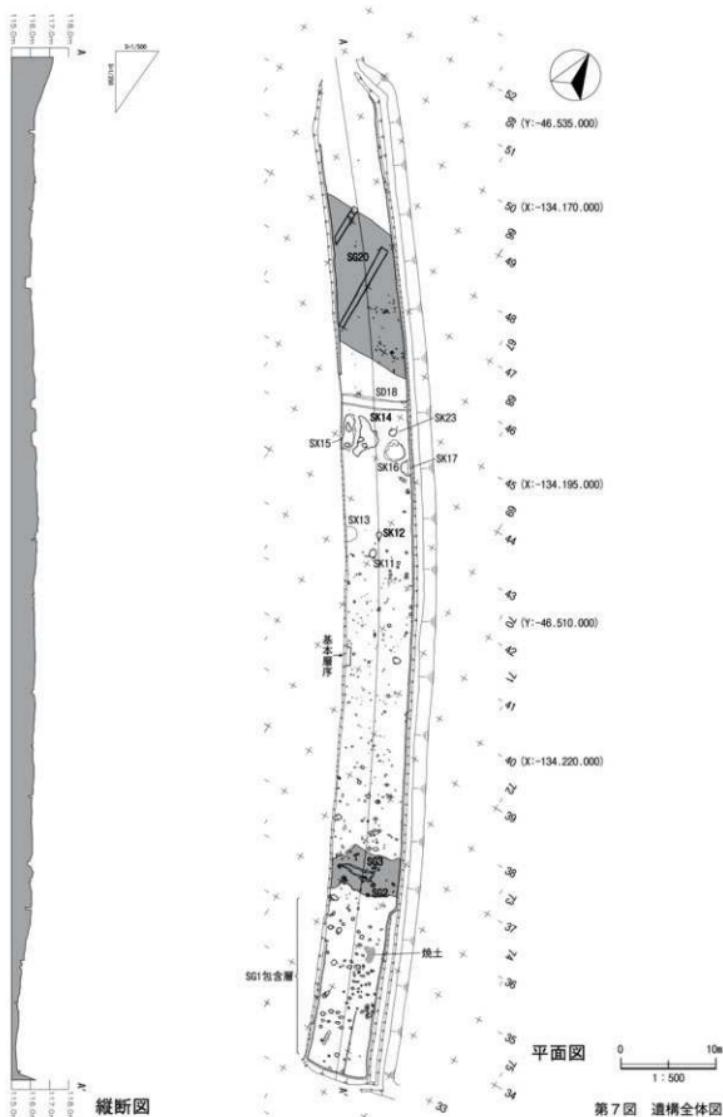


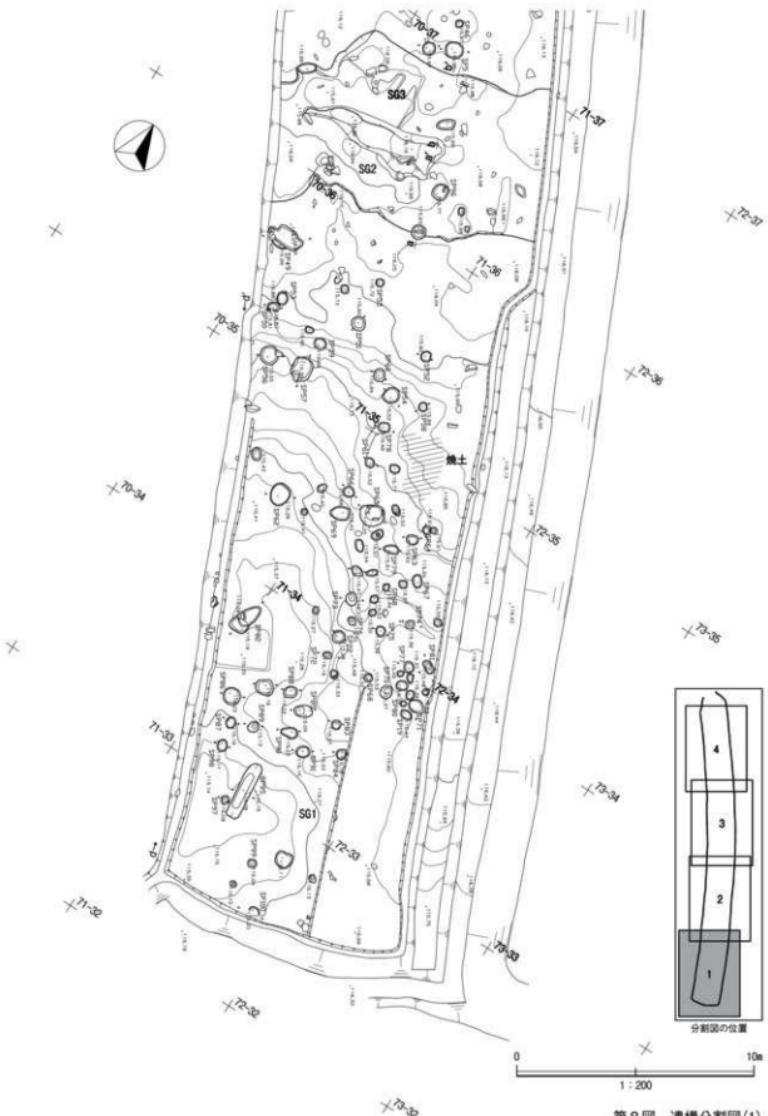
遺構精査



河川跡のトレンチ調査

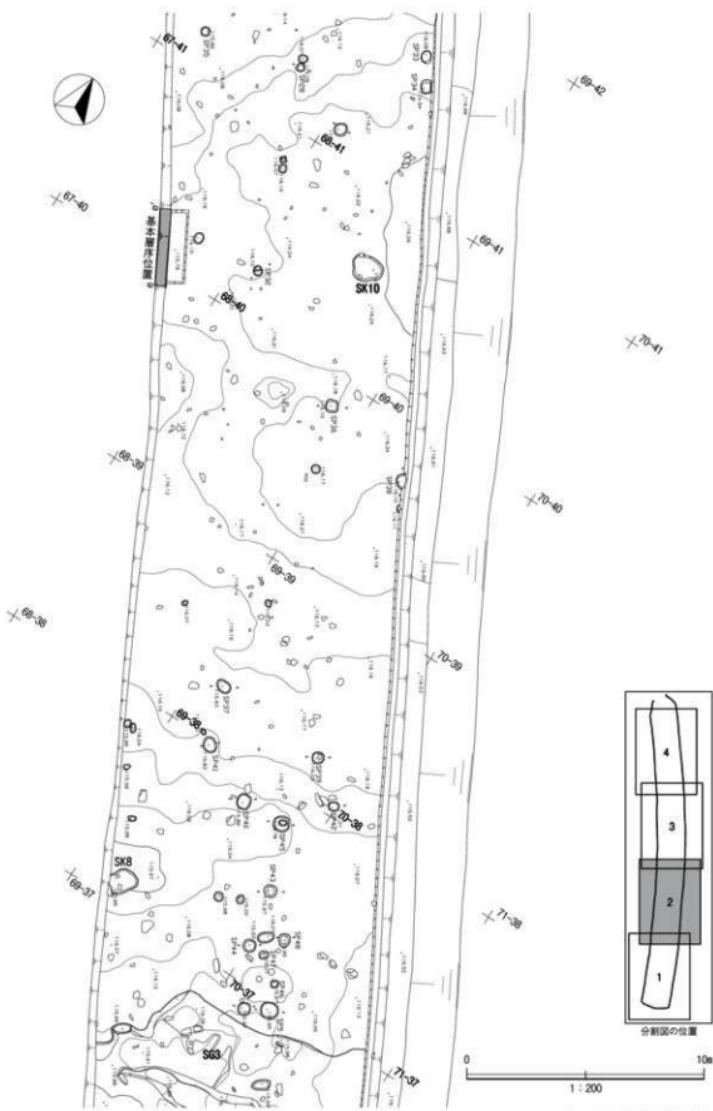
II 遺跡の概観



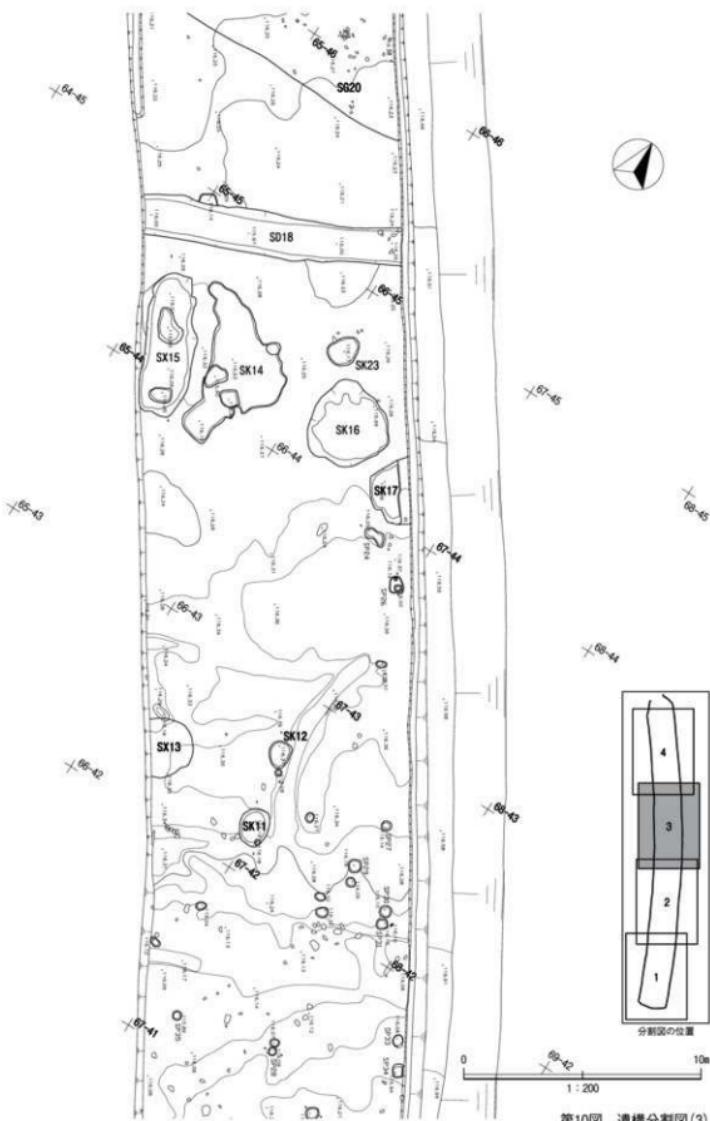


第8図 遺構分割図(1)

II 造詣の概観

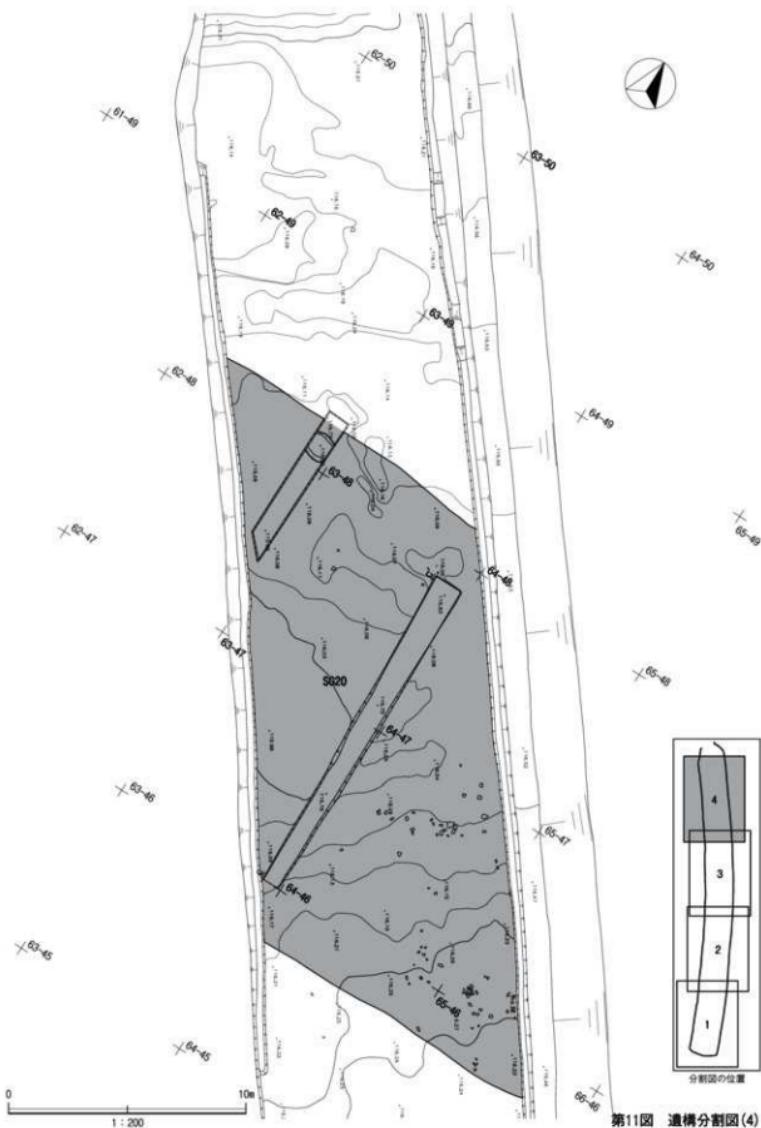


第9図 造構分割図(2)



第10図 遺構分割図(3)

II 遺跡の概観



第11図 遺構分割図(4)

(2) 遺物の分布

遺物の分布は遺構の分布状況とはほぼ同様な傾向を示しており、遺物の出土状況とその内訳について集計した。遺構内から2883点(67%)、遺構外から1354点(33%)の总数4248点が出土した。

遺 物 総 数

出土遺物の内訳は、土器・陶磁器類74%、石器・繩器類25%、古銭2点、その他自然遺物類で

あり、縄文時代の遺物が主体をなしている。中世以降の遺物は少ない。

縄文時代の遺物

縄文時代の遺物はSK11・SK12・SK16・SK17等の調査区中央の土壤とその周辺に分布が認められた。大半は摩滅したものであるが、部分的にまとまって出土したところがある。また、南側の斜面部の包含層やビット群からもまとまって土器や石器が出土した。I層内からも土器や石器が出土したが大半が摩滅したり破損したもので二次的に堆積したものである。

中世から近世の遺物は量的に少なく、包含層及びFS18・SG20・SX15などの溝跡や河川跡からの中世～近世の遺物の出土であった。表土付近や用水路跡からも陶磁器類の出土が認められた。

遺構内外、包含層からの出土数は第12～14図・表3・4に示した。グリッド毎の出土数量を全体視すると、調査区の南側と出土数の多かった土壤周辺からの遺物数が多いことが伺える。これは遺構検出のために包含層を掘り下げて調査を進めたことによる。

遺跡の年代を知る資料となる土器については従来の編年觀に準拠し、下記のように大きく区分した。

I群土器・・・縄文時代中期の土器

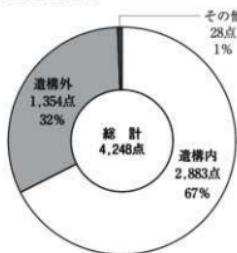
II群土器・・・縄文時代後期の土器

III群土器・・・中世の陶磁器

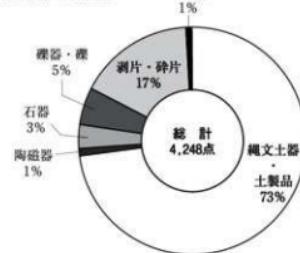
IV群土器・・・近世の陶磁器

遺物の詳細については報告文中でも触れているが、遺構内出土遺物を中心に図化に努め、組成表や観察表にまとめた。

遺物の出土数と割合

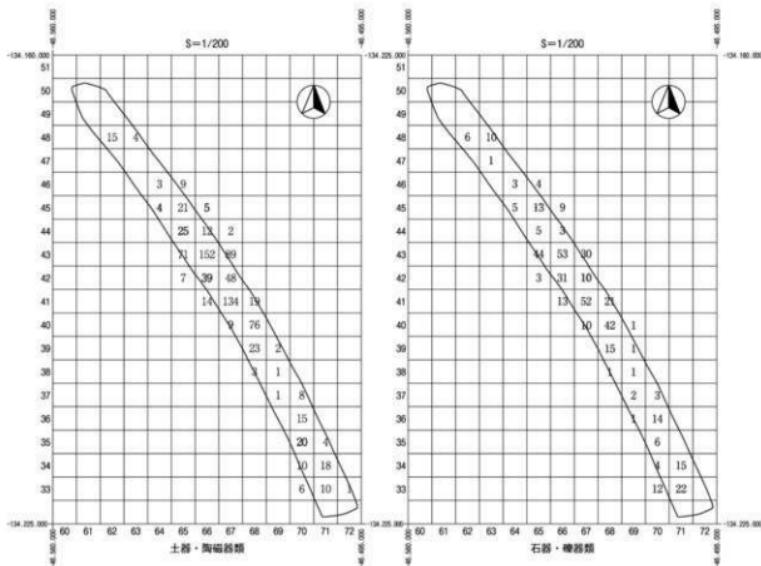


出土遺物の組成比

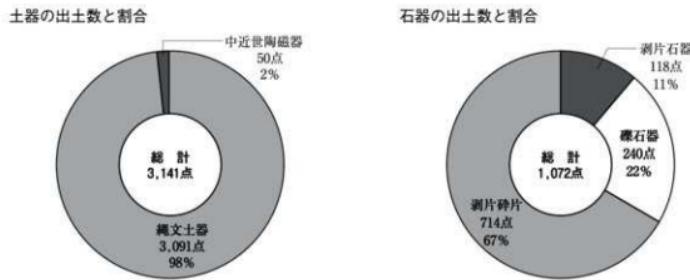


第12図 出土した遺物の数量 (1)

II 遺跡の概観



第13図 包含層グリッド別遺物出土数
(※遺構内は除く)



第14図 出土した遺物の数量 (2)

表3 中川原C遺跡遺構別遺物出土数（土器類）

Ⅱ 造跡の概観

表4 中川原C遺跡遺構別遺物出土数（石器、礫器類）

III 検出した遺構と遺物

1 土 壤

今回の調査で検出した土壌は8基を数える。また今回の調査で性格不明遺構としたものは3基を数える。土壌群は中央部に散在しており、円形・梢円形の平面プランを基調とした浅いものが主である。覆土内から縄文土器や石器が出土しており、縄文時代に属するものとして報告する。性格不明遺構も中央部に散在しており、不整円形の平面プランを基調としたものが主である。覆土内からは縄文土器や石器、中世から近世の陶磁器などを含んでおり、時期の新しいものも含まれている。また遺構の上部は近代以降の開墾や圃場整備による搅乱を受けている。

S K 10

本土壌は調査区中央の68-40グリッドに位置する。検出面はⅢ層上部で、標高116.2mで平坦な地形面である。平面形は不整円形を呈し、長径90cm・短径68cm・深さは18cmを測る。堆積層は3層確認した。F 1層は黒色の粘質土、F 2層は灰色シルト、F 3層は暗灰色の粘質シルトで炭片が混じっていた。底面は東側に向かってなだらかに傾斜している。周囲の壁は緩やかに立ち上がり、礫が部分的に壁際に張り付いて出土した。遺物はF 2層から縄文土器7点、石器1点が出土した。出土した縄文土器は深鉢の体部と口縁部のもので、沈線や磨り消し手法の縄文時代後期見られるものである。本土壌の時期は出土した遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

S K 11

本土壌は調査区中央の66-42グリッドに位置し、SK12と並ぶ。検出面はⅢ層上部で、標高116.18mで平坦な地形面である。平面形は円形を呈し、長径105cm・短径83cm・深さは16cmを測る。堆積層は2層確認した。F 1層は黒色腐植質土、F 2層は黒色の粘質シルトである。底面は中心部に向かってなだらかに傾斜している。周囲の壁は緩やかに立ち上がり、礫が堆積土中に張り付くように出土した。遺物はF 1層から縄文土器106点、石器類20点が出土した。出土した縄文土器は同一個体の土器片で接合したものもある。出土した土器は深鉢と考えられ口縁から垂下沈線や連弧状の沈線が施される。本土壌の時期は出土した遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

S K 12

本土壌は調査区中央の66-42グリッドに位置する。検出面は標高116.4m、Ⅲ層上部で平坦な地形面である。平面形は梢円形を呈し、長径82cm・短径64cm・深さは7cmを測る。堆積層は1層確認した。堆積土F 1層は黒褐色腐植質シルトである。底面は中心部に向かってなだらかに傾斜している。周囲の壁は緩やかに立ち上がり、遺物は堆積土中から縄文土器25点、土製円盤が1点出土した。出土した縄文土器は撚糸の地文に細い沈線がみられるものが多い。本土壌の時期は出土した遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

S K 14

本土壌は調査区中央の65-44グリッドで検出した遺構である。遺構検出面はⅢ層上面であ

III 検出した遺構と遺物

る。II層は擾乱土であり、本来の掘り込み面は不明であった。標高は116.25mで平坦な地形面である。西隣にSX15と接している。平面形は確認面で不整な楕円形を呈し、掘り進めたところ土壤の西半分が風倒木の影響を受けていることが判明した。倒木の擾乱状態を確認しながら調査していった。土壤の規模は検出面において長軸4.3m、短軸2.1m、深さは最大で38cmを測る。SK14の底面は凹凸のある不整楕円形となり、周囲の壁は緩やかに立ち上がり、疊が中央に堆積し部分的に壁際に張り付いて出土した。堆積土はレンズ状をなす自然堆積であり、8層に分けられた。F1層からF6層は緩慢な堆積でF2層とF3層は黒褐色粘質シルトで部分的に入り込んでいる。倒木痕の底面は丸く擂鉢状にくぼんでいる。壁は急な立ち上がりをみせる。堆積土は底部付近に黑色土が流れ込むように堆積していた。遺物はSK14の覆土と底面から縄文土器69点、石器類22点が出土し石錐が3点出土した。出土した土器は縄文や撚糸文の地文に細い沈線を描くものである。本土壙の時期は出土した遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

S K 16

本土壙は調査区中央東側の66-44グリッドに位置する。遺構確認面はIII層上面である。確認面の標高は116.26mで平坦な地形面である。平面形は確認面で不整な円形を呈している。本土壙の規模は完掘後、長軸2.4m、短軸2.1m、深さは23cmを測る。底面はほぼ円形となり、周囲の壁は緩やかに立ち上がり波を打ったようになっている。疊が東南角の壁間に張り付いて出土した。堆積土はレンズ状をなす自然堆積であり、4層に分けられた。F1層・F2層は黒色粘質シルトの緩慢な堆積でF3は灰色粘土で黒褐色粘質シルトの細粒が混じる。遺物は東壁際から管状土製品と石錐が出土し、中央付近の覆土中から縄文土器120点、石器類24点、疊類11点が出土した。縄文土器は口縁や体部に横方向に帶状の沈線と縄文が施文されるものである。本土壙の時期は出土した遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

S K 17

本土壙は調査区中央の東側66-44グリッドに位置する。遺構確認面はIII層上面である。確認面の標高は116.25mで平坦な地形面である。北隣にはSK16が位置する。本土壙は調査区の東壁に接しており、約半分ほどの検出となった。土壤はさらに東方向へとつながっている。平面形は確認面で円形を呈し、規模は完掘後において長軸2.3m、短軸1.1m、深さは33cmを測った。周囲の壁は緩やかに立ち上がり、疊が覆土中に部分的にまとまりながら出土した。堆積土はレンズ状をなす自然堆積であり、5層に分けられた。F1層・F2層は緩慢な堆積でF3からF5層は灰色粘質シルトで固く締まっている。遺物はF2の覆土に疊といっしょに出土した。

縄文土器102点、石器類11点、疊器3点が出土した。土器は口縁から体部にかけての沈線と磨り消し手法による特徴が認められる。本土壙は出土した遺物から縄文時代後期前葉の時期と考えられる。

S K 23

本土壙は調査区中央に位置し、SK16土壤の北隣にある。検出面はIII層上部である。平面形は不整円形を呈し、長径112cm・短径96cm・深さ13cmを測る。堆積層は1層確認した。覆土から底面にかけて拳大の疊が多く含まれており、底面は凹凸がある。遺物は縄文土器が20点、石器類が15点、疊器が2点出土した。石錐と石匙がそろって出土している。本土壙は出土した遺物から縄文時代後期前葉の時期と考えられる。

S X13

本遺構は調査区中央の西壁に接した66-42グリッドに位置する。東側にSK11・SK12が位置する。遺構検出面はⅢ層上部で、標高116.35mを測る。規模は長径2.3m、短径1.6mで平面形は確認した部分から円形になると推定される。この部分は以前の農道下に位置し、当時の道路の側溝跡なども検出している。検出面からの深さは3cmと浅く、底面は緩やかな凹凸があり、5cm前後の小礫が多数まとめて出土した。底部の灰白粘質シルトにも張り付くように検出され 小 磬 多 数 た。堆積土は黒褐色腐植質土であり、1層に分けられた。F 1層の礆に混じって磨滅した縄文土器や石器類が出土した。遺物は底面付近から縄文土器55点、石器類19点、礆6点、磁器（碗）1点が出土した。本遺構は堆積土や礆の包含状況・出土遺物の違いから時期的に新しいものと捉えられる。

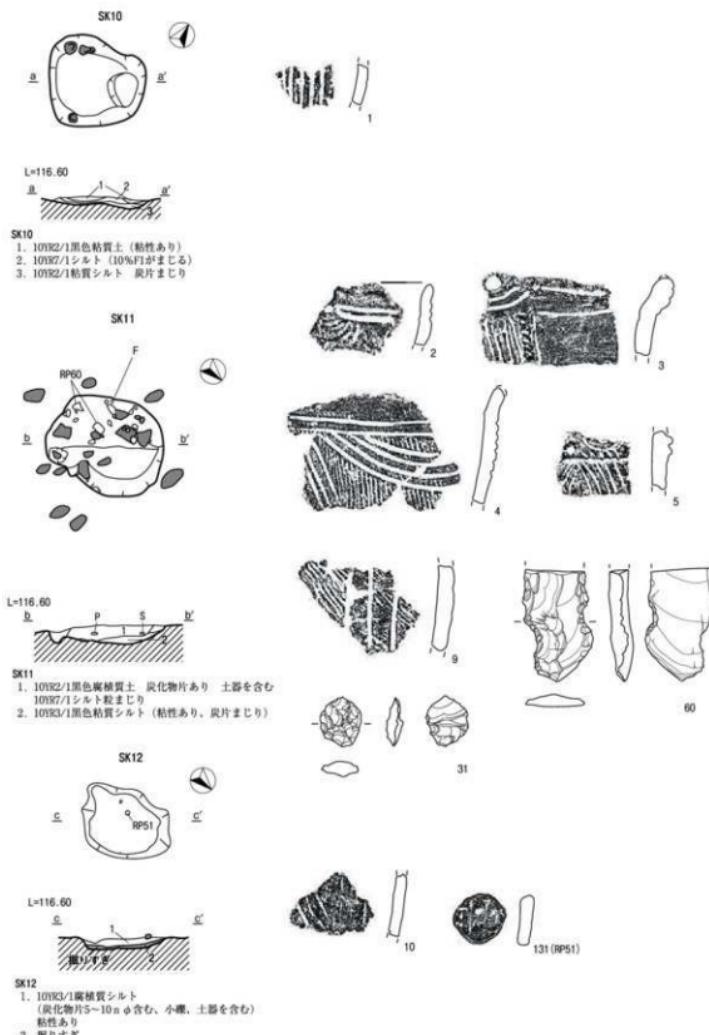
S X15

本土塙は調査区北、65-44グリッドに位置し、東隣にSK14が位置する。遺構検出面はⅢ層上部で、標高116.28mを測る。規模は長径3.9m、短径1.25mで平面形は隅丸長方形である。検出面からの深さは43cmを測り、底面は緩やかな起伏があり壁はながらに立ち上がる。堆積土はレンズ状をなす自然堆積であり、3層に分けられた。F 1層は黒色の腐植質土で拳大前後の大きさの礆が中央付近に堆積し部分的に壁際に張り付いて出土した。これらの礆に混じって縄文土器や石器類が出土した。F 2層は小礫が混じり、土器片が混じる。F 3層は灰色シルトで壁面からの流れ込み堆積である。SX15は、当初SK14と間違する遺構と考えられたが、堆積土層の相違や礆や遺物の包含状況の違いから時期的に差があるものと捉えている。遺物は主に覆土から縄文土器225点、珠洲系陶器片1点、陶磁器片3点、石器類41点、礆4点、石皿2点、石錘2点が出土した。陶磁器が出土すること、礆などといっしょに投げ込まれた状況であるこ 近世以降 とから、本遺構は近世以降の時期と考えられる。

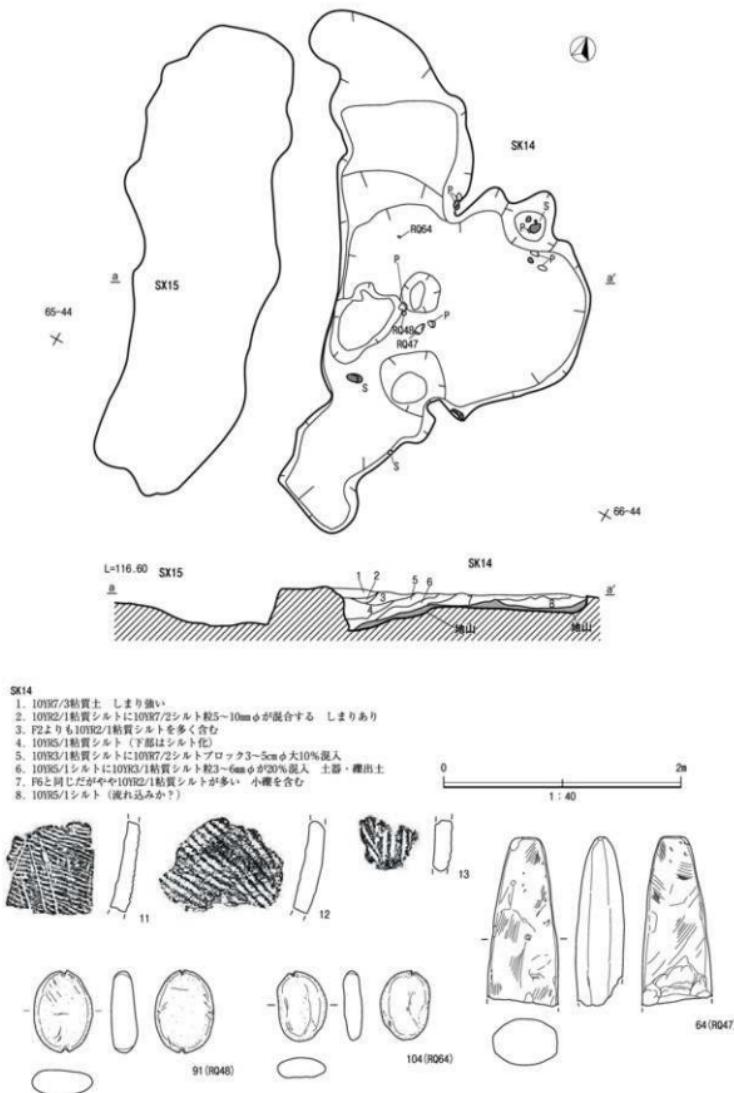
S X21

本遺構は調査区南端70-34グリッドに位置する。斜面部の包含層部分にあたり、遺構確認面はSG1・F 1層下部である。土器や石器がF 1層中の配石とともにまとめて出土しており、より上位の面で掘り込まれている。確認面の標高は115.5mで斜面部ながら平坦な地形面となっている。付近には多数のピット群が分布する。平面形は不整円形を呈しているが壁面は確認できなかった。本土塙の規模は遺物の検出面においておよそ長軸60cm、短軸45cmほどであったものと予想される。遺物は検出面から礆と石器剥片がまとめて出土した。特に大型の礆のそばから石英製の剥片がまとめて出土したことから、付近で石英を材料にした石器製作が行われ 石英片出土 ていたと推測している。

III 検出した遺構と遺物

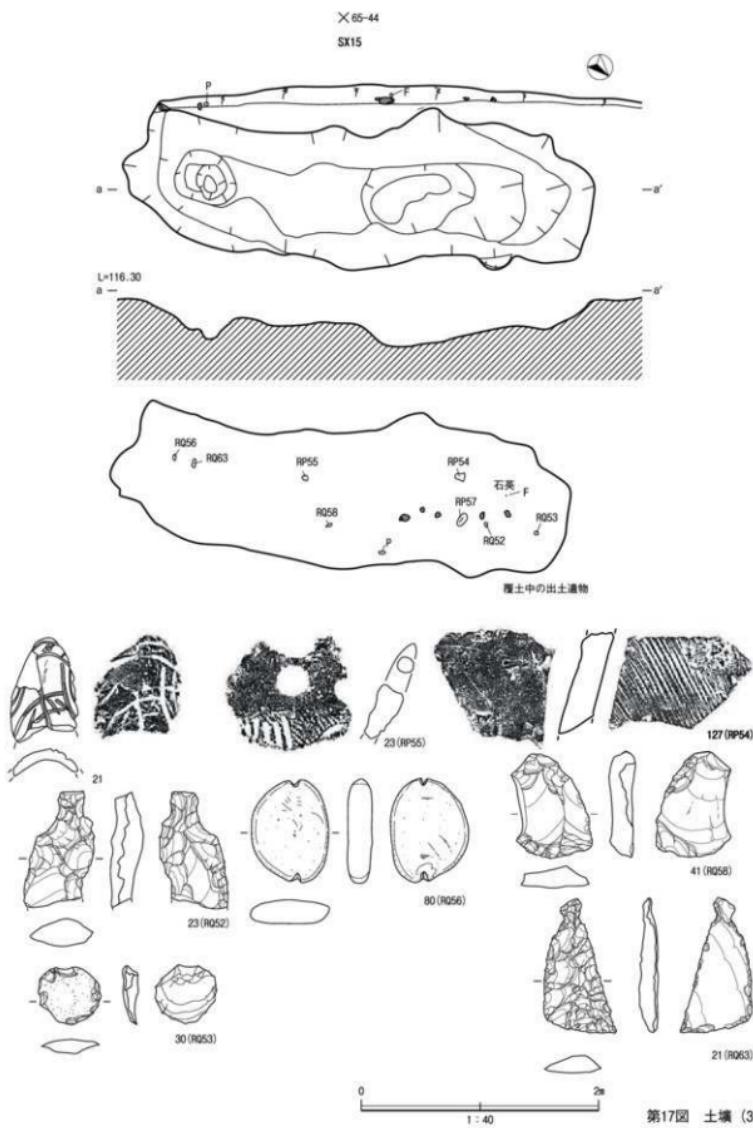


第15図 土壌 (1)

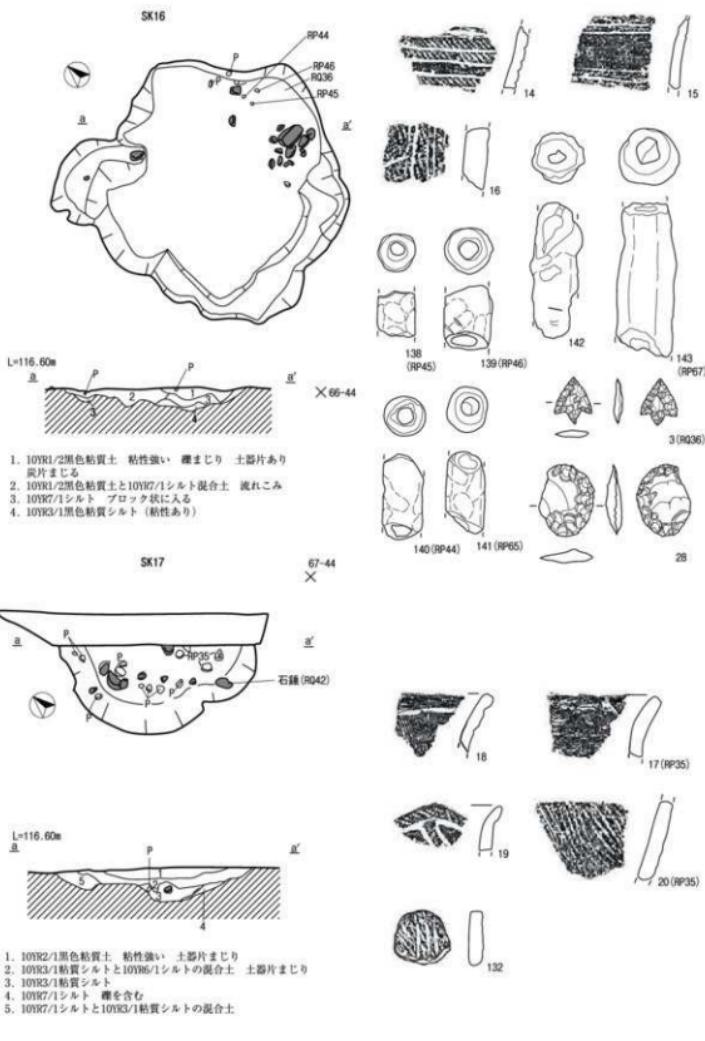


第16図 土壌 (2)

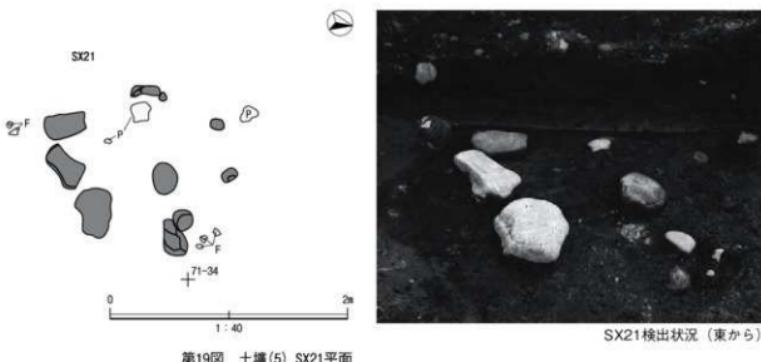
III 検出した遺構と遺物



第17図 土壌 (3)



第18図 土壌 (4)



第19図 土壌(5) SX21平面

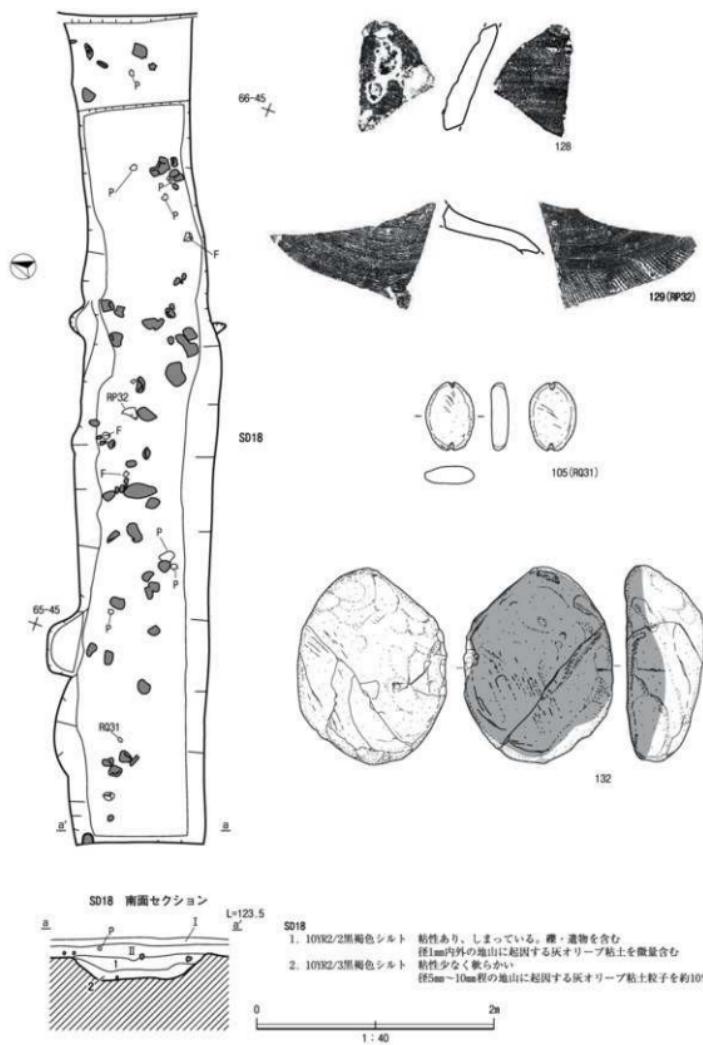
2 溝 跡

今回の調査で検出された溝跡は1条である。ただ畑や水田の用水路跡など、近年まで使用されていたものも確認している。特に北側に検出した溝跡は暗渠施設の溝跡で、圃場整備前の最近のものと考えられた。近世以前の溝跡と考えられるのはSD18の1条のみである。

SD18溝跡

本溝跡は、調査区北側の65-44グリッドで検出した。東壁から西に延び、西側の壁にぶつかる。遺構確認面はⅢ層で、幅110cm、深さ40~55cmを測る。溝断面形は淵が皿状をなし中央部はかまぼこ形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかである。溝跡の軸方向はN-45°-Eになる。堆積層は2層に分層でき、どちらも自然流入による堆積土である。F1層は黒褐色シルトで拳大の礫とともに珠洲系亮片が出土した。F2層は灰オリーブ色の粘質シルトの粒子が混じる。F1層からF2層にかけては上下のレベル差をもって大小様々な礫が多数出土し、合わせて縄文時代から中世の遺物が出土した。溝の掘り込まれた時期は中世以降と考えられるものの正確な時期は不明である。

出土遺物は縄文土器37点、珠洲系陶器2点、石器類12点、礫器7点等である。縄文土器は縄文時代後期前葉と思われる土器片で摩滅が著しい。珠洲系陶器は壺の口縁部片である。石錘が1点出土している。これらの遺物は堆積土への二次的な流れ込みとみられ、これより新しい遺物の混入はないため、SD18溝跡は中世（13世紀）以降の遺構と考えられる。



第20図 溝跡SD18

3 ピット群

今回の調査で検出したピット（小穴）は63基を数える。これらのピットは時期的に縄文時代に相当するものと、その他の時期のものと区分できそうである。検出層位はⅢ層上面であるが掘り込み面そのものは実際検出した層位面よりも上位の層であったものが多いと考えられた。ピット群の平面分布を見ると縄文時代の土壤がまとまって確認された調査区中央部と南側斜面に集中している。形態的には円形・梢円形の平面プランを基調とした浅いものが主である。覆土内から縄文土器や石器・礫が出土している。

4 種類に分類 ピットの形態や構造から、4種類に分類する。

A類：円形梢円形の形態で、断面が浅鉢状になる。

(SP5・SP36・SP45・SP47・SP63・SP88・SP93など)

B類：円形梢円形の形態で、掘り込みが30~50cmと深い。

(SP41・SP51・SP54・SP70・SP85など)

C類：大きな扁平な礫が覆土中に入る。

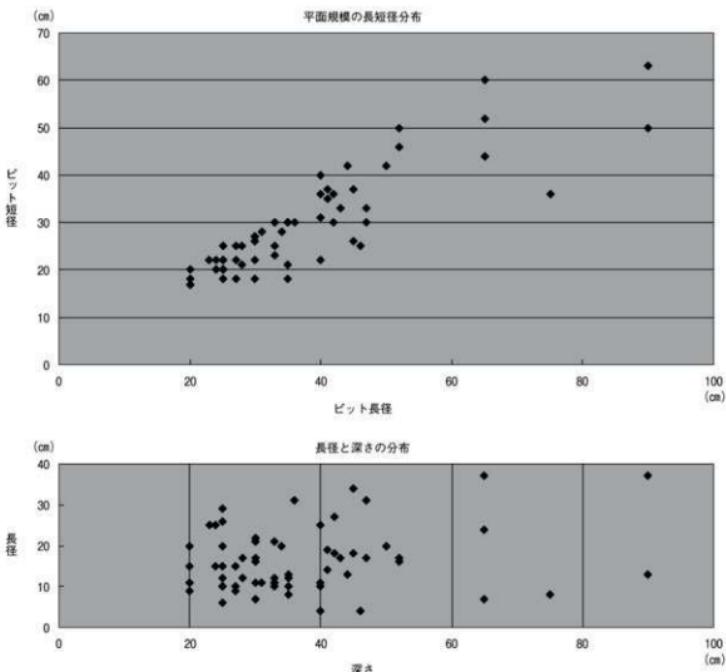
(SP49・SP57・SP65・SP81・SP82・SP86・SP91・SP94など)

D類：検出面の中央に柱痕のような土色の変化が見られるもの。

(SP22・SP26・SP75・SP83など)

ピットの状態 A類のSP5・SP36・SP45は浅い掘り込みをみせ、底面は皿状・碗状の形態を持つ。堆積土は単純層を見せるものが多いが、覆土に小礫や土器片を含むものもある。B類のSP51は確認面から31cmの深さを持ち、壁際と覆土から拳大の礫が出土した。SP54は確認面から34cmの深さを持ち、覆土上部から頭大の礫が出土した。SP70も確認面から26cmの深さを持ち、覆土上部の壁際から礫が出土した。B類としたピットの堆積土は黒色粘質シルトのものが多く、また壁が直下に掘り込んでいる。柱等が埋め込まれたり打ち込まれた可能性が高いピットと考えられる。C類のSP57は平面梢円形で断面は桶状を呈する。覆土F1層に人頭大の礫と縄文土器が出土した。SP82は長径90cm・短径50cmの細長い形態で東側がやや深い。中央部に扁平な大きな礫が斜位に入り込んでいる。SP86・SP91・SP94はともにピット中央に大きな礫が埋没するように検出した。SP91の礫は本来、直に立っていたものが傾いた状況になっている。縄文土器片が出土している。D類のSP22は長径34cm、短径28cm、深さ20cmの大きさを持ち、平面はほぼ円形を呈する。ピット中心に柱痕のような黒褐色の腐植質シルトが堆積し、縄文土器片が含まれていた。SP26も同様な堆積土をみせる。SP75やSP85も灰色粘質シルトに腐植質シルトが斑状に混じり柱痕を示すように堆積している。

長短径グラフ 表5にピットの観察表を、第21図にピット群の長短径グラフを掲載した。検出したピットの規模は12~73cm×13~83cmと大小様々であるが、長径20~40cmのものが全体の約7割を占めており、深さも10~30cmのものが大部分である。その中に柱痕が確認されたものもいくつか確かめられた。南側の斜面から谷部分にB類・C類のピット群が特に集中し、礫の含まれるもののが目立っている。この傾向は前回の第3次調査のE区の遺構分布に類似する。検出したピットの大半は縄文時代に属するものとして報告するが、中には時期が判別できないピットもあり、SD18溝跡覆土と同様な黒褐色腐植質の堆積土を有しているものは中世以降のピットの可能性が高い。



第21図 ピット群の規模

4 焼 土 跡

調査区南側71-34グリッドの包含層斜面部で検出した。褐色の粘質シルトが赤褐色に酸化していた。焼土の平面形は不整円形で、大きさは80cm×75cmを測る。焼土の厚さは酸化の著しい斜面の焼土跡部分で約6cmを測り、焼土の下の土も3cmほど熱を受けて硬化していた。焼土中に混じっている小礫も上部が熱を受けた痕跡が認められた。焼土にはⅢ層の茶褐色のシルトと炭化物粒も含み、縄文土器の破片が混じっていることから縄文時代の所産と考えられる。焼土跡は斜面の上部に位置し、周辺には多数のピットが検出されているが住居跡の炉跡をなすものかどうかは確認できなかった。

5 河 川 跡

今回の調査で大小2本の河川跡が検出された。いずれも短期間に流れ込んだ河川堆積と考えられる。南側のSG1河川跡とした遺構に関しては規模や位置から谷部分が埋まったものと考え

遺物包含層として扱った。

SG2・SG3 小河川跡

調査区の南70-36~71-36グリッドにおいて検出した。東壁から西壁にかけて広がる自然な流路を確認し、SG2・SG3と命名した。調査区内西端では合流している。一体化していた可能性が高い。検出面と現地表面との比高は50cmほどを測る。また底面は凹凸が著しく、全体としてはレンズ状に窪み、底面レベルは南東側から西側に下がっている。SG2・SG3の堆積層は検出面から3層を数え、F1・F2層内から遺物の出土をみた。遺物は縄文時代の土器や石器、水晶片出土などで集中して出土する状況には無く、土器片の大半が摩滅していることから二次的な堆積によるものと考えられる。注目すべきものとして水晶片が出土した。

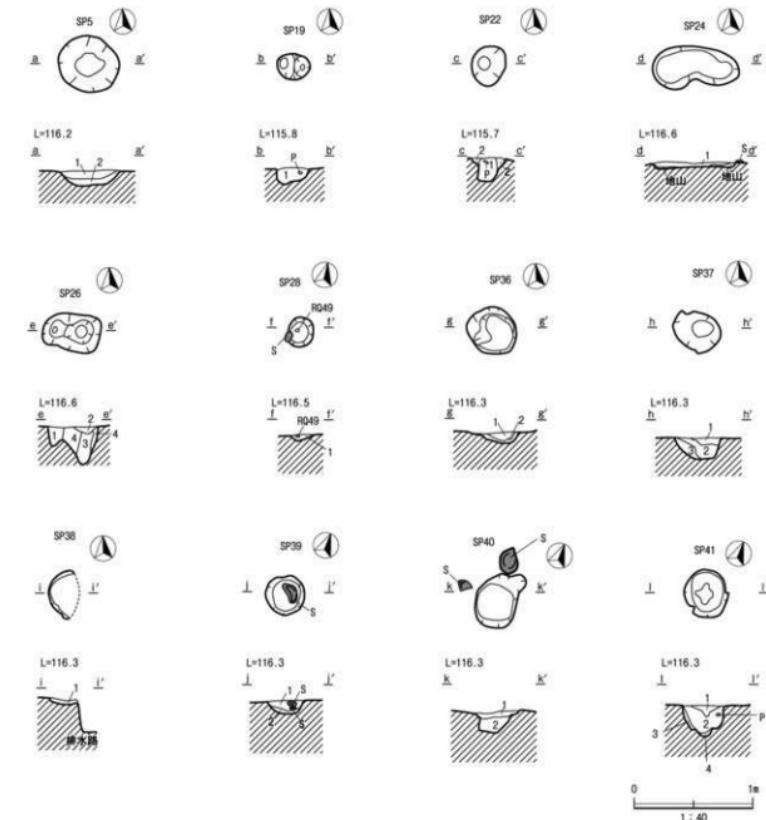
SG20 河川跡

調査区北側の63-46から64-47グリッドにかけて検出した。遺構確認面はⅢ層上面である。当初、地形の傾斜した部分と考えたが、大小の礫が入り込んでいるため、試掘トレーンチを設けて掘り下げたところ、約11m幅で、深さが50cmを越える河川跡であることがわかった。底面のレベルから、SG20河川跡は南から西方向に流下していると推測される。自然な流れから凹地化し、流路となつたと考えられ、砂礫の堆積は少なく縁に沿って小礫が入り込んでいる程度である。覆土内出土の遺物は少なく、F1層に縄文時代の土器や石器をわずかに含んでいる程度であった。この河川跡からは縄文土器34点、陶磁器片5点、石錘が5点、石匙2点、磨製石斧1点、石器類22点が出土した。近世以降の陶磁器が含まれていることから相対として新しい時期の河川跡と考えられる。

表5 ピット群(小穴)観察表

No.	遺構名	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	遺物	繩	堆積土	備考
1	SP 5	70-36	32	46	16			2	
2	SP 19	71-33	28	21	17	土器・石器		1	
3	SP 22	71-33	34	28	20	土器・石器		2	
4	SP 24	66-43	75	36	8	土器・石器		1	
5	SP 26	66-43	47	33	31	石器		4	
6	SP 28	67-41	25	20	6	土器・RQ49	○	1	
7	SP 36	69-39	40	40	10			2	
8	SP 37	69-38	42	30	18			3	
9	SP 38	69-39	40	22	4			1	半分検出
10	SP 39	36-38	31	28	11	土器	○	2	
11	SP 40	69-37	41	35	19	土器	○	2	
12	SP 41	69-37	40	36	25	土器		4	
13	SP 42	69-38	25	22	12	土器・石器	○	2	
14	SP 43	69-37	33	30	10		○	2	
15	SP 44	70-39	43	33	17	土器		3	
16	SP 45	69-37	44	42	13			2	
17	SP 46	70-37	20	17	11			2	
18	SP 47	70-37	35	30	10			1	
19	SP 48	70-37	30	26	7			1	
20	SP 49	70-35	90	63	37	土器	○	3	
21	SP 50	70-35	65	44	7			1	
22	SP 51	70-35	36	30	31	土器・石器	○	1	
23	SP 52	70-34	30	22	11	土器	○	2	
24	SP 53	70-35	33	23	12	土器		3	
25	SP 54	70-34	45	37	34		○	3	
26	SP 56	70-35	50	42	20	土器		1	
27	SP 57	70-35	65	52	24	土器	○	2	
28	SP 61	71-34	24	20	25		○	1	
29	SP 62	70-34	52	50	17		○	2	
30	SP 63	71-34	27	22	9	土器		2	
31	SP 64	71-34	20	20	15	土器		1	
32	SP 65	71-34	63	60	37		○	2	
33	SP 66	71-34	30	27	17			2	
34	SP 67	71-34	25	22	20	土器	○	2	
35	SP 68	71-33	20	18	20			1	
36	SP 69	71-34	46	25	4			2	
37	SP 70	71-33	25	18	26	土器	○	1	
38	SP 71	71-33	47	30	17	土器・石器	○	2	
39	SP 72	71-33	27	18	15	土器	○	2	
40	SP 73	71-34	33	25	21	土器	○	3	
41	SP 74	71-34	25	20	10			1	
42	SP 75	71-34	25	20	15			2	
43	SP 77	71-34	30	26	22			1	
44	SP 78	70-34	25	25	29			2	
45	SP 79	71-34	35	21	8	石器		2	
46	SP 80	71-33	23	22	25			1	
47	SP 81	71-34	35	18	13		○	1	
48	SP 82	70-33	90	50	13	土器	○	2	
49	SP 83	71-33	24	22	15	土器		2	
50	SP 84	71-33	30	27	16			1	
51	SP 85	71-33	45	26	18	土器・石器		2	
52	SP 86	71-33	42	36	27	石器	○	1	根際に掌大の繩
53	SP 87	71-33	28	25	12	土器	○	1	
54	SP 88	71-33	27	25	10			1	
55	SP 89	71-33	30	18	21	土器・石器		1	
56	SP 90	71-33	40	31	11	土器		1	
57	SP 91	71-33	35	30	12		○	1	
58	SP 92	71-34	25	20	10			1	
59	SP 93	71-33	41	37	14			2	
60	SP 94	71-33	33	30	11		○	1	
61	SP 97	71-32	20	17	9			1	
62	SP 98	71-32	22	18	10			1	
63	SP100	71-32	34		55	土器	○	2	南壁半分検出

III 検出した遺構と遺物



SP5

1. 10YR2/1シルト 細片を含む
10YR2/1シルト 粘土粒まじる20%
2. 10YR5/2シルト 粘土小粒まじり

SP19

1. 10YR2/1粘質シルト 細片少量含む
10YR7/2シルト (シルト粒10% 5~10mm)

SP22

1. 10YR2/1粘質シルト 土器片含む 粘性あり 細片含む
2. 10YR2/1粘質土 (10YR7/2シルトと10YR5/1シルト5~10mm) が混在する

SP24

1. 10YR3/1黒色シルト 粘性あり
灰片まじり、小粒5~8mmあり
鈍土上部含む

SP26

1. 10YR2/1粘質シルトと10YR7/1シルト
粒状にまじり土 粘性あり
2. 10YR2/1粘質土 しまりあり 細片を含む
3. 10YR2/1粘質土 細片まじり (粗面)
4. 10YR3/1粘質土と10YR7/1シルトの混合土
まだら状にまじる

SP28

1. 10YR3/1黑色シルト、粘性少ない
灰片小5~10mm がまじり 土難 (RQ49) が入る

SP36

1. 10YR2/1粘質シルト (10YR2/1シルトブロック3~5mm
含む) 粘性あり
2. 10YR2/1シルトに粒状に10YR2/1粘質土が10% まじる
セカクラン土の可能性あり

SP37

1. 10YR2/1灰色粘質シルト (10YR7/1シルトブロック10%
まじり) 粘性あり
2. 10YR2/1粘質シルトと10YR7/1シルトが5~20mm が斑状に
混合する
3. 10YR4/4灰褐色シルト (壁の崩れ)

SP38

1. 10YR3/1粘質シルトに10YR7/1シルトが
粒状にまじる

SP39

1. 10YR2/1黒色粘質シルト
粘性あり (薄削入)
2. 10YR2/1粘質シルト (10YR7/1シルトが
50% まだら状に入る)

SP40

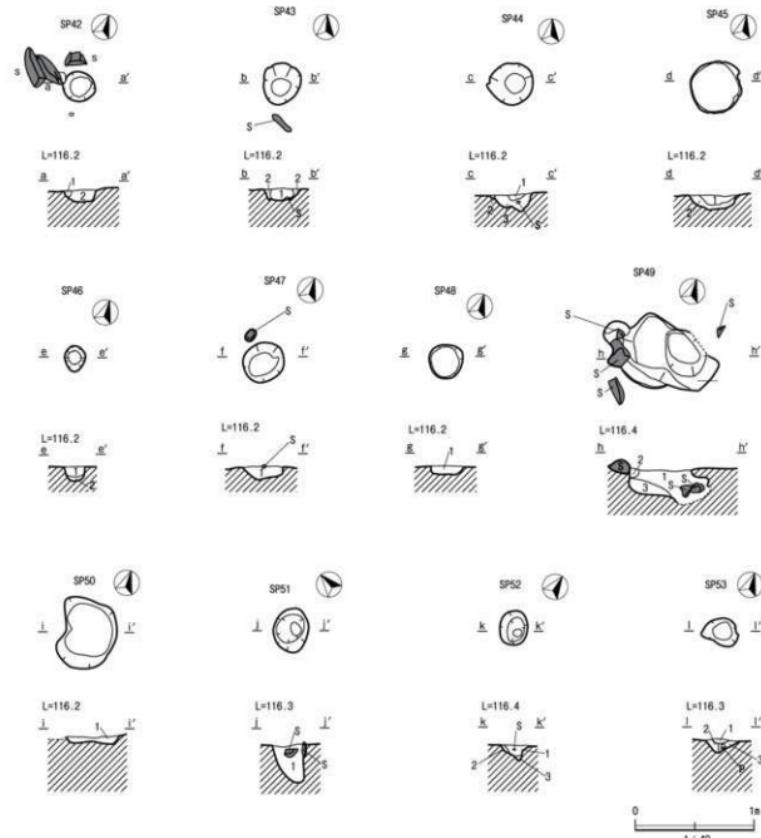
1. 10YR3/1粘質シルト 灰片少量含む
粘性あり
2. 10YR3/1粘質シルト (10YR5/1シルト粒
が50% まじり) 灰片少量あり

SP41

1. 10YR2/1粘質土 細砂まじり
2. 10YR2/1粘質土 (10YR7/2シルト粒5~
1cm が40% まじり) 土器出上
3. 10YR5/2砂質シルト (壁の崩れ)
4. 黒褐色粘質シルト 粘性あり

第22図 ピット (1)

III 検出した構造と遺物



SP42
1. 10YR5/1粘質シルト
2. 10Y32/1粘質シルト (10YR5/1シルト粒数が20%混入) 灰片少量あり 5~7mmφ

SP43
1. 10YR5/1シルト (10YR7/1シルト粒没じり5%) 灰化物を含む
2. 10YR7/2粘質シルト 固いしまり 粘性あり

SP44
1. 10YR3/1粘質土
2. 10YR5/1シルト 艶砂
3. 10YR3/1シルト (10YR7/2シルトがまじる)
灰片少量あり 粘性あり

SP45
1. 10YR2/1粘質シルト
2. 10YR2/1粘質シルト (10YR5/1シルトのブロックがまじる)

SP46
1. 10YR5/1シルト 灰片まじり
2. 10YR3/1シルト 下部は砂質化

SP47
1. 10YR5/1シルト (10YR3/1粘質シルト粒の混合土) しまりあり 灰片を含む 中央上に礫あり

SP48
1. 10YR2/1粘質シルト (10YR7/2シルトブロック5~7mmφまじり)

SP49
1. 10YR3/1粘質シルト (10YR7/2シルトブロック2~5cm大30%まだら状) 粒大小がまじる
2. 10YR5/1砂質シルト
3. 10YR5/1シルト

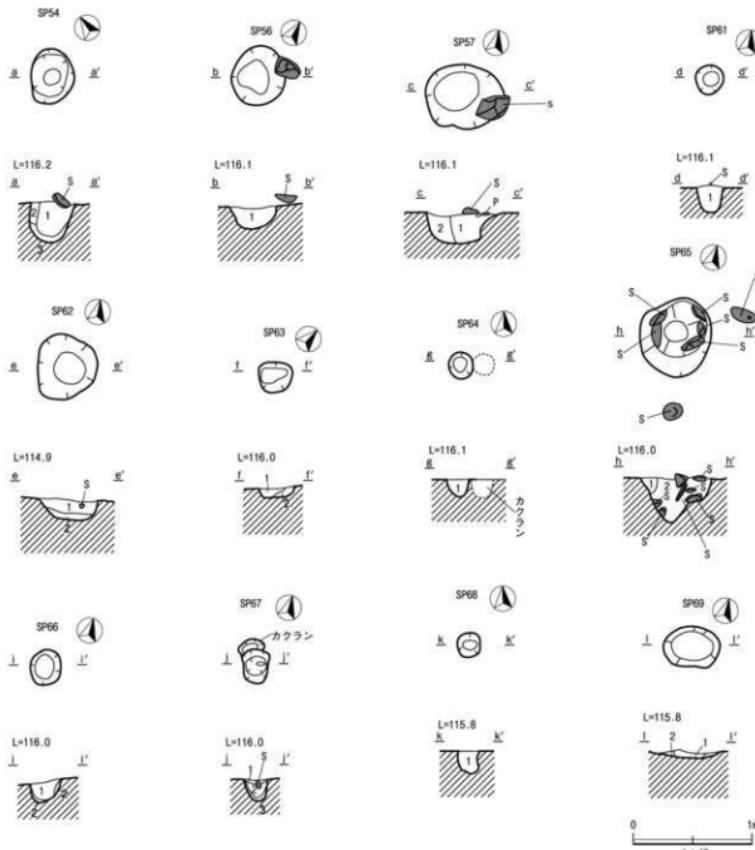
SP50
1. 10YR2/1粘質シルト しまりあり 土器出土

SP51
1. 10YR2/1粘質土 下部は細砂まじり

SP52
1. 10YR2/1粘質シルトと10YR7/2シルトの混合土 灰片少量含む 40%
2. 10YR5/1砂質シルト (壁の崩れ)
3. 10YR5/2シルト

第23図 ピット (2)

III 検出した遺構と遺物



SP54

1. 10YR2/1粘質シルト 土器出土
2. F1に10YR2/2シルトが50%まじる
(黒の崩れ)
3. 10YR2/1粘質シルト 下部細砂まじり

SP56

1. 10YR3/1粘質シルト (10YR5/2シルト粒 10%) 黄土少量含む

SP57

1. 10YR2/1粘質シルト 灰化片少量まじる
粘性あり (黒、土器含む)
2. F1と10YR5/1シルトブロック5~12cmφ
と10YR7/2シルトブロックがまだら状
にまじる

SP61

1. 10YR2/1粘質シルト 粘性あり

SP62

1. 10YR2/1粘質シルト (懐化鉄シミ)
2. 10YR3/1 (10YR5/1シルト少量まじる)
やわらかい (透水)

SP63

1. 10YR3/1粘質シルト (10YR2/1粘質シルト
が20%まじる) 灰化物片を含む 粘性強
い
2. 10YR2/2粘質シルト 粗砂が多い

SP64

1. 10YR3/1粘質シルト (10YR2/2シルト粒
5~6cmφが20%まじる) 粘性あり

SP65

1. 10YR2/1粘質シルト (10YR2/2シルト粒ま
じる 2%)
2. F1よりも黒色化 粘性あり

SP66

1. 10YR2/1粘質シルト
2. 10YR4/4粘質シルト (F1の小ブロックが入る
5~7mmφ)

SP67

1. 10YR4/4粘質シルト (10YR2/1シルトのブロック
固いしまり)
2. 10YR3/1粘質シルト (10YR2/1シルト粒10%
灰化物粒少量含む)
3. 10YR2/2粘質シルト

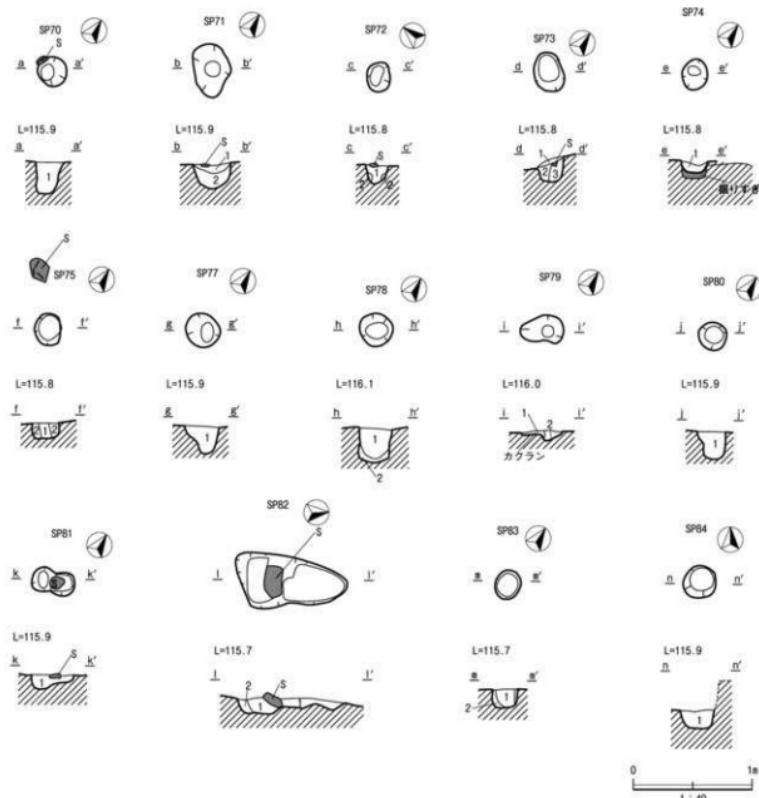
SP68

1. 10YR2/1粘質シルト (10YR2/2シルト粒10%
5~10mmφ) まだら状、灰土少量含む

SP69

1. 10YR2/1粘質シルト
2. F1に10YR7/1シルトブロックまじり

第24図 ピット (3)



SP70

1. 10YR3/1粘質シルト
(10YR7/2シルトと10YR5/6粘質シルトの粒
10mmφが10%混入する)

SP71

1. 10YR2/1粘質シルト
(10YR7/2シルトと10YR5/6粘質シルトの粒
10mmφが10%混入する)
2. 10YR5/2シルト

SP72

1. 10YR2/1粘質シルト 下部に小埋入る (10YR3/3シルト30%)
2. 10YR5/2シルト (10YR3/1シルトブロックの混
合土 30%)
3. 10YR2/1粘質シルト

SP74

1. 10YR3/1粘質土 粘性あり

SP75

1. 10YR3/1粘質シルト (10YR7/3シルト粒20%含む
5~10mmφ)
2. 10YR3/1粘質土 (10YR7/2シルト粒10~20mm 20%
含む) 粘片少量含む

SP77

1. 10YR2/1粘質シルト (10YR7/2シルト粒10~30mmφ
が20%含む) 粘性あり 下部細砂

SP78

1. 10YR2/1粘質シルト (10YR5/1シルト粒まじり
10%)
2. 10YR5/1シルト FIがまだら状にまじる

SP79

1. 10YR2/1粘質シルト 粘片を含む
2. FIに10YR7/1シルト粒10%含む

SP80

1. 10YR3/1粘質シルト (10YR5/6粘質シルト粒が10%
含む)

SP81

1. 10YR2/1粘質シルト (10YR5/1シルト
粒20%含む)

SP82

1. 10YR3/2粘質シルト (10YR7/2シルト
ブロック5~10mmφ 10%含む)
縫合のために入る
2. 10YR3/1粘質シルト (10YR7/2シルト
粒が30%含む)

SP83

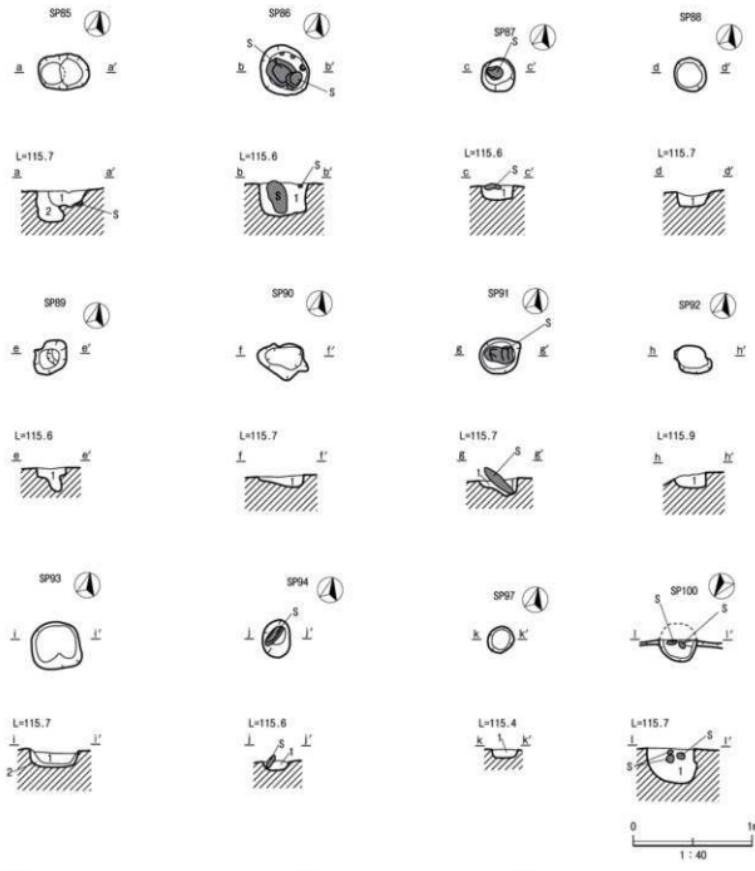
1. 10YR2/1粘質シルト
固いまり 粘片1cmφを少量含む
2. 10YR7/2シルト (FIが20% まだら
状に混じる) 固い

SP84

1. 10YR2/1粘質シルト
粘片を含む 細砂少量あり

第25図 ピット(4)

III 検出した遺構と遺物



SP85
1. 10YR2/1粘質シルト 灰片少量含む
底に礫がほりつく
2. 上部 10YR3/1粘質シルト
(10YR7/2シルトブロック5m~10mmφ
20%まじる)
下部 10YR2/1粘質土

SP86
1. 10YR2/1粘質シルト (底大~小に入る40cm大~5cm大
灰片少量まじる) 下部はシルト化

SP87
1. 10YR3/1粘質シルト (10YR5/1シルトが粒状にまじる)

SP88
1. 10YR2/1粘質土 灰化物を含む
下部に 稀少量含む

SP89
1. 10YR3/1粘質シルト 下部は粘性強い
灰片少量含む

SP90
1. 10YR2/1粘質シルト
下部は10YR6/1シルトが多くまじる
堆山面との境目

SP91
1. 10YR2/1粘質シルト 粘性あり
下部に小礫3~7cmφが配置

SP92
1. 10YR3/1粘質シルト (10YR5/1シルトが
20%混入する) 下部に灰片を含む

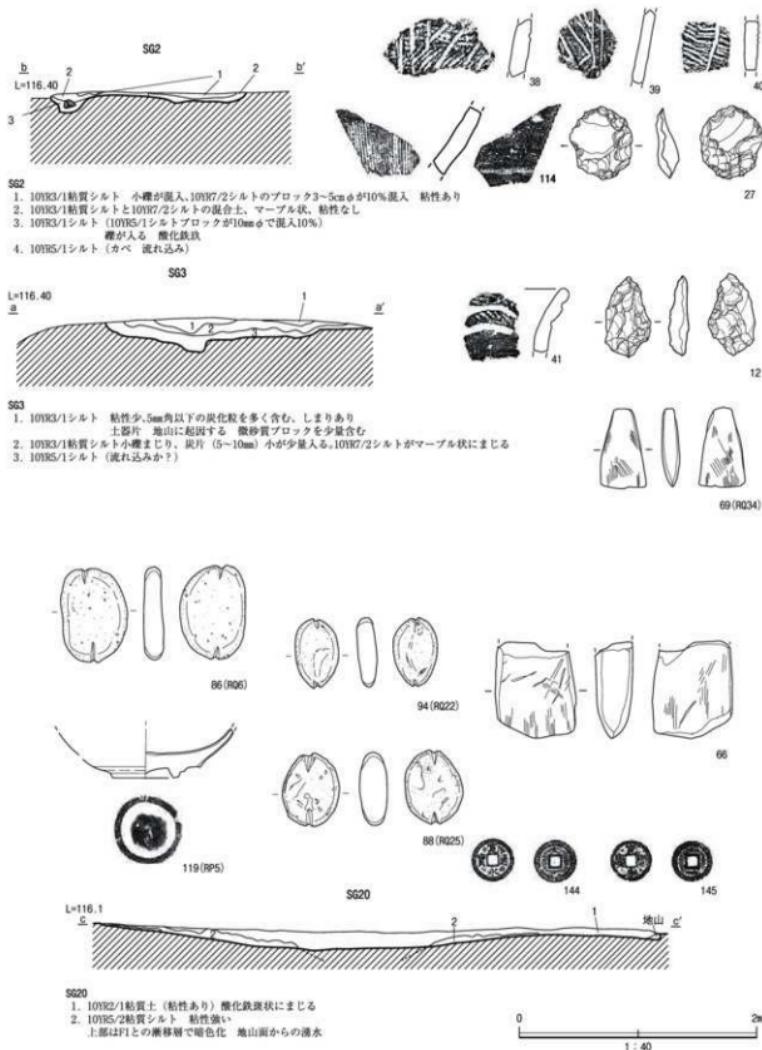
SP93
1. 10YR2/1粘質シルト (10YR5/1シルトブロック
中央部に混入する) 灰片少量あり 土器出土
2. Fよりも10YR3/1シルトを多く含む

SP94
1. 10YR2/1粘質シルト (10YR5/1シルトブロック
5~10cmφ含む)

SP97
1. 10YR3/1粘質シルト 粘性あり

SP98
1. 10YR2/1粘質シルト 細砂下部に多い 中位に
礫が入る

第26図 ピット (5)



第27図 河川跡

6 遺物包含層 (SG1)

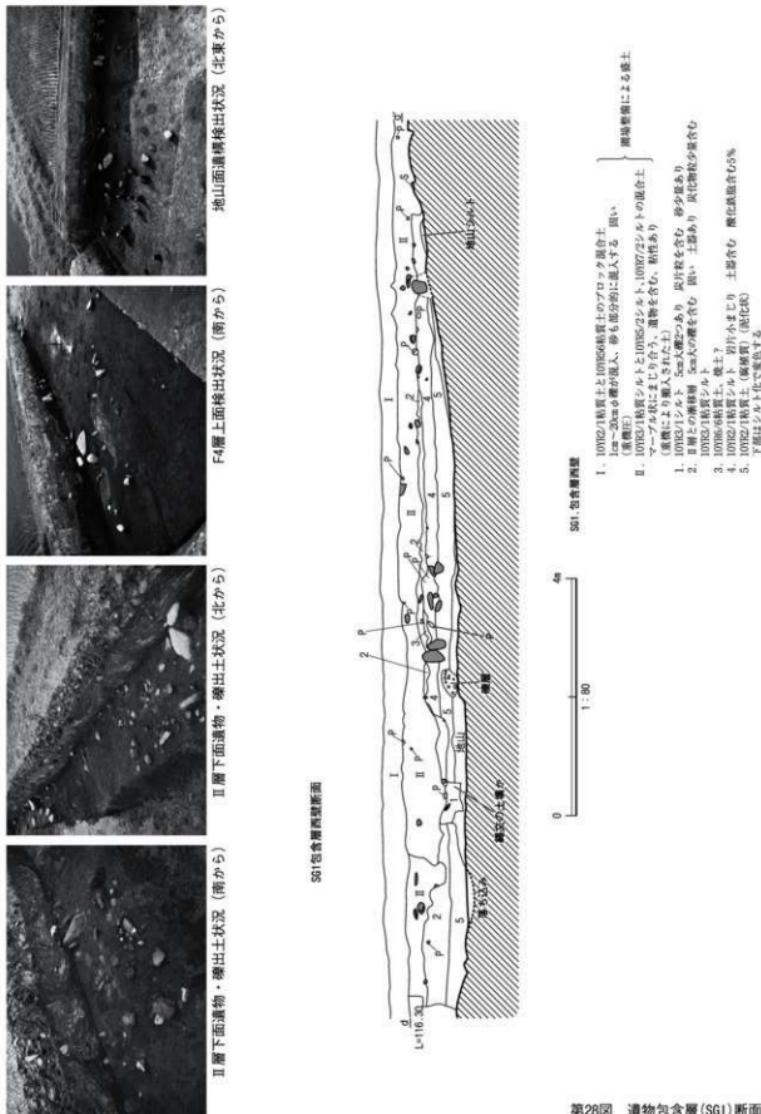
(1) 堆積状況について

調査区の南端の71-32~71-35グリッドにおいて、谷状に形成された遺物包含層を確認し、SG1と命名した。70-35グリッド付近から緩やかに南側に傾斜しつつ、調査区の南壁にぶつかっていき、最底面では現地表面との比高が120cmを測った。また底面はレンズ状に窪み、南東側から西側に下がっている。前回の調査地点（E区）で確認したSX2201遺物包含層につながっていくものとみられる。遺物包含層（SG1）の堆積層は地表面から7枚を数え、全層にわたって遺物の出土をみた。ただI、II層とした層は圃場整備時の造成盛土である。遺物を少量含んでいるが、他地点からの流れ込みであり遺構との関連はないと判断される。

S X 2 2 0 1
造 成 盛 土
遺 物 包 含 層
SG1の本来的な包含層としては1~5層の遺物包含層がある。遺物の多く認められたのは緩斜面に相当するエリアである。地山斜面に沿って検出された包含層のうち最も古いのは5層である。5層は地山面を直接覆う黒色の腐植土で、上部から縄文土器や石器が出土したが、下からは出土が見られなかった。4層は同じく黒色の腐植質土で大小様々な礫とともに縄文土器や石器が出土した。この層からピット等の掘り込みラインが確認できるものがあり、判別できるものはここで遺構精査を行っている。2層3層は粗砂や礫の混じる黒色粘質土で部分的に焼土塊が混じる部分がある。土器や石器が包含されている。この層の直下から比較的大型の土器がまとまって出土しており、その後流水により砂礫が一時的に堆積したものとみられる。SX21とした礫の配置や石英剥片のまとまりなど、2、3層上において遺構の確認できるものもあった。

出 土 遺 物
縄文時代後期
各層の堆積時期を各層から出土する土器の内容から判断すると次のようになる。4層から5層上部にかけて縄文時代後期の土器が含まれている。また、地山面で検出したピット群の大半は後期の土器を含むものであり概期の所産と考えたい。斜面の西側壁際（71-33グリッド）Ⅱ層下部から縄文時代中期（大木8式）の土器がまとまって出土した箇所がある。壁面に造成土による落ち込むようなラインが見えることから、造成による他地点からの運ばれてきた土器片と考えられる。同様にⅡ層の砂礫混じりの層よりも上のⅠ層からも遺物が出土するが少量で摩滅しているものが多く、造成による2次的な堆積によるものとみられる。最終確認した5層の粘土質シルト層以下からは遺物の出土を確認していない。

遺物包含層を掘り下げ、地山面にて遺構の最終的な確認を行なった。底面でピット群を検出し、位置を記録し、精査を行なっている。検出したピット群のほとんどは2~4層中から掘り込んだピットと見られる。



第28図 遺物包含層(SG1)断面

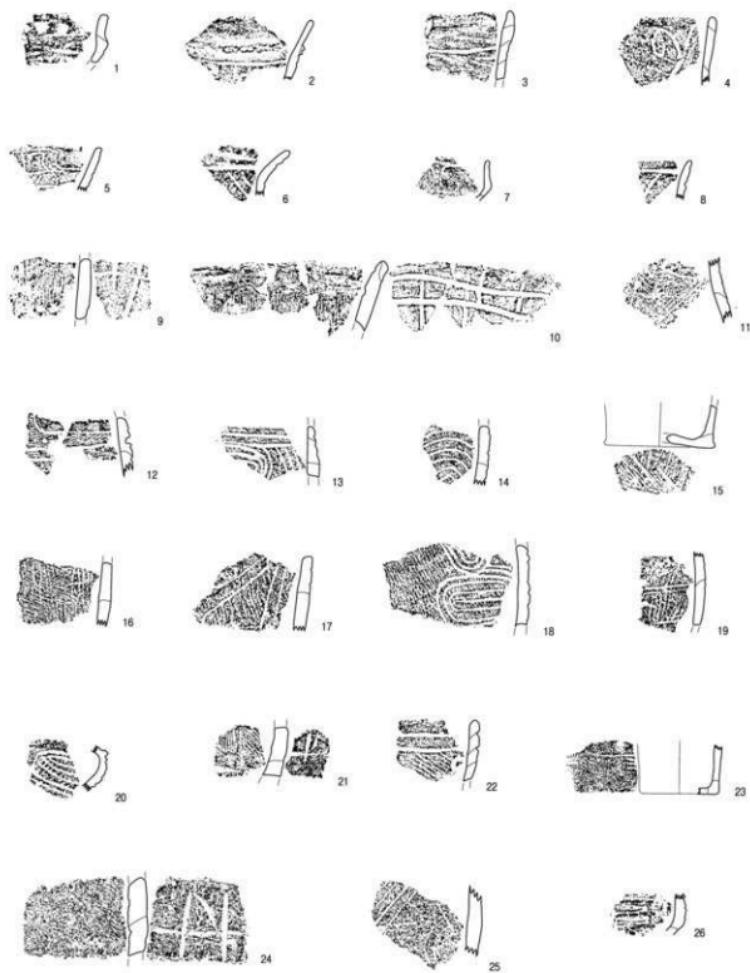
7 遺構外の出土遺物

今回の調査において、表土からの採取、表土除去中に出土したもの、遺構とのかかわりが明確でないもの、用水路などの擾乱から出土したものを遺構外出土遺物として報告する。遺物は原則として、地区・地点・層位などを記録して取り上げた。遺物は、大きく表土から遺構検出グリッド出土の遺物面までのI・II層出土遺物（グリッド毎）としたもので、表土の掘り下げやグリッド設定前の面整理作業中に出土した遺物も含まれているが、位置や層が明確なものはグリッドごとに取り上げて整理分類している。遺構外の出土遺物は縄文土器866点、陶磁器17点、石器類469点を数える。出土位置としては、調査区中央と南端付近に比較的多く出土している。また中央付近から縄文時代の遺物がまとまって出土していることと縄文時代の遺構のまとまりと重なり合う。調査区中央から東西方向に縄文時代の遺構が広がっているものと推測する。遺構外出土遺物のうち図示したものは55点で、各遺物の特徴や計測値については表6～10に示してある。

8 第3次調査（E区）出土の土器

3次調査E区 中川原C遺跡第3次調査のE区は用水路建設にかかる調査で、今回の第4次調査区に連なる区域に位置する。E区の調査では、土壌群と谷状の落ち込みが検出され、土壌内からまとまって縄文時代の土器が出土している。今回の包含層（SG1）につながっていくと考えられるため、E区出土の縄文土器についてふれておく。出土した土器群は第29図～第31図に掲載した。「中川原C遺跡・立泉川遺跡発掘調査報告書」（2002 山理文セン第98集）の中で、E区出土の土器について「第5群 E区土壌群底面及びその周辺から出土した土器群で後期の前葉に比定される土器群である。ほとんどが破片資料であり出土量はわずかである。堀の内1式併行の時期と考えられる。胎土は中期のものに比べてもろく、黒味を帯びている。第29図の10・24は内面に格子状の沈線文が施されているもので近隣の遺跡では尾花沢市漆坊遺跡（尾花沢市教育委員会1982）から出土している。第30図35は宮戸1b式併行と考えられるもので、フラスコ状土壌底面から出土した。」と報告した。第30図35は体部上部で外反し、4単位の波状口縁の器形をなす。縄文地文の上に口縁から体部にかけて横方向に帯状の沈線による区画が施され、端は梢円形状になる。36は口縁に沿って帯状に無文帯が巡る。第31図39は4単位の波状口縁を持ち、口縁から体部にかけて4本1組の細い沈線が弧状に垂下する文様を見せる。口縁部分は磨り消され、帯状に無文帯が形成されている。

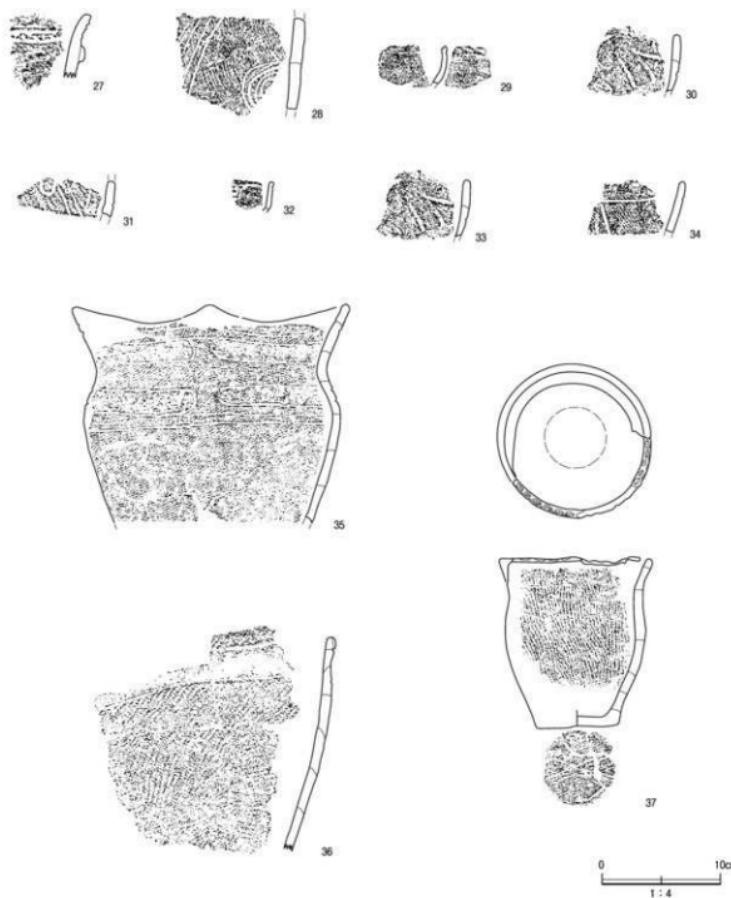
縄文時代後期
初頭～前葉 E区出土の土器群は、その器形や文様の特徴から縄文時代後期初頭から前葉にかけての時期に比定される内容を持っている。中川原C遺跡第4次調査出土の第II群とした土器群とはほぼ同じ内容を持つと考えられる。



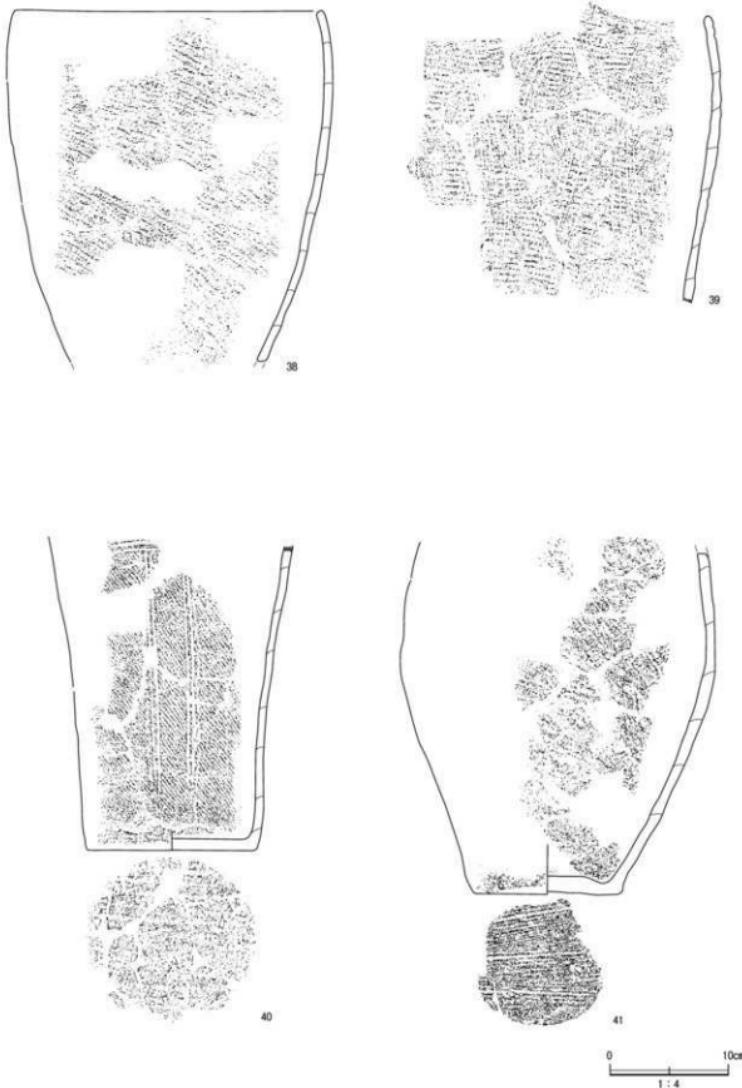
0
1 : 4
10cm

第29図 第3次調査(E区)出土の土器(1)

III 検出した遺構と遺物

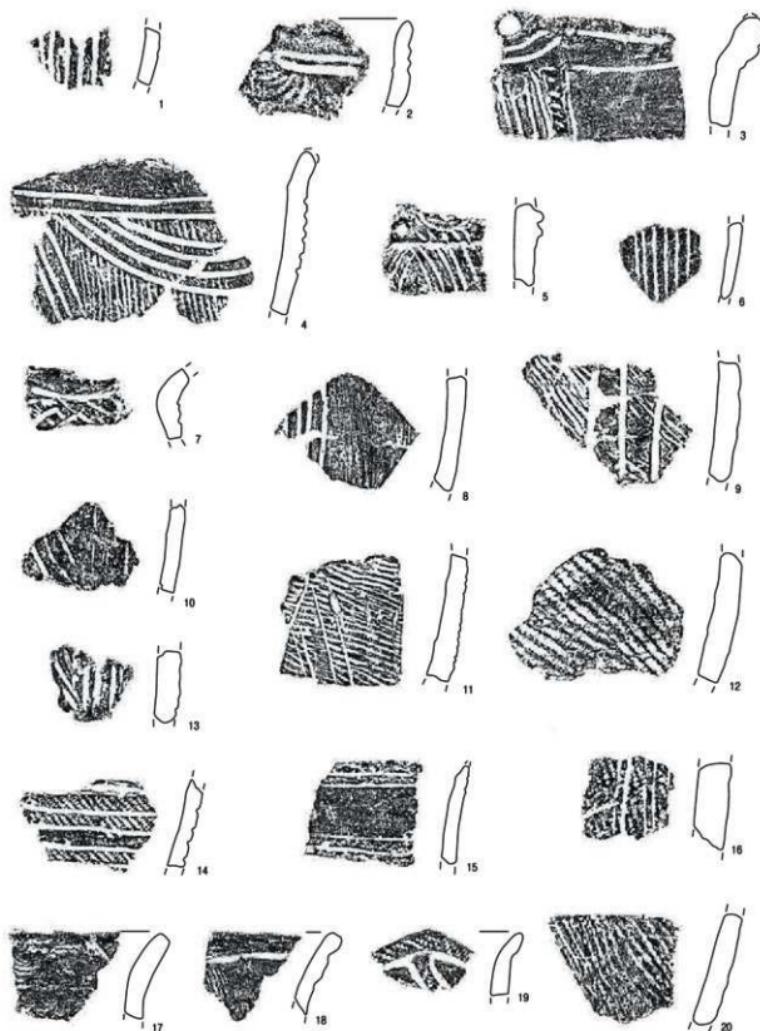


第30図 第3次調査(E区)出土の土器(2)



第31図 第3次調査(E区)出土の土器(3)

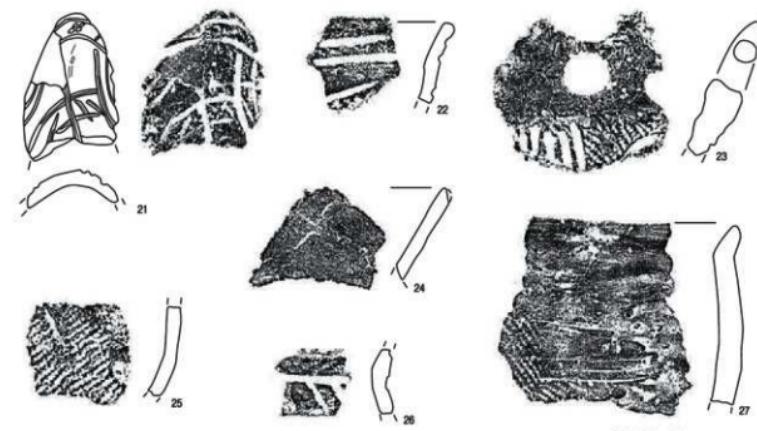
III 検出した遺構と遺物



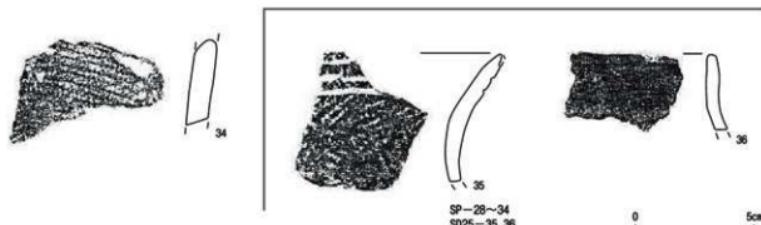
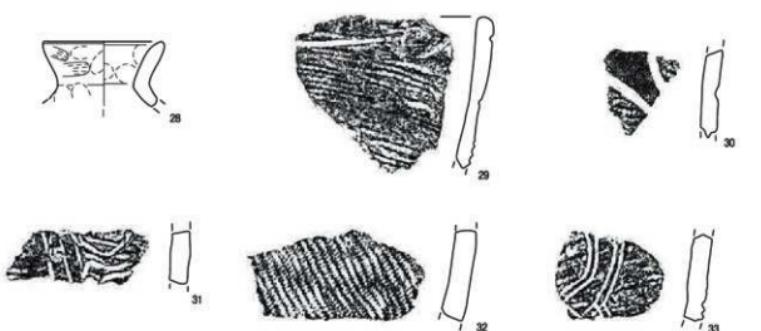
SK10-1
 SK11-2~9
 SK12-10
 SK14-14~16
 SK17-17~20

0 5cm
 1 : 2

第32図 繩文土器 (1)



SX15-21~26
SX21-27

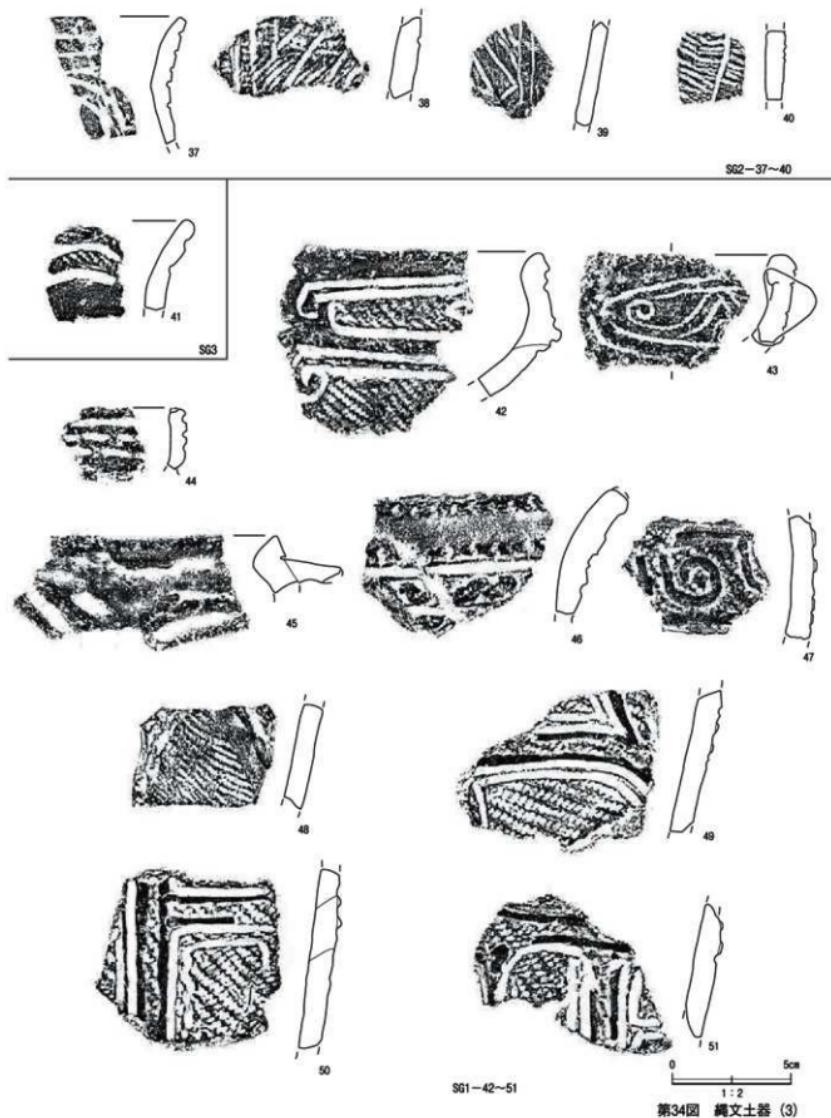


SP-28~34
SD25-35,36

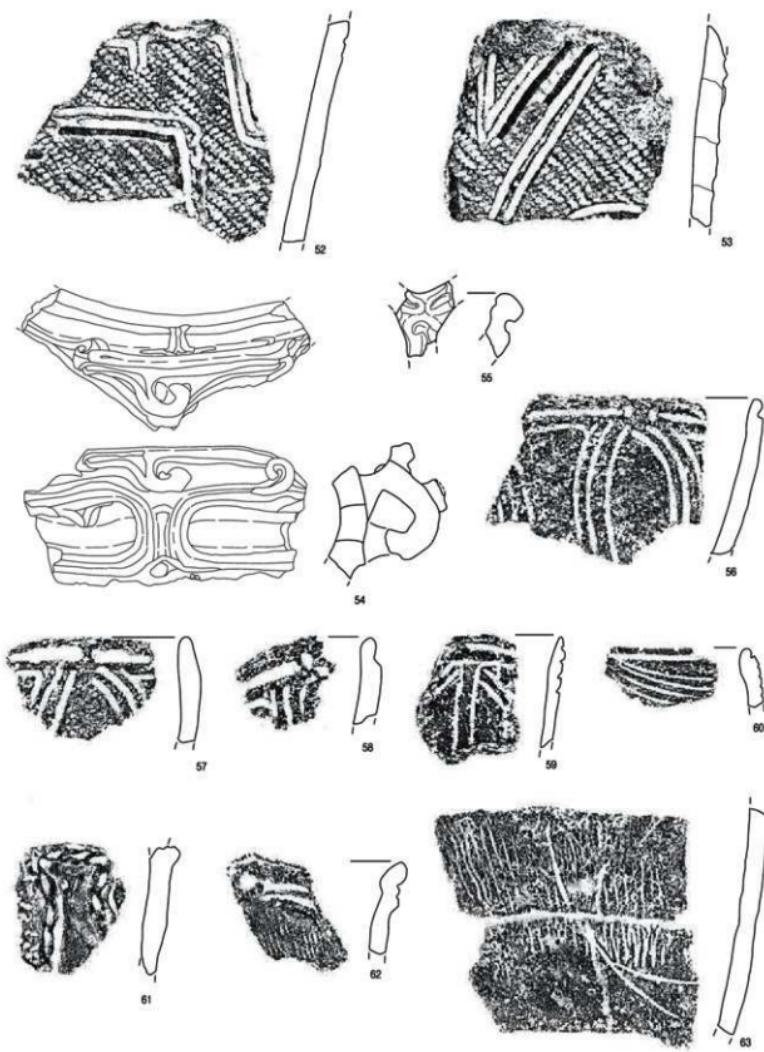
0 5cm
1:2

第33図 繩文土器 (2)

III 検出した遺構と遺物



第34図 繩文土器 (3)

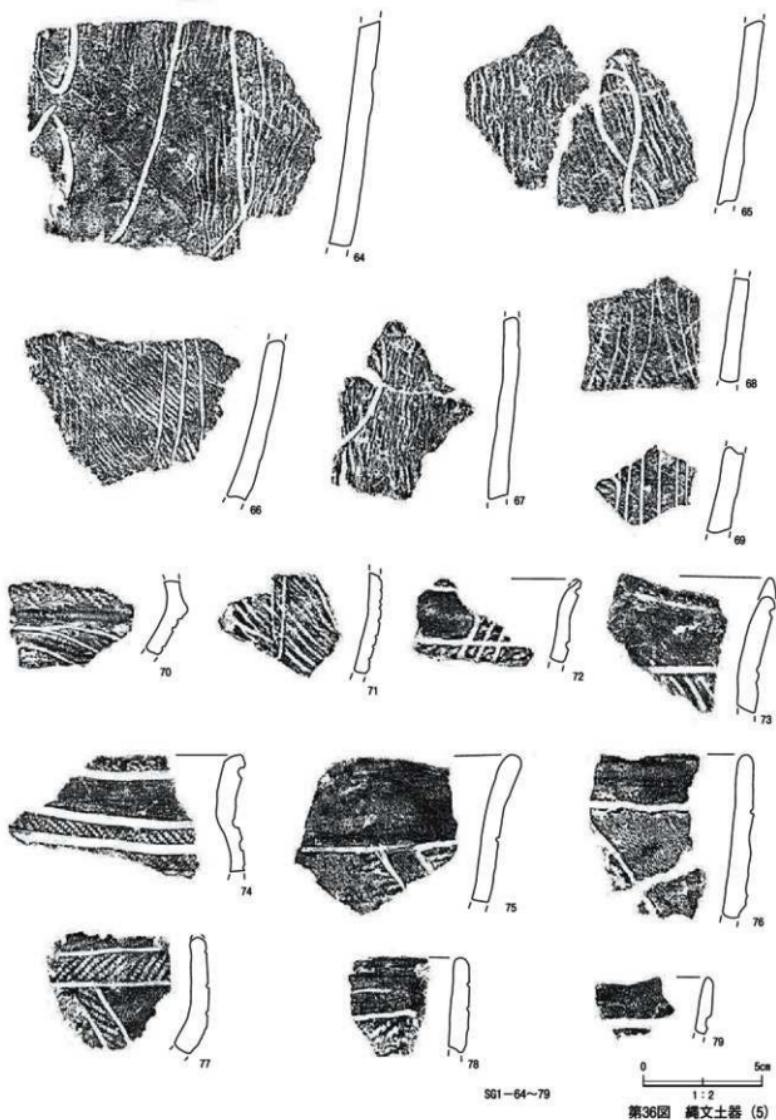


501-52~63



第35図 縄文土器 (4)

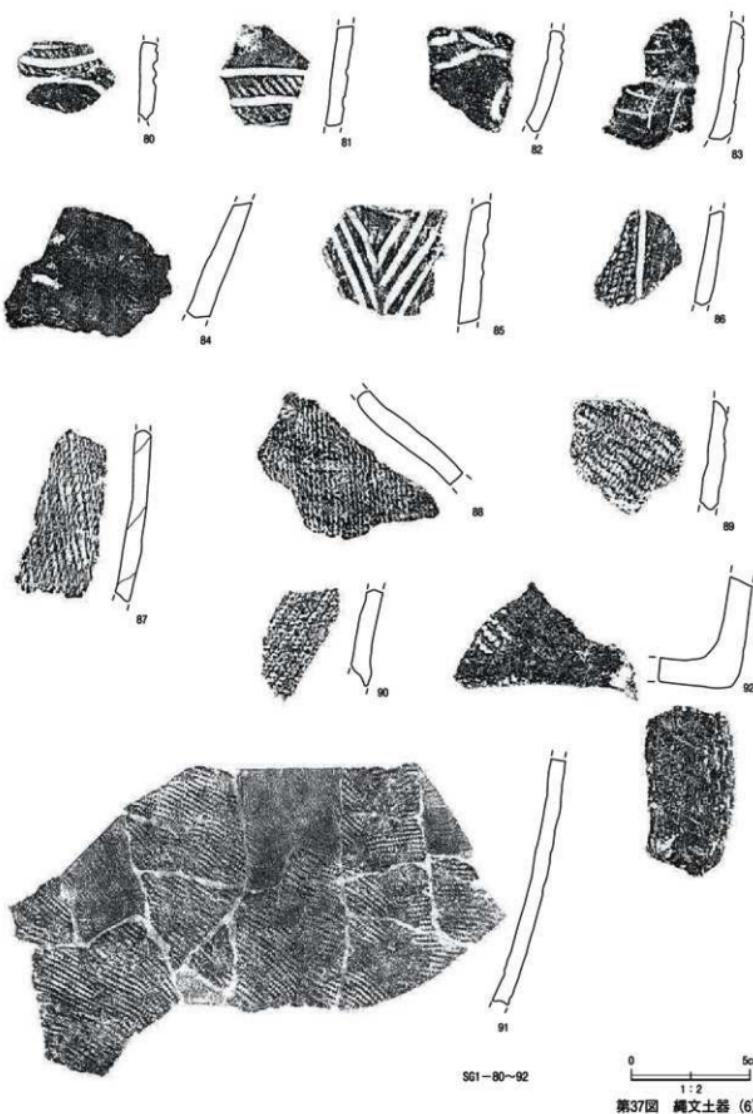
III 検出した遺構と遺物



SG1-64~79

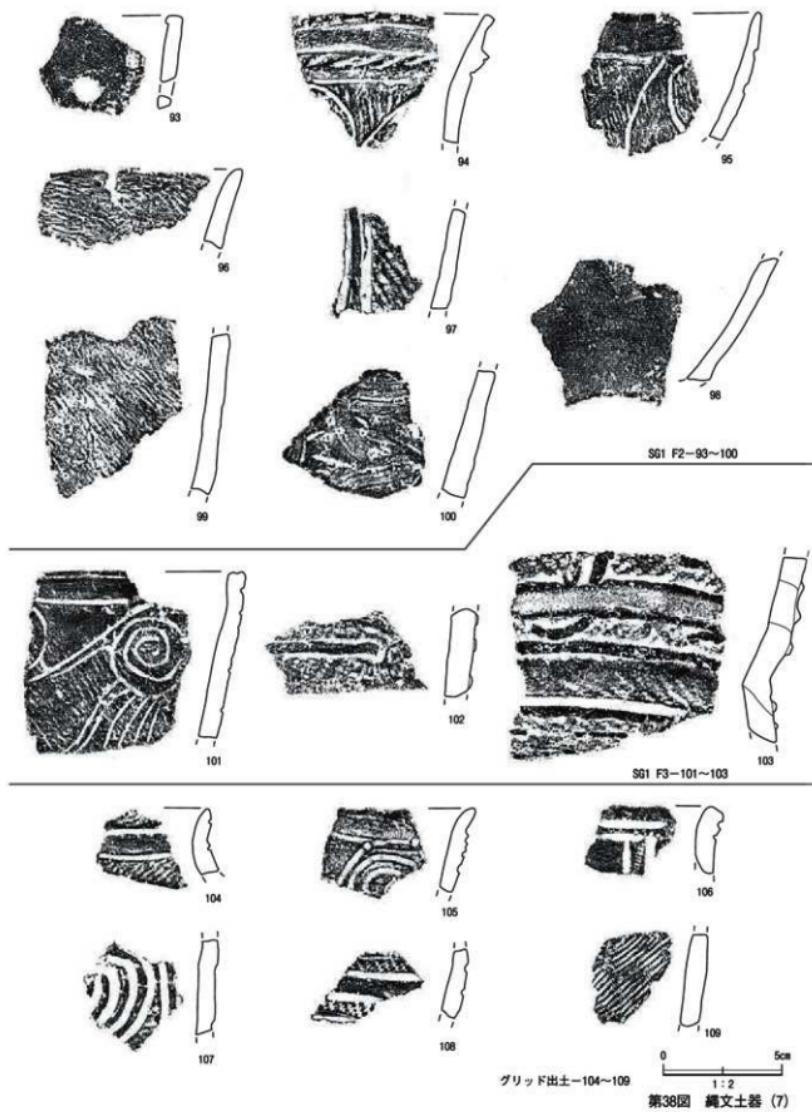
1 : 2
5cm

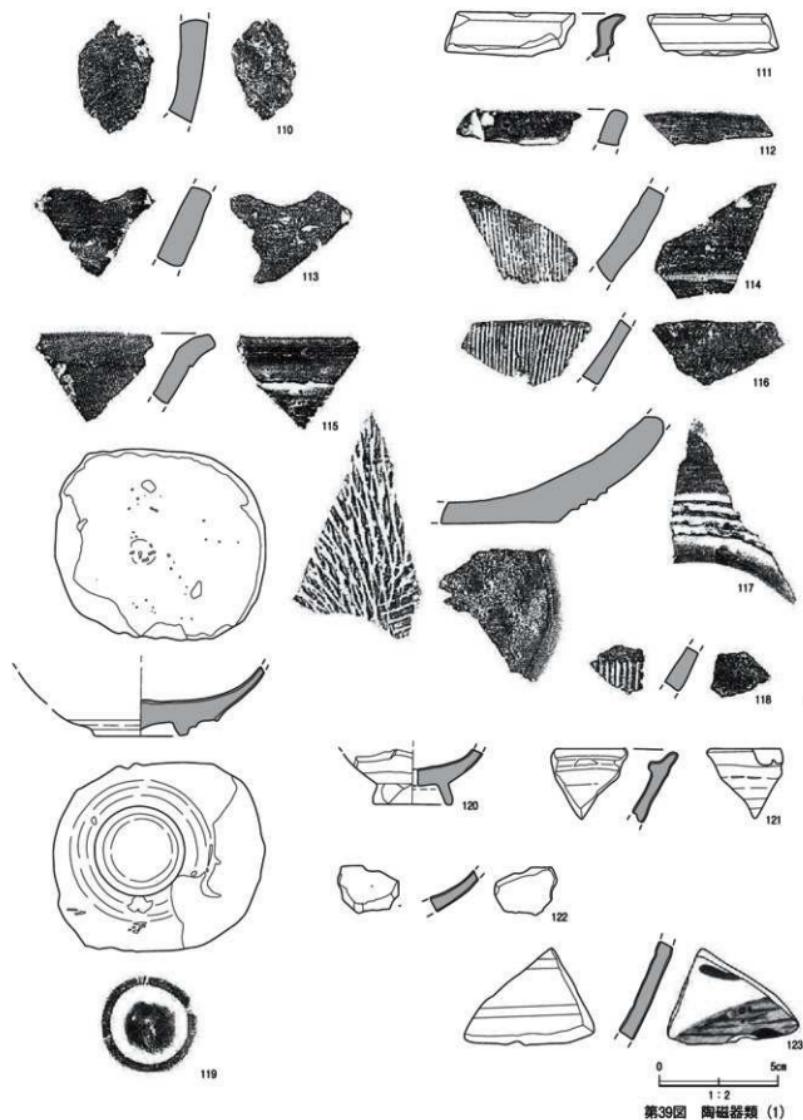
第36図 織文土器 (5)



第37図 繩文土器 (6)

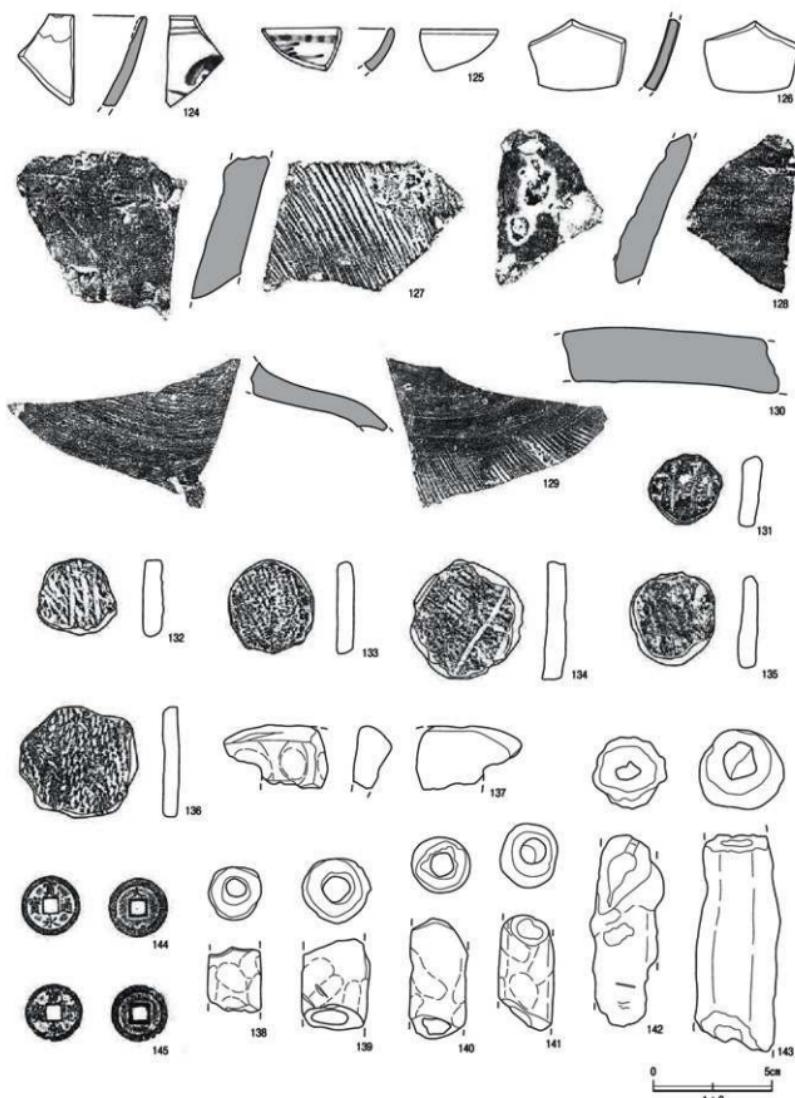
III 検出した遺構と遺物



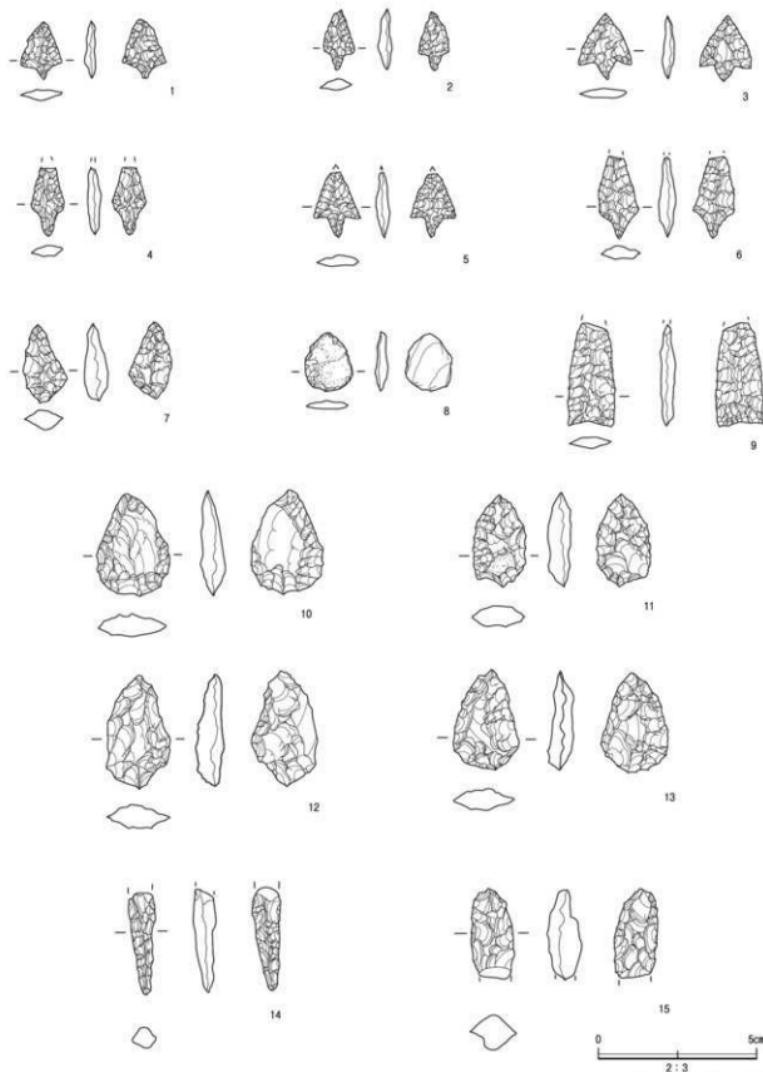


第39図 陶磁器類 (1)

III 検出した遺構と遺物

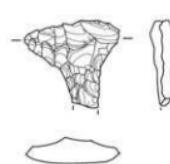


第40図 陶磁器類(2)、土製品他

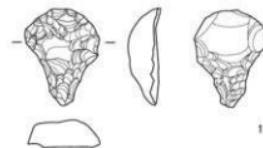


第41図 石鏸・石錐

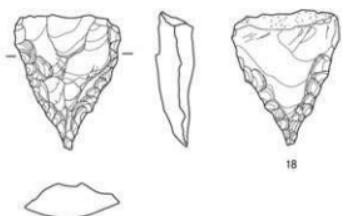
III 検出した遺構と遺物



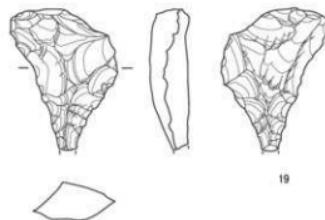
16



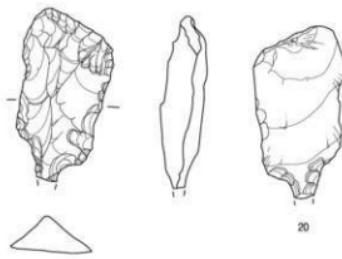
17



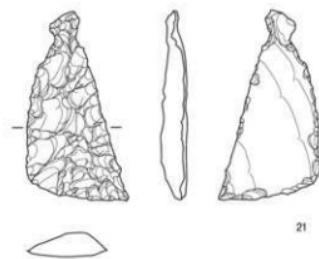
18



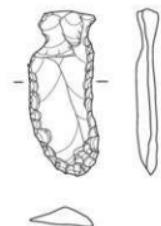
19



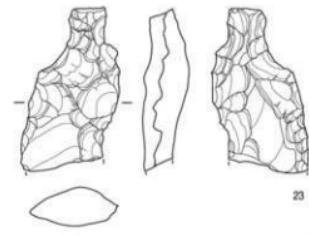
20



21



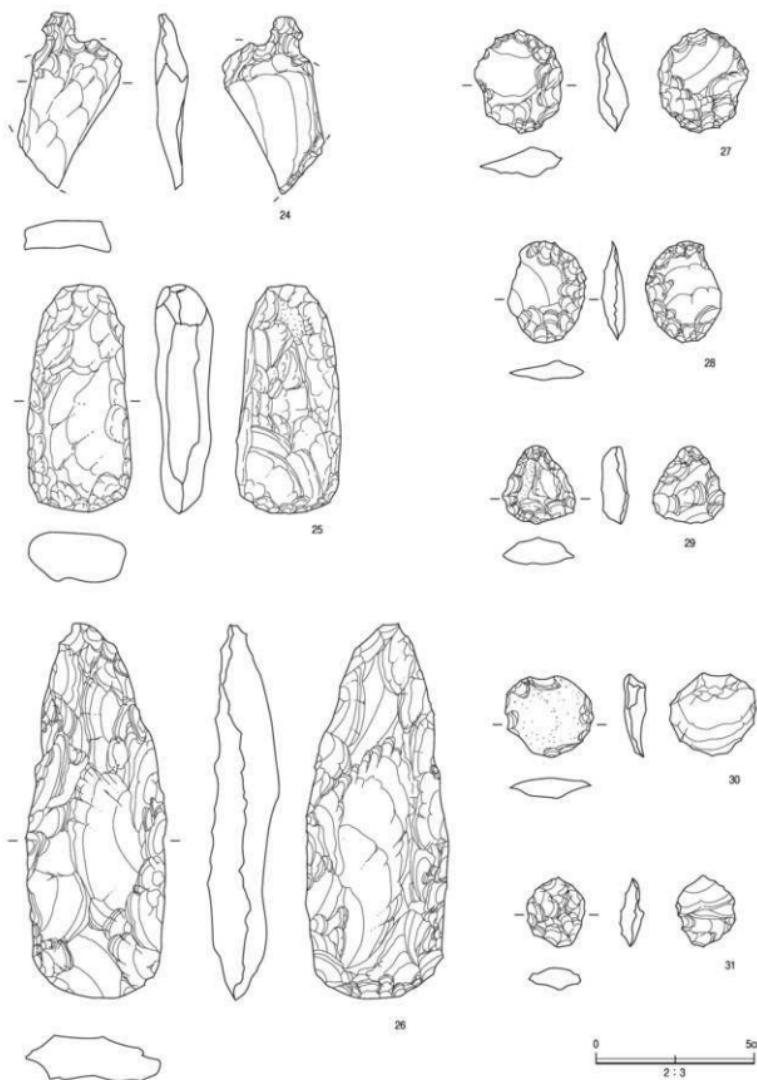
22



23

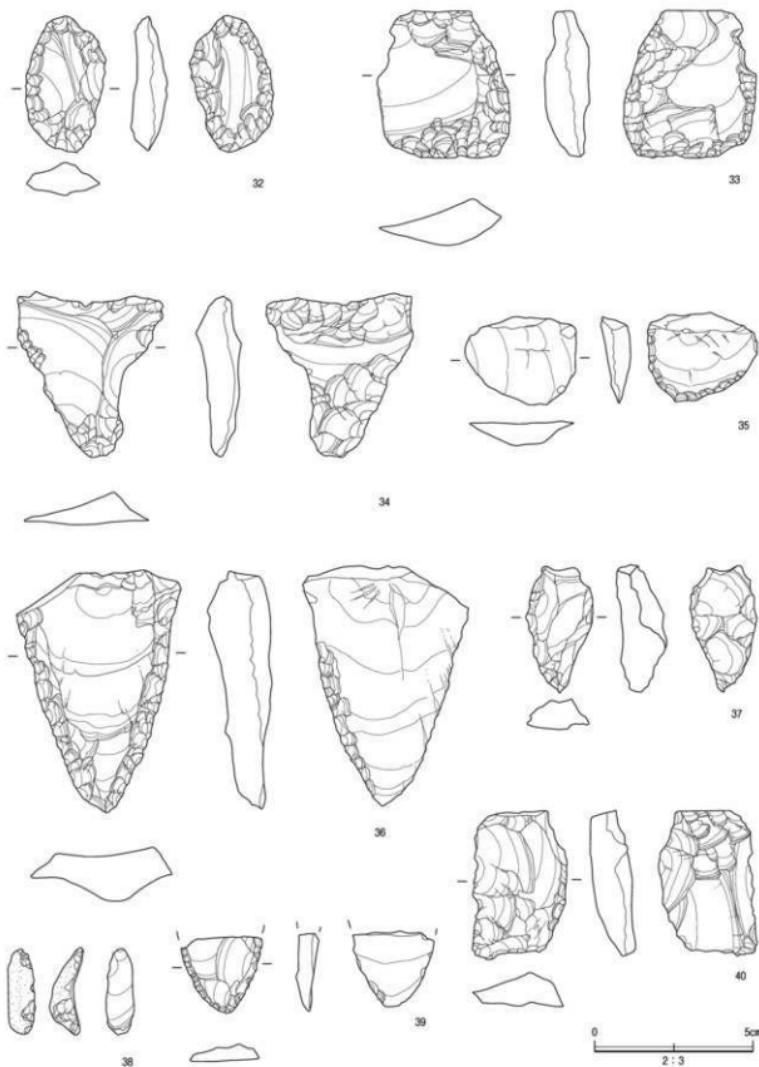
0
2 : 3
5cm

第42図 石錐・石匙



第43図 石匙・石鎚・小形搔器

III 検出した遺構と遺物

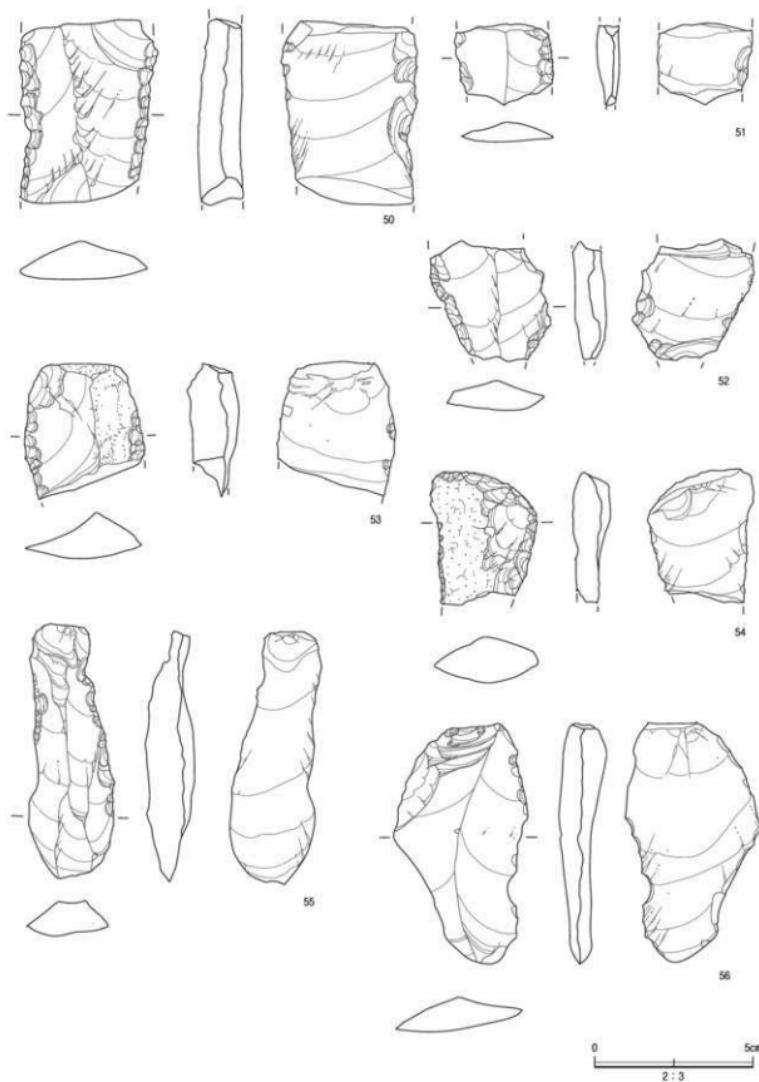


第44図 挖器・削器

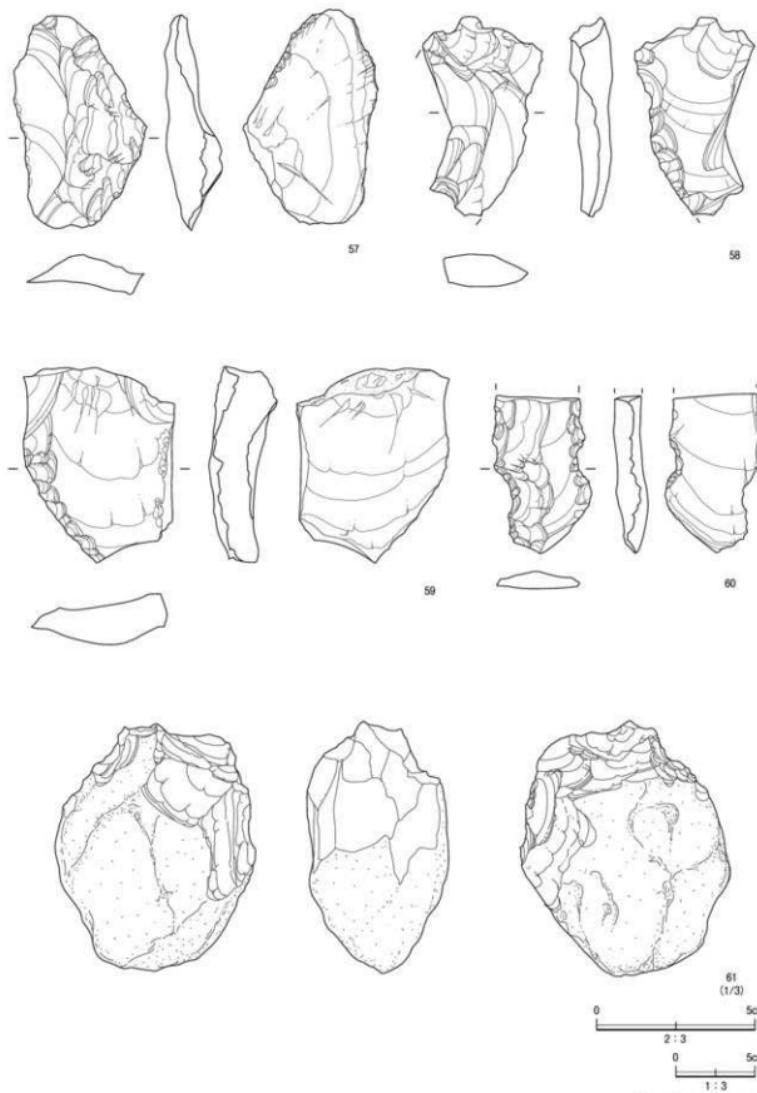


第45図 削器

III 検出した遺構と遺物



第46図 削器

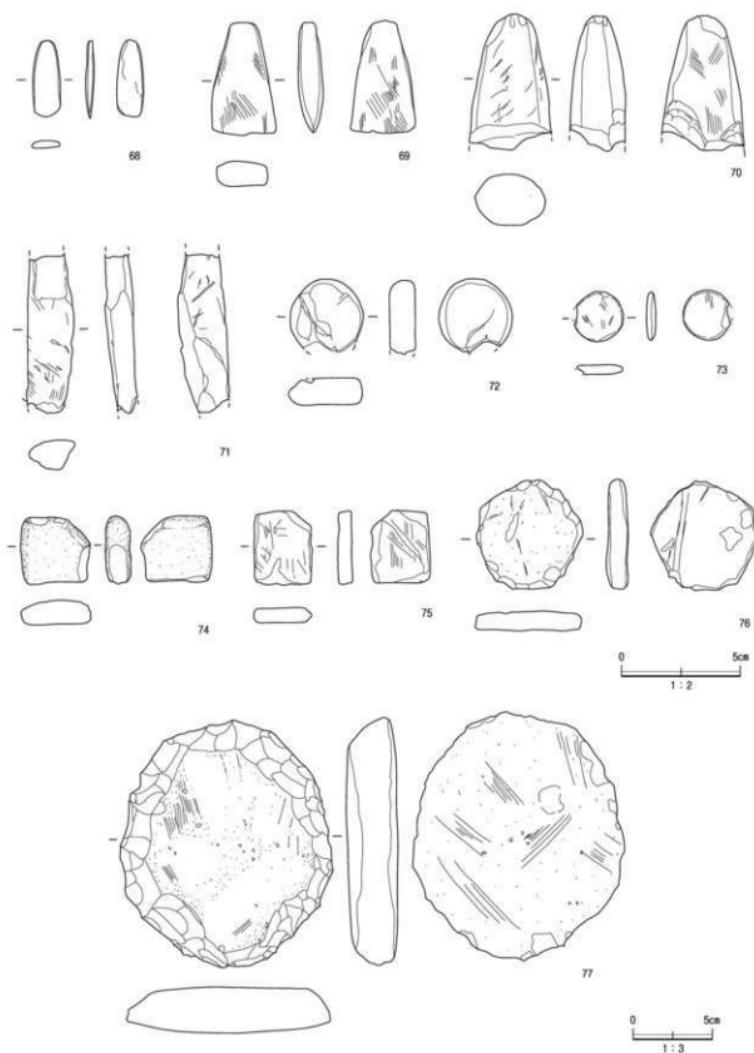


第47図 削器・石核

III 検出した遺構と遺物

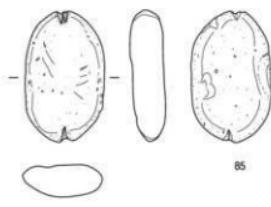
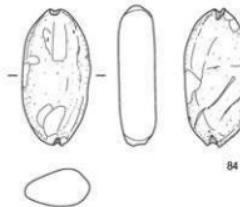
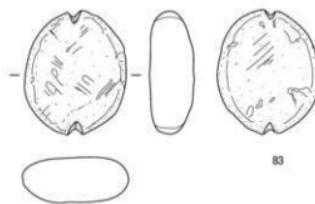
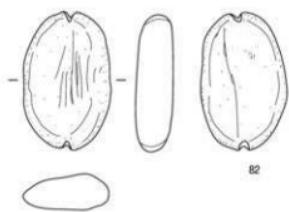
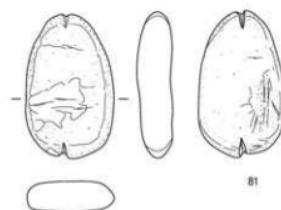
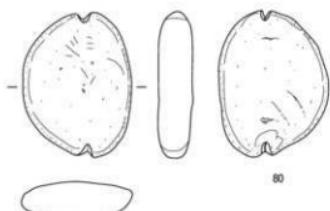
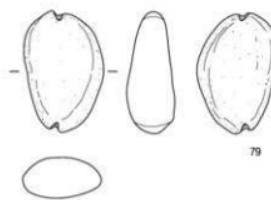
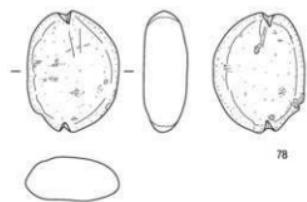


第48図 磨製石斧



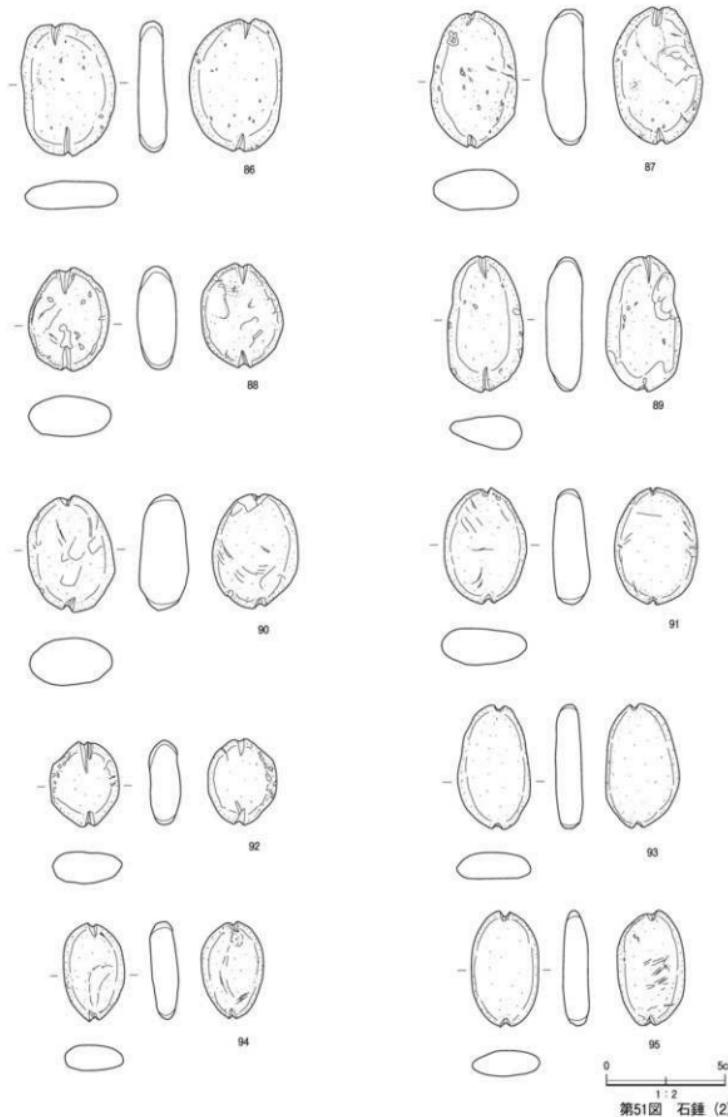
第49図 磨製石斧・石製品等

III 検出した遺構と遺物



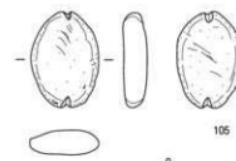
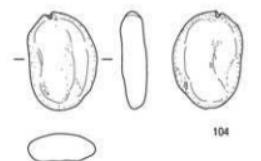
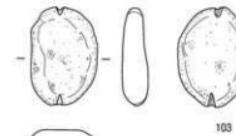
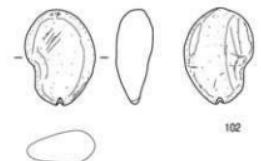
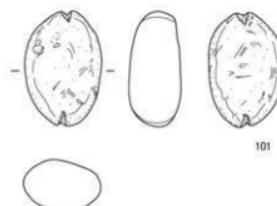
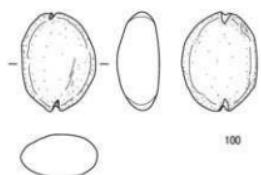
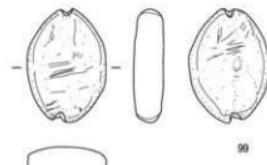
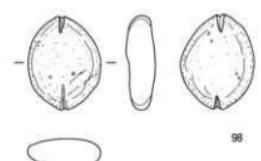
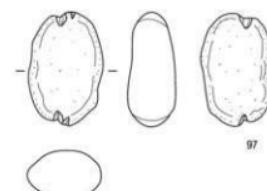
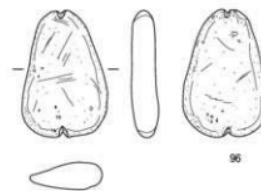
0 5cm
1 : 2

第50図 石錐 (1)



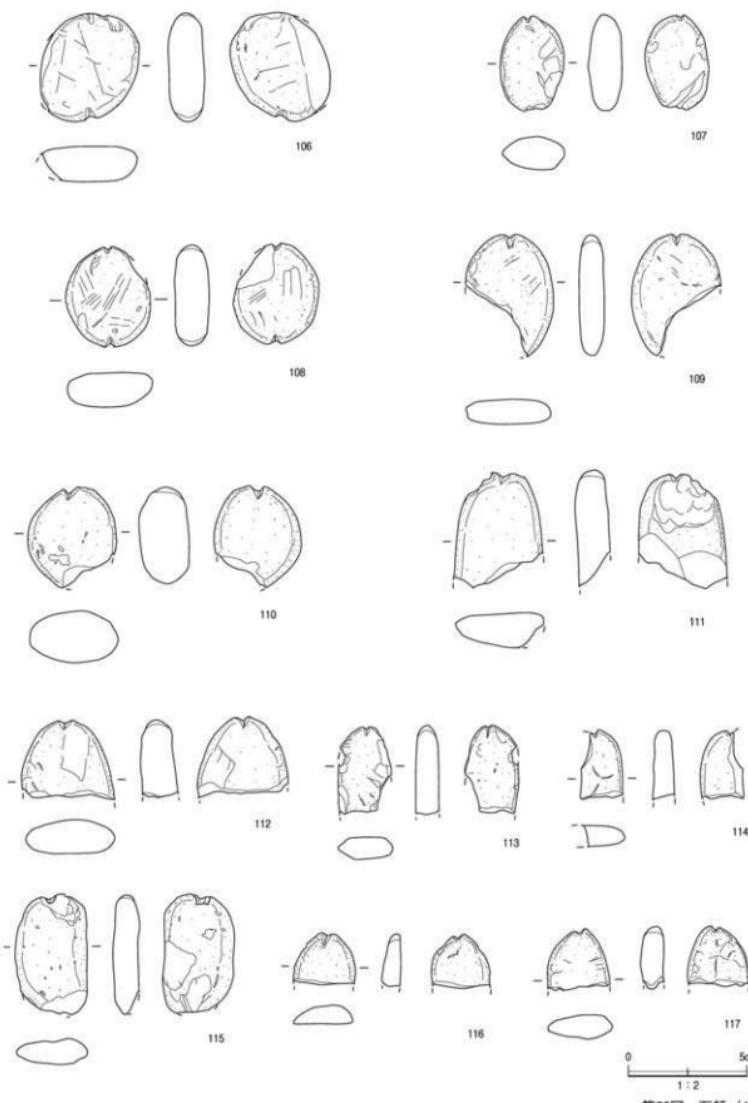
第51図 石錐 (2)

III 検出した遺構と遺物



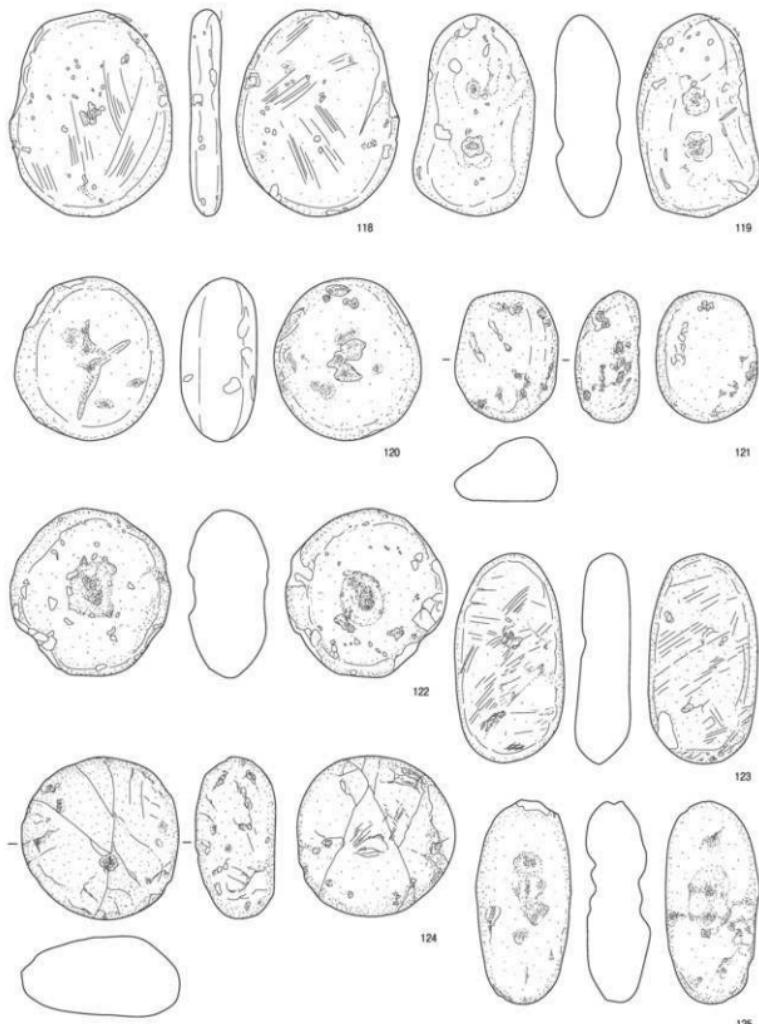
0 5cm
1:2

第52図 石錘 (3)

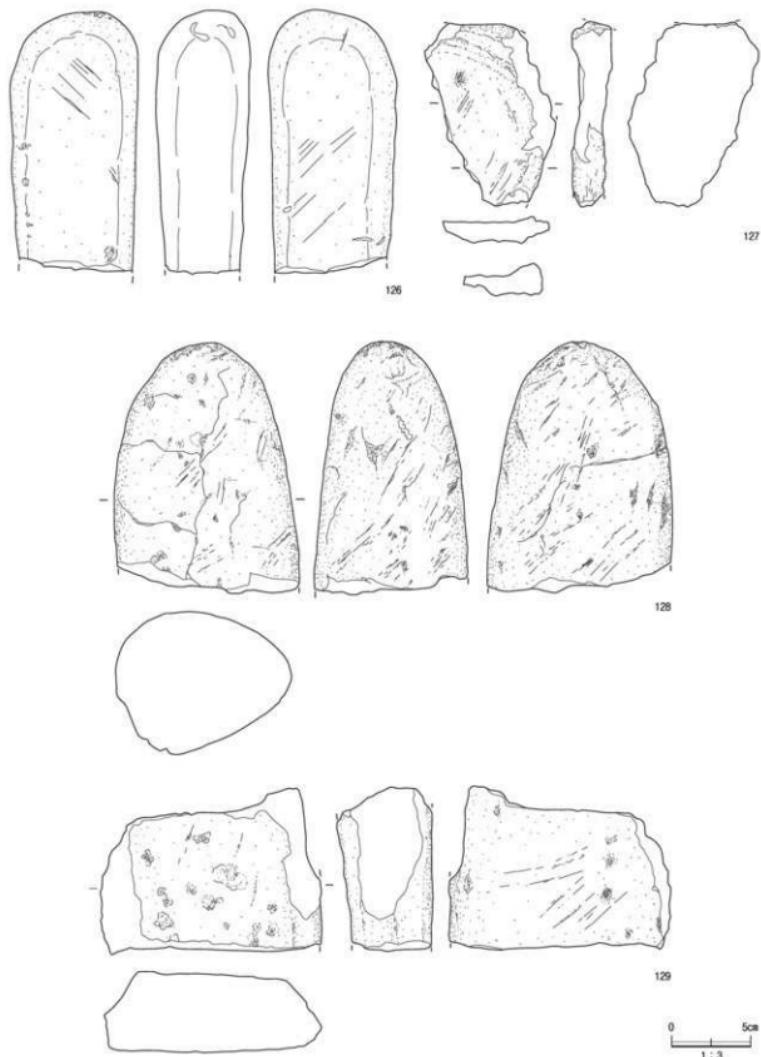


第53図 石錐(4)

III 検出した遺構と遺物

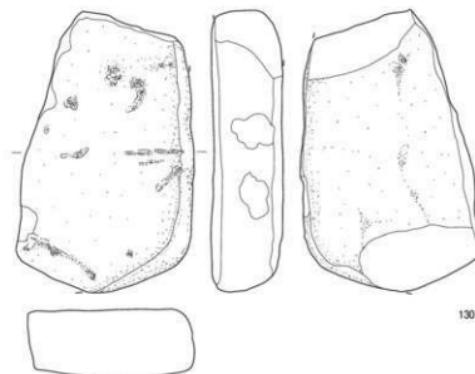


0 5cm
1:3
第54図 凹石・磨石

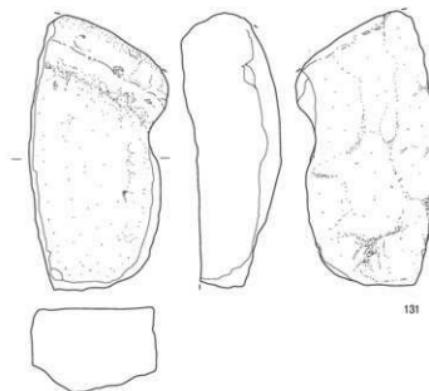


第55図 磨石・石皿 (1)

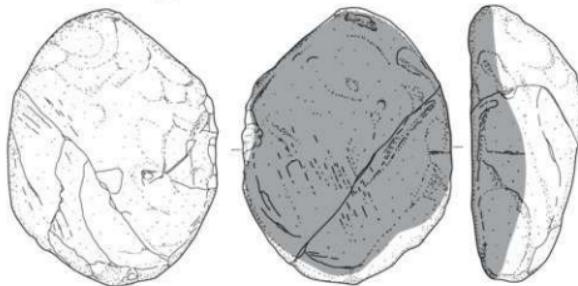
III 検出した遺構と遺物



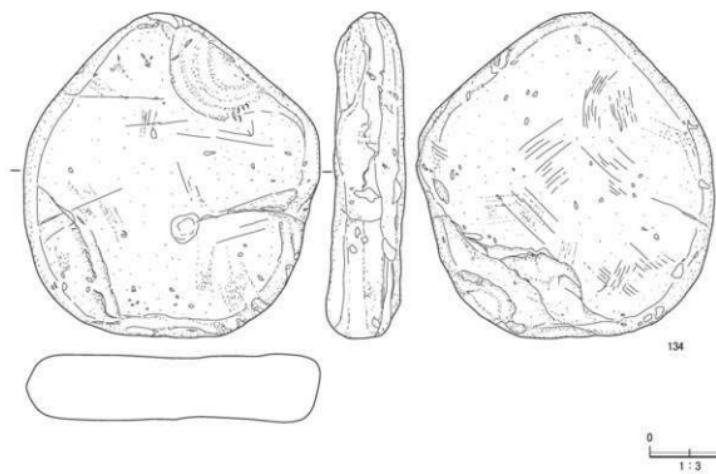
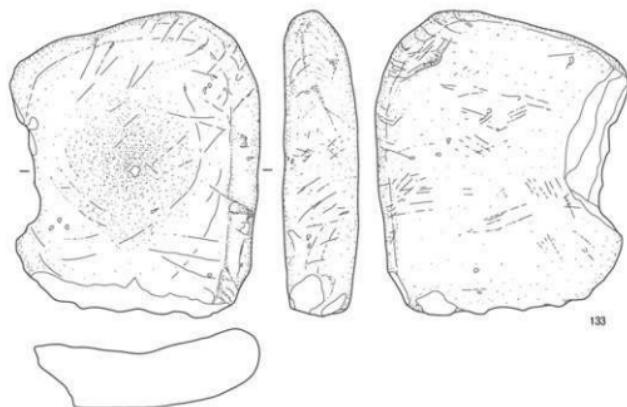
130



131

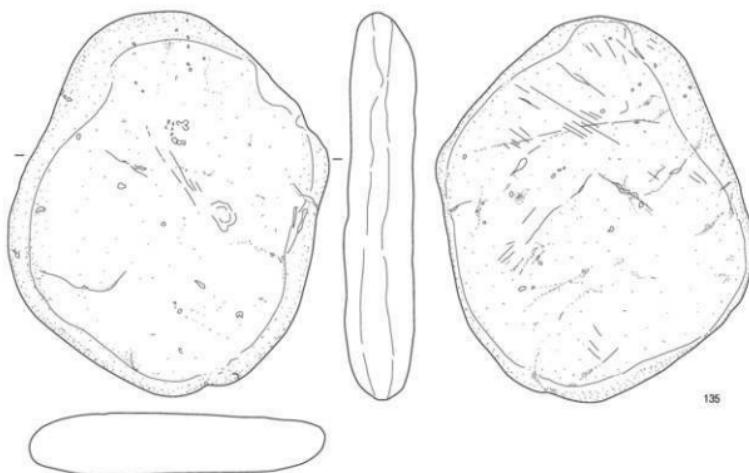


第56図 磨石・石皿 (2)

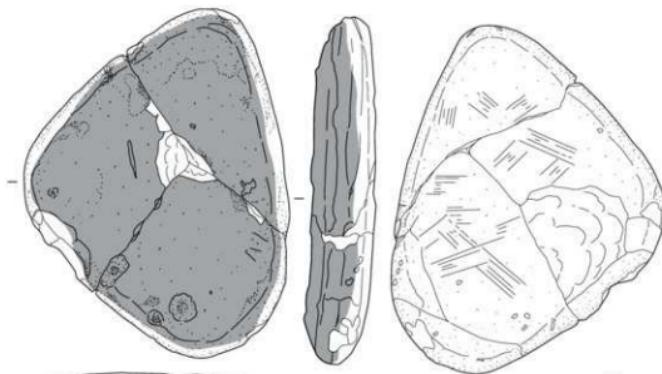


第57図 磨石・石皿 (3)

III 検出した遺構と遺物



135



136

0 5cm
1 : 3

第58図 磨石・石皿 (4)

表6 繩文土器観察表(1)

図No	登録番号	遺構出土区	層位	種別	器種	遺存部	計測値mm			外面	備考
							長	幅	厚さ		
1	SK10	F	縄文土器	鉢	体部	23	6.5		縦位の沈線		
2	SK11	F	縄文土器	鉢	口縁部	35	7		横位2本沈線と溝引き沈線		
3	RP60	SK11	縄文土器	鉢	口縁部	46	10		切欠し状工具による沈線、縦位の粘土貼付け刺突あり	口縁に段を持つ	
4	RP60	SK11	縄文土器	鉢	口縁部	69	8.5		Rの換文 線状工具による横位・弧状沈線	石英砂を多く含む	
5	RP60	SK11	縄文土器	鉢	体部	34	8		横位粘土貼付けと刺突による施文		
6	SK11	F	縄文土器	鉢	体部	32.5	5.5		縦位の沈線 斜面V字状		
7	SK11	F	縄文土器	鉢	体部	30	6.8		縄文地文→斜行沈線		
8	RP60	SK11	縄文土器	鉢	体部	49	7		へら状工具のナデ→縦位の沈線	煤付着する	
9	RP60	SK11	縄文土器	鉢	体部	50	10		燃系(R)→縦位沈線3本		
10	SK12	F1	縄文土器	鉢	体部	47	7		縄文地文→浅い沈線3本		
11	SK14	F	縄文土器	鉢	体部	53	9.1		燃系文(L)→深い沈線 ナデ		
12	SK14	F	縄文土器	鉢	体部	55	11		2段RL横位	多く含む 煤付着する	
13	SK14	F1	縄文土器	鉢	体部	31	9.4		半載竹管による2本同時施文		
14	SK16	F1	縄文土器	鉢	体部	38	6.5		横位沈線と磨り消し		
15	SK16	F1	縄文土器	鉢	体部	41.5	6		口縁ミガキ 縦位2本の細沈線		
16	SK16	F1	縄文土器	鉢	体部	37	14		半載竹管による竹管2本の沈線		
17	RP35	SK17	F1	縄文土器	鉢	口縁部	37	9.5		平縁	
18	SK17	F1	縄文土器	鉢	口縁部	35	6		口縁に横位1本の沈線		
19	SK17	F1	縄文土器	鉢	口縁部	27	7		沈線と磨り消しで区画	波状口縁 外反する	
20	RP35	SK17		縄文土器	鉢	体部	48	9		燃系(R)	
21	SX15	F1	縄文土器	片口鉢	体部	55	5.5		沈線と磨り消しで区画	口縁の片口部分	
22	SX15	F	縄文土器	鉢	口縁部	35	5.5		口縁部ナデ→沈線		
23	RP55	SX15	F1	縄文土器	鉢	口縁部	62	15		碗形突起 2ヶ所の穿孔 口縁下に縦位の沈線	
24	SX15	F	縄文土器	鉢	口縁部	39	6		外外面でいいなミガキ		
25	SX15	F	縄文土器	鉢	体部	38	6		2段LR縄文		
26	SX15	F2	縄文土器	鉢	体部	27	6.5		棒状工具による深い沈線		
27	SX21	F	縄文土器	鉢	口縁部	74.5	10		2段RL横位縄文 口縁内外面ナデ		
28	SP27		縄文土器	小型壺	口縁部	28	5.3			小型壺の口縁部	
29	SP39	F1	縄文土器	鉢	口縁部	64	6		燃系(L) 口縁部横位の沈線		
30	SP41	F	縄文土器	鉢	体部	48	6.3		棒状工具による沈線と磨り消し		
31	SP42		縄文土器	鉢	体部	21	8		燃系文 浅い沈線		
32	SP44	F	縄文土器	鉢	体部	38	9		RL横位	煤付着	
33	SP52	F	縄文土器	鉢	体部	36	7.8		半載竹管による弧状沈線		
34	SP72	F	縄文土器	鉢	体部	46	9.7		口縁横位に3本の沈線 LR RLの純地	口縁外反	
35	SD25	F	縄文土器	鉢	口縁部	54	7.5		横方向ミガキ		
36	SD25	F	縄文土器	鉢	口縁部	32	5.5				
37	SG2		縄文土器	鉢	口縁部	53	5.3		棒状工具による沈線	外反	
38	SG2	F	縄文土器	鉢	体部	34	10		2mm幅の細い沈線 斜方向に施文		
39	SG2		縄文土器	鉢	体部	45	6.5		1~2mmの沈線		
40	SG2	F1	縄文土器	鉢	体部	29	8		2mm幅の細い沈線 斜方向に施文		
41	SG3	F	縄文土器	鉢	口縁部	41	8.5		口縁にそって深い沈線	波状口縁 外反する	
42	SG1	F	縄文土器	鉢	口縁部	64	9		口縁部に粘土縫による隆帯と沈線による区画	キャリバー形 ワラビ状文縫帶	
43	SG1		縄文土器	鉢	口縁部	39	9		口縁部に粘土縫による隆帯と沈線による区画	キャリバー形 燃糸の圧痕	
44	SG1	F1	縄文土器	鉢	口縁部	26	6.7		口縁部に3本の沈線		
45	SG1	F1	縄文土器	鉢	口縁部	31	11.5		ナデによる凹凸あり 粘土縫貼付けによる隆帯区画	口唇が平坦	
46	SG1	F1	縄文土器	鉢	口縁部	52	13.5		縄文地文→沈線	口縁外反する	
47	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	52	9		溝状の粘土縫貼付け		
48	SG1	F1	縄文土器	鉢	口縁部	44	8.5		粘土縫による隆帯	同一個体	

III 検出した遺構と遺物

表7 繩文土器観察表 (2)

図No	登録番号	遺構出土区	層位	種別	器種	遺存部	計測値mm			外観	備考
							長	幅	厚さ		
49	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	60	9			粘土柱による隆帯と沈線による区画	
50	SG1		縄文土器	鉢	体部	75	10			粘土柱による隆帯と沈線による区画	
51	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	54	9.5			粘土柱による隆帯と沈線による区画	
52	SG1		縄文土器	鉢	体部	90	8.5			粘土柱による隆帯と沈線による区画	
53	SG1		縄文土器	鉢	体部	80	8.8			粘土柱による隆帯と沈線による区画	
54	SG1	F1	縄文土器	鉢	口縁部	87	18			口縁部隆帯による装飾 アーチ状貼付け ワラビ状沈線	口縁部の装飾
55	SG1	F2	縄文土器	鉢	口縁部	27	13			口縁の装飾部位か	三脚形
56	SG1		縄文土器	鉢	口縁部	67	8			縄文地文の上に縦に弧状の沈線	口縁に一条の沈線と利突がめぐる
57	SG1	F1	縄文土器	鉢	口縁部	41	8.5			縄文地文の上に縦に弧状の沈線	
58	SG1	F1	縄文土器	鉢	口縁部	33	8.5			縄文地文の上に縦に弧状の沈線	
59	SG1	F1	縄文土器	小型鉢	口縁部	47	5			半載竹管による2本同時施竹管による横状斜位の沈線	
60	SG1		縄文土器	鉢	口縁部	24	7			口縁にそって連弧状沈線	
61	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	55	8.9			口縁部 X字状に粘土柱貼付け 利突	
62	SG1	F1	縄文土器	鉢	口縁部	39	6.5			口縁にそって2本の隆帯 間に利突の圧痕	
63	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	93	8.3			粘土柱が縦位に展開 細い沈線が入る	底部付近
64	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	96	9			粘土柱が縦位に展開 細い沈線が入る	63 64 65 67は同一個体
65	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	77	7.5			粘土柱が縦位に展開 細い沈線が入る	
66	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	64	7.5			細い粘土柱に細い沈線	
67	SG1	F2	縄文土器	鉢	体部	77	7			粘土柱が縦位に展開 細い沈線が入る	
68	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	43	7			細い粘土柱に細い沈線	66 69と同一個体
69	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	37	8.5			細い粘土柱に細い沈線	66 68と同一個体
70	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	31	6.5			中央横位に粘土柱貼付け 上部は縄文 下部は沈線	
71	SG1		縄文土器	鉢	体部	41	6.4			粘土柱 - 2本の沈線	
72	SG1	F2	縄文土器	鉢	口縁部	35	7			口縁部磨り消し 沈線が縱横する	やや外反
73	SG1		縄文土器	鉢	口縁部	48	8			口縁部上下に沈線で区画 体部にも沈線が延びる	波状口縁
74	SG1		縄文土器	鉢	口縁部	49	5.5			4本横位の沈線が縦位と磨り消し部を区画 5~6mmの棒状工具	
75	SG1		縄文土器	鉢	口縁部	62	7			口縁部磨り消し 1本の沈線で区画	波状口縁の一部
76	SG1		縄文土器	鉢	口縁部	69	8			柔軟な縄文 斜め方向に回転	口縁ミガキで無文帶に
77	SG1		縄文土器	鉢	口縁部	49	7.5			2段LR縄文→沈線区画→磨り消しによる無文部作出	
78	SG1		縄文土器	鉢	口縁部	40	8			2段LR縄文→沈線区画→磨り消しによる無文部作出	
79	SG1	F1	縄文土器	鉢	口縁部	24	5			縄文 横位沈線 1本	
80	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	33	6.9			沈線による区画 4mm~5mm幅の工具 →磨り消し	
81	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	42	6.5			沈線による区画 4mm~5mm幅の工具 →磨り消し	
82	SG1		縄文土器	鉢	体部	43	6.6			沈線による区画 4mm~5mm幅の工具 →磨り消し	竹管による円形刺突がある
83	SG1		縄文土器	鉢	体部	49	7.5			細い沈線 摩滅著しい	
84	SG1		縄文土器	鉢	体部	48	9			表面とともにいたねひなミガキ	
85	SG1	F	縄文土器	鉢	体部	51	8			縄文地文→半載竹管による斜方向への押引による隆帯作出	
86	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	40	6			沈線で区画して磨り消し部を作出	
87	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	72	6.5			粘土柱が縦回転	
88	SG1		縄文土器	鉢	体部	54	9			条の細い粘土柱が縦位回転	
89	SG1		縄文土器	鉢	体部	43	8			2段RL	
90	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	40	6.8			2段LR	
91	SG1	F1	縄文土器	鉢	体部	160	10			2段LR縦位方向	
92	SG1	F1	縄文土器	鉢	底部	200	9			2段RL	

表8 繩文土器・陶磁器・土製品等観察表

図No	登録番号	遺構出土区	層位	種別	器種	遺存部	計測値mm			外面	備考
							長	幅	厚さ		
93	RP62	SG1	F1	縄文土器	鉢	口縁部	49	6.5		表裏ナデ	穿孔1ヶ所
94		SG1	F2	縄文土器	鉢	口縁部	57	6.5		粘土柱による貼付け後、削み入れ 撫糸・沈縄	
95		SG1	F2	縄文土器	鉢	口縁部	56	6		撫糸・沈縄区画 塗り消し	
96		SG1	F2	縄文土器	鉢	口縁部	335	7.5		横力向への撫糸回転 内面でいよい なガキ	
97		SG1	F2	縄文土器	鉢	体部	42	7.2		粘土柱貼付けと沈縄による装飾	
98		SG1	F2	縄文土器	鉢	体部	52	6.5		へら状工具のナデ	
99		SG1	F2	縄文土器	鉢	体部	68	7.5		撫糸文	
100		SG1	F2	縄文土器	鉢	体部	54	9.5		器面ナデ→幅15mmのへら状工具で流 水状に描出	
101		SG1	F3	縄文土器	鉢	口縁部	70	7.5		撫糸→ワラビ状沈縄 視数の重なり沈縄	口唇に溝あり
102		SG1	F3	縄文土器	鉢	体部	37	10		縄文土文・粘土柱の貼付け	
103		SG1	F3	縄文土器	鉢	体部	78	10		縄文土文→粘土柱貼付けによる隆帯装飾	キャリバー形
104		67-41	II	縄文土器	鉢	口縁部	26	8.5		2段RL→沈縄 壓り消し	
105		67-41	II	縄文土器	鉢	口縁部	36	7		口縁部沈縄と刺突 口唇に刻みあり	
106		69-48		縄文土器	鉢	口縁部	28	8.2		口縁部沈縄と刺突	
107		66-45	II	縄文土器	鉢	体部	40	7		溝状の沈縄(幅4mm棒状工具)	
108		67-41	II	縄文土器	鉢	体部	29	7.5		沈縄による区画 塗り消し	
109		66-42	II	縄文土器	鉢	体部	39	8		2段RL 節の小さい縄文	
110		SP24	F	壺	壺	体部	43	10			中世 壺器系
111		SG1	F2	陶器	鉢	口縁部	21	7			近世
112		71-33	II	陶器	鉢	口縁部	15	8.5			備前・唐津か
113		68-41	II	陶器	鉢	体部	33	10.2			中世 壺器系
114		SG2		陶器	鉢	体部	42	10			近世 不明
115		SG1		陶器	鉢	口縁部	35	8			近世 不明
116		SG1	F1	陶器	すり鉢	体部	28	6.5			近世 不明
117		SG1		陶器	すり鉢	底部	101	13.5			近世 在地
118		SG1	F1	陶器	すり鉢	体部	18	6.5			
119	RP5	SG20	F1	壺器	皿	底部	89	6			唐津 灰釉
120		SG1	F1	壺器	碗	底部	235	6			近世 不明
121		65-44	II	陶器	鋸鉢	口縁部	32	5.5			近世 灰釉
122		66-42	II	陶器	碗	体部	22	6.5			唐津・備前
123		69-35	II	陶器	甌	体部	42	7.6			近世 唐津・備前か
124		SX13	F	磁器	甌	口縁部	42	4.5			近世 備前
125		63-48	II	磁器	皿	口縁部	19	3.4			近世後半 不明
126		67-45		磁器	碗	体部	30	4			近世以降 不明
127	RP54	SX15	F1	陶器	甌	体部	60	16			13c以前 珠洲系
128		SD18	F1	陶器	鉢	体部	64	11.5			13c以前 珠洲系
129	RP32	SD18	F2	陶器	甌	体部	78	14			13c以前 珠洲系
130		SG20	F1	瓦	瓦	体部	92	22			
131	RP51	SK12	F1	土製円盤	土鍤	体部	295	7.5			縄文土器の破片利用
132		SK17	F1	土製円盤	土鍤	体部	32	8			縄文土器の破片利用
133		SG1	F1	土製円盤	土鍤	体部	39	6.5			縄文土器の破片利用
134		SG1		土製円盤	土鍤	体部	50	7.5			縄文土器の破片利用
135		SG1	F1	土製円盤	土鍤	体部	39	7			縄文土器の破片利用
136		SG1	F3	土製円盤	土鍤	体部	47	6.5			縄文土器の破片利用
137		65-42	II	土製品	装飾品	口縁部	26	11.5			表面に指痕
138	RP45	SK16	F1	管状土製品	鉢	体部	27	22			
139	RP46	SK16	F1	管状土製品	鉢	体部	38.5	29			指頭による整形 指圧
140	RP44	SK16	F1	管状土製品	鉢	体部	44	24			指頭による整形 指圧
141	RP45	SK16		管状土製品	鉢	体部	49	23			指頭による整形 指圧
142	RP46	SK16		管状土製品	鉢	体部	81	27			指頭による整形 指圧
143	RP47	SK16		管状土製品	鉢	体部	92	31			指頭による整形 指圧
144		SG20	F	古鏡	寛永通宝		24	1			「文」
145		SG20	F	古鏡	寛永通宝		24	1			鏡による摩滅

石器の分類基準

中川原C遺跡第4次調査出土の石器は以下の基準にしたがって分類した。

石鎚 I類 親角な先頭部からなるもの

II類 先端角が大きく、厚みがあるもの

《細分基準》

A : 先端や基部の傾斜の変換点が明確なもの B : 変換点が明確でないもの

① 基部が外湾する ② 内湾する ③ 直線的 ④ 舌部が形成

a 側縁が外湾 b 内湾 c 直状 d 混在

石錐 I類 棒状のもの

II類 摘み部をもつもの

A 先端と基部が明瞭 B 先端と基部が不明瞭

石匙 I類 つまみ部と定規状の刃部からなるもの

II類 つまみ部と三角形の刃部からなるもの

III類 撮状の刃部をもつもの

A 刃部が片面加工 B 両面加工 C 部分的に混在する

範状石器 器体全体に加工を施し、刃部と基部が相対的位置を持つ。撮状になる。

小形円形搔器 径4cm以下の両面・片面に円形加工の施してあるもの

搔 器 平坦な二次加工が器体先端を中心に連続した刃部を持つもの

《細分基準》

背面 a 調整なし b 一部調整 c 一辺調整 d 二辺以上調整

腹面 a 調整なし b 一部調整 c 一辺調整 d 二辺以上調整

* 石器の破損や欠損品も含んでいる。

削 器 器体側縁に連続した刃部を持つもの

《細分基準》

背面 a 調整なし b 一部調整 c 一辺調整 d 二辺以上調整

腹面 a 調整なし b 一部調整 c 一辺調整 d 二辺以上調整

磨製石斧 範状の形態を持ち、刃部に研磨が施されているもの

石錐 扁平な小礫の両端に刻みが入るもの

凹石磨石・石皿 穂の一部に凹部のあるもの 磨面の共存するものもある。表面に煤が付着したり、焼けたものもある。

表現方法



凹部



磨面

煤付着



表9 石器・石製品等観察表(1)

図面番号	出土区	層位	種別	類型	遺存部	計測値mm.g	石材	調整加工		備考
								長	幅	
1	67-42	II	石顎	I 4c	○	19.5 8 2.5	1 黒メノウ	微細加工	微細加工	舌部あり
2	RQ11	67-41	石顎	I 4c	○	19.0 10 3.5	1 メノウ	微細加工	微細加工	舌部あり
3	RQ36	SK16	II	石顎	I 4a	○	20.5 17 3	1 白岩	微細加工	微細加工
4	RQ17	SG1	F1	石顎	I 4c	先欠	21.5 10.5 3.5	1 白岩	微細加工	舌部あり
5	RQ14	66-42	F1	石顎	I 4c	先欠	23 16 3.5	1 黒メノウ	微細加工	微細加工
6	RQ4	SX6	F1	石顎	I 4c	先欠	25.5 12 4	1 白岩	微細加工	微細加工
7	RQH1	SK23	F1	石顎	I Bd	○	25 13 6	2 鉄石英	微細加工	舌部あり
8		SX13	F1	石顎	II 1a	○	18.5 15 2	1 白岩	周縁加工	素材面
9	67-42	II	石顎	I 2c	先欠	32 15 4	3 白岩	微細加工	微細加工	自然面あり
10	70-33	II	石顎	II 1a	○	32.5 23 8	5 鉄色石英	微細加工	微細加工	前頭の可能性
11	62-48	F1	石顎	II B 4	○	29 17 6	5 鉄石英	微細加工	微細加工	素材面残す
12	SG3	F2	石顎	II B 4	○	35 20 7.5	6 石英	微細加工	微細加工	加工中?
13	RQ18	SG1	F1	石顎	II 1a	○	32 21 7	4 白岩	微細加工	微細加工
14		66-43	F	石顎	I	先端	32 8 6.5	1 白岩	微細加工	微細加工
15		SG1	II	石顎	I	体部	28.5 13 11	4 白岩	微細加工	断面四角
16	RQ40	SK23	II	石顎	II A	基部	28 30 8.5	5 白岩	微細加工	一部素材面
17	62-48	II	石顎	II A	○	31 23 8.5	6 白岩	微細加工	摘み部楔形	
18	66-44	F1	石顎	II A	○	42 33 11	14 白岩	周縁加工	一部素材面	
19	71-32	II	石顎	II A	○	45 30.5 12	14 白岩	打面加工	摘み部内形	
20		SG1	II	石顎	II A	先端欠	54 29 11.5	19 白岩	周縁加工	加工
21	RQ63	SX15	II	石芯	II A	○	59 29.5 7.5	13 白岩	先端加工	摘み部大型
22		69-37	F1	石芯	I A	○	53 20 5	7 白岩	周縁加工	月こぼれ
23	RQ52	SX15	II	石芯	B	先端欠	52 27 12	18 白岩	全端加工	ボリッシュアリ
24		68-39	F1	石芯	C	基部	56 32 10.5	15 白岩	全端加工	全体加工
25		SG1	II	石芯	○	96 43 21	140 硬灰岩	摘み加工	周縁	
26	XO	F1	兜状石器	○	118 44 14	114 白岩	全端加工	全端加工	ボリッシュアリ	
27	SG2	F1	円形搔器	○	32 28 9.5	8 白岩	周縁加工	周縁加工		
28	SK16		円形搔器	○	32.5 24 5.5	4 白岩	周縁加工	周縁加工		
29	SK13	F1	円形搔器	○	25 23 8.5	5 黒メノウ	微細加工	微細加工		
30	SX15	F1	円形搔器	○	25 26 6.5	5 黒メノウ	側面加工	側面加工		
31	SK11	F2	円形搔器	○	22 18 6.5	3 白岩	微細加工	微細加工		
32		71-36	II	搔器	dd	○	44 24 11	11 白岩	周縁加工	未完成か
33		表抜	I	搔器	dd	○	46 40 12	24 白岩	周縁加工	周縁
34		表抜	II	抉り石器	cd	○	52 46 8	17 白岩	先端加工	抉り加工
35		70-35	II	搔器	cd	○	28 34 6.5	8 白岩	周縁加工	先端
36	RQ3	SC2	F1	削器	dc	○	125 50 14	41 白岩	側面加工	側面加工
37		SK23	F	加工石器	cc	○	39 21 10	10 白岩	側面加工	ボリッシュアリ
38		SK13	F1	搔器	b	○	27 8 10	2 黒墨岩	周縁加工	加工
39		SG1	F1	搔器	d	先端	24 25 5	4 白岩	側面のみ	未完成か
40		SG1	F1	搔器	dd	○	46 29 10	19 白岩	加工	加工
41	RQ58	SX15	F1	搔器	cd	一部欠	46 33 9.5	22 白岩	先端	先端 基部
42		67-42	II	搔器	d	先端	38 37 7.5	14 白岩	周縁加工	部分
43		70-33	II	加工石器	d	先端	43 21 7	10 白岩	周縁加工	ボリッシュアリ
44		66-45	II	削器	db	○	55 32 10.5	34 白岩	側面加工	側面加工
45		表抜	I	削器	e	○	47 24 15	21 白岩	微細加工	微細加工
46		66-43	F1	削器	e	○	64 26 10	27 白岩	側面加工	側面
47		65-45	F1	削器	d	○	53 19 4.5	6 白岩	側面加工	側面
48		SG1	II	削器	e	○	40 18 7	5 鉄石英	先端	打面は側面
49		SG1	F1	削器	c	基部	46 26 9.2	16 白岩	側面	側面
50		SG2	F1	削器	db	体部	58 44.5 12.5	44 白岩	側面	月こぼれ
51		SX15	F	削器	d	両端欠	31 30 6.5	8 白岩	側面加工	ボリッシュアリ
52		SG1	II	加工石器	d	体部	36 36 9	15 白岩	側面加工	側面
53		64-46	F1	削器	d	基部	42 37 14	25 白岩	側面	側面
54		SG1	F	削器	d	基部	42 34 15	17 白岩	周縁加工	側面
55		SG3	F1	削器	d	○	81 27 11	25 白岩	側面加工	側面
56		南区	II	削器	e	○	76 40 10	31 白岩	側面月こぼれ	側面
57		SG2	F1	削器	cc	○	67 39.5 9	25 白岩	側面加工	ボリッシュアリ
58		SG1	II	削器	dc	側面欠	63 30.5 9.5	26 白岩	側面	側面
59		SK11	F2	削器	e	先端欠	62 46.5 13	66 且貫灰岩	側面加工	打面は側面
60		SK11	F1	削器	de	先端	50 27.5 6	14 白岩	側面加工	側面
61		69-32	II	石核	○			15 白岩	1段から剥離	自然面あり
62	RQ68	SG1	F1	磨製石斧	半根	92 61 29	292 安山岩	研磨 キズ	研磨 キズ	基部欠
63		SG1 F3	F3	磨製石斧	体部	71 44 26.5	153 安山岩	研磨 キズ	研磨 キズ	
64	RQ47	SK14		磨製石斧	先端欠	99 39 26	190 且貫灰岩	研磨	研磨	
65		SG1	F3	磨製石斧	半根	78 50 27.6	166 且貫灰岩	研磨	研磨	基部欠
66		SG20	F1	磨製石斧	体部	57 48 22	105 安山岩	研磨 キズ	研磨 キズ	
67	RQ30	SG1 F2	F2	磨製石斧	○	109 50 21	184 安山岩	研磨 キズ	研磨 キズ	刃部欠
68	RQ50	SX13		磨製石斧	○	32 11.5 3.2	2 流紋岩	研磨	研磨	

表10 石器・石製品等観察表 (2)

図面 登録番号	出土区	層位	種別	類型	遺存部	計測値mm.g	石材	調整加工		備考
								長	幅	
69	RQ34	SG3	F2	磨製石斧	○	47 22 11 23	安山岩	研磨	研磨	
70	RQ15	69-40		磨製石斧	基部	57.5 34 22 63	凝灰質砂岩	研磨	研磨	
71		SG1		磨削した芯	一部	66 20 12 24	流紋岩	研磨	研磨	
72	RQ2	68-39	II	石製円盤	一部欠	31 31 11 15	泥岩	研磨	研磨	剝れ
73		65-43	II	石製円盤	一部欠	21 19 3.6 3	流紋岩	研磨	研磨	
74				砥石	一部欠	30 23 27 5	砂岩	研磨	研磨	
75		SG3	F1	砾石	破損	31 24 6 5	砂岩	研磨	研磨	
76		SG1	F1	石製円盤	○	46 45 7.5 19	泥岩	側面加工	側面加工	
77		SG20		石製円盤	○	155 132 29 856	安山岩	側面加工	側面加工	大型、難面あり
78	RQ21	SG20 F1	F1	石鍬	○	51 39 18.5 50	安山岩	キズ		
79	RQ20	SG1	F1	石鍬	○	51 33.5 20 39	黒色泥岩			
80	RQ56	SX15	F1	石鍬	○	62 47 14.5 59	黒色泥岩			
81	RQ28	SG1	F1	石鍬	○	61.5 37 13 40	泥岩	キズ	擦痕	
82	RQ7	SG20 F1	F1	石鍬	○	58 37 15.5 47	安山岩		擦痕	
83	RQ33	SG3	F2	石鍬	○	52 44 19 63	安山岩	擦痕	擦痕	
84	RQ1	SG1	F1	石鍬	○	58 28 15 29	泥岩			
85	RQ9	SP9		石鍬	○	58 33 13.5 38	泥岩	キズ		刻み2重
86	RQ6	SG20 F1	F1	石鍬	○	56 39 11 41	凝灰質砂岩			
87	RQ12	66-41		石鍬	○	58 36 17 41	安山岩			
88	RQ22	SG20 F1	F1	石鍬	○	44.5 34 17 31	安山岩			
89	RQ8	68-40		石鍬	○	57.5 31 14 27	泥質灰岩			
90	RQ37	SG1	F2	石鍬	○	49 35 19 46	黒色安山岩	キズ	擦痕	
91	RQ48	SX14		石鍬	○	49 35 15 34	黒色安山岩	擦痕	擦痕	
92	RQ49	SP28		石鍬	○	36 29 13 17	砂岩			刻み2重
93	RQ29	SG1	F1	石鍬	○	52.5 31 11 27	黒色安山岩			
94	RQ22	SG20		石鍬	○	41 26 11 14	泥質灰岩			
95		SG1	F2	石鍬	○	48.5 28.5 11 19	黒色安山岩			
96	RQ23	SX15		石鍬	○	54 31 12 29	黒色安山岩			
97	RQ10	66-42		石鍬	○	48 31 19 40	安山岩			刻み2重
98		SG1		石鍬	○	40 30 12 22	泥岩			
99	RQ24	63-47		石鍬	○	48 33.5 13 25	黒色安山岩	キズ 擦痕	擦痕	横方向に傷
100		SG1	F1	石鍬	○	42 31 18 43	黒色安山岩			
101		SP70		石鍬	○	48.5 32 21.5 43	黒色安山岩			
102		68-40		石鍬	○	40 29 14 20	黒色安山岩			
103	RQ27	SG1	F1	石鍬	○	42 28.5 11 18	安山岩			
104		SK14		石鍬	○	42 28 11 20	泥質灰岩			刻み片側のみ
105	RQ31	SD18		石鍬	○	40 29 10.5 17	黒色安山岩	擦痕	擦痕	
106		68-41 II		石鍬	○	45 41 15.5 40	黒色安山岩	キズ		
107	RQ20	68-41		石鍬	○	40 26.5 14 10	白色泥岩	部分欠損	部分欠損	
108	RQ19	70-35		石鍬	一部欠	42 36 15 28	泥岩			
109		SP25		石鍬	一部欠	51 36.5 11 22	黒色安山岩			
110		SG1		石鍬	一部欠	42 38 21 35	褐色泥岩			
111		SP22		石鍬	半損	49 38 14.5 26	黑色泥岩			
112		SD95		石鍬	半損	34 38 15 18	褐色泥岩			
113		SX15		石鍬	半損	37 22.5 9 7	白色泥岩	キズ		
114		SX13		石鍬	破損	29 13 9 6	黒色安山岩	キズ		
115		66-42		石鍬	一部欠	50 30 11 24	白色泥岩			
116		SG1	F2	石鍬	半損	22 26 8 5	黒色安山岩			
117		SG1	F1	石鍬	半損	26.5 27 9 8	泥岩			
118		70-34		磨石	半損	130 102 20 400	安山岩	磨り面	磨り面	
119			II	磨石	○	127 72 40 515	花崗岩	凹2ヶ	凹2ヶ	
120		71-32		磨石	○	103 93 49 650	花崗岩	凹2ヶ	凹2ヶ	
121		SG20	F1	稚	○	82 64 40 281	花崗岩			
122		SG1	F2	凹石	○	105 100 50 755	花崗岩	凹1ヶ	凹1ヶ	敲き痕あり
123		SP51		凹石	○	132 68 33 460	花崗岩	凹2ヶ	磨り面	
124		SG1	F2	磨石	割れ	100 98 50 650	白色泥岩	磨り	磨り	
125		SG20		凹石	○	127 59 39 380	砂岩	凹3ヶ	凹2ヶ	敲き痕あり
126		SG1		磨石	半損	163 79 57 1460	花崗岩	磨り面	磨り面	
127		66-67-2 F1		石墨	破損	102 67 19.5 161	安山岩	凹面あり	加工痕	
128		SG1		磨石	半損	158 116 90 1885	安山岩	磨り 腫れ	磨り 腫れ	火熱を受ける
129		SG1		石墨	破損	101 136 49.5 1170	安山岩	浅い凹面	磨り	
130		SX21	F	稚	一部欠	176 109 42 1178	砂岩	凹面あり		
131		SP51	F	石墨	破損	177 78 51 935	安山岩	表面凹	加工痕	使用による研磨
132		SD18		稚	○	174 130 70 1925	安山岩	削れ 加工痕	火熱を受ける	
133		SG20	F3	石墨	一部欠	192 158 34 1930	安山岩	中央凹面	磨り	使用による研磨
134		SG1	F2	稚	割れ	273 248 58 6250	花崗岩	平坦	平坦	
135		SG1		稚	○	242 200 39 2950	安山岩	磨り面 煙	磨り面	磨れ 火熱を受ける
136		SG1		磨石	○	217 166 38 1975	泥岩	磨り面 煙	磨り面	

IV まとめ

1 繩文時代の遺構について

今回発掘した農道予定の1000mの調査区は、以前の圃場整備による造成工事により包含層及び遺構面が削平し破壊されていた。堆積層中で出土した遺物は概して原位置を移動し再堆積した可能性が高い。ただ、河川跡や土壌・ピット類など遺存していた遺構は遺跡の構造を把握していく上で貴重な知見を提供している。

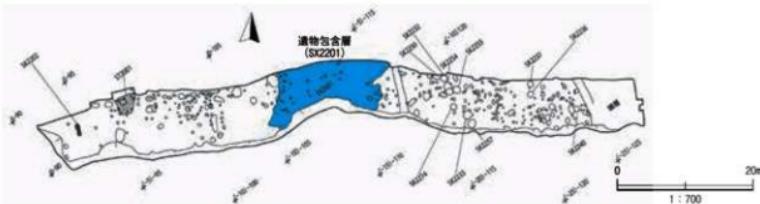
(1) 土壌・ピット群の性格

調査区中央から検出した土壌群（SK10 SK11 SK16 SK17）はその出土した土器から縄文時代後期初頭～前葉の時期に掘り込まれたものであることがわかる。いずれも段丘上のやや高まっている部分に位置し、河川跡に沿って東西に広がることが予想される。周辺に住居跡が遺構の広がり存在すると考えられるが今回の調査では検出されなかった。

南側斜面に集中するピット群は63ヶ所を数え、形状や礫の入り方から4類に区分した。ほとんどは包含層中からの掘り込みがなされており、縄文時代後期初頭の土器片が入り込んでいることからこの時期のものが大半を占めると考えている。また、覆土には柱痕が残されていることから柱が設置されていたものもあるようである。特殊なのはやや大きい扁平な礫が覆土中に縦位や斜位・横位に入り込んでいるものである。ある程度埋没したり埋められてから入り込む柱穴状況からは柱を設置するための支え、もしくは基礎の押さえとして機能していたものとも考えられるが、なお検討が必要である。

(2) 3次調査（E区）検出の遺構

用水路部分の調査のため段丘に沿った約600mの調査であるがフラスコ状土壌・おとし穴・ピット・谷状のくぼ地がみられた。土壌やピットは径20cm～50cmのもので縄文時代後期の土器が含まれていた。住居跡の検出ではなく、遺構は段丘の中央部に分布するものと考えられる。谷状のくぼ地は今回の調査区の南端に検出したSG1包含層に連なるもので埋没した谷状のくぼ地は段丘の東西方向に広がっていると考えられる。



第59図 中川原C遺跡第3次調査（E区）遺構配置図（山岸セシエン第98集）

2 縄文時代の遺物について

(1) 土器の年代

本遺跡から出土した縄文土器は、IV調査の概要第3節で述べた縄文時代中期中葉のもの、縄文時代後期初頭～前葉のものに区分できる。

第Ⅰ群 縄文時代中期中葉のもの

本群は口縁部から体部にかけて粘土紐による貼り付けや隆起帯を形作り、曲線的な幾何学模様の装飾が施されるものである。横S字や環状の形に粘土紐や縄文原体の圧痕が組み合わさるような複雑な作りをみせる。東北南半の型式では大木8式に相当する土器群である。本群は第1次・第2次調査の行われた遺跡西南側で大量に出土している。

第Ⅱ群 縄文時代後期初頭から前葉のもの

4 類 細 分

本土器群は文様の施文法や文様展開から細分できる。

a類 藤手文や卵状文・刺突・縦の懸垂線などが主文様となる。沈線により文様が描かれているもので、磨削縄文手法が多用される特徴がある。器種が推定されるものはすべて深鉢形土器で、器形は胴部が膨らみ頸部がくびれるものと、直線的に外反するものがある。文様は器形に対応し、前者は口唇部と胴部に、後者では胴部に施文されている。(第32図-2・3・56～61・63～69・73・94・101)

b類 多条沈線を文様描線として渦巻きや弧状のモチーフが施される。沈線は一本ごとに施文されるが文様は沈線が3～5本組み合はさって施され、特に3・4本を1単位とするものが多い。縄文を地文とし口縁直下に巡る沈線を文様の起点として渦巻き文や連弧文が描かれ、胴部に多条沈線による懸垂文が施されるもの(第31図-39・4・5・85・107)、口縁部にある突起下に貫通孔をもち、この貫通孔から隆体が垂下しているもの(23)など。

c類 口縁部と体部文様態が区別され、口縁や体部に横位や斜位・溝状に沈線区画による帶縄文が施文される。口縁から体部に数条の沈線とともに帶縄文が施されるもの(14・15・35・41・74)、口縁部が磨り消しの無文帶となり、体部に斜位に帶縄文が施されるもの(19・22・32・72・75～77)などがある。

d類 帯縄文によるモチーフが横位に施文展開する土器群。帶縄文が重疊し、間に幅狭の無文部がみられる。縄文地に帯状の沈線が引かれ、末端が楕円形になるもの(第29図-22・第30図-35・36)。

中川原C遺跡の第3次調査E区及び今回の第4次調査区から出土した土器類は、大きく戸沢村津谷遺跡(1997)のI群からIV群土器に、最上町水上遺跡(1980)のII群土器、かっぱ遺跡(2003)で報告されたII群・III群土器に対比されるものが含まれている。

表11 最上地域における縄文時代後期前葉の土器群対応

中川原C遺跡4次(2007)	津谷遺跡(1997)	水上遺跡(1980)	かっぱ遺跡(2003)
I群 縄文時代中期中葉	I群 縄文時代後期初頭	I群 縄文時代中期中～末葉	I群 縄文時代中期中葉
II群 後期前葉～前葉	II群 後期初頭	II群 後期初頭～中葉	II群 後期前葉 南境1式
a類	III群 後期前葉	a類	III群 後期前葉 南境2式
b類	IV群 後期前葉	b類	
c類			
d類			

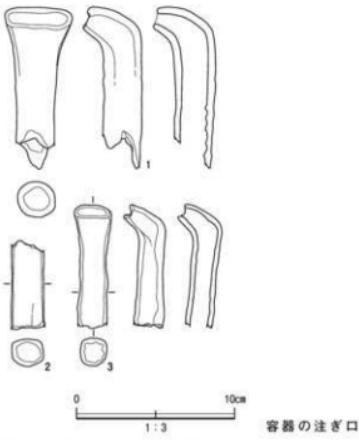
(2) 管状土製品について

SK16とした土壤から出土した管状の土製品は県内では舟形町西ノ前遺跡（1993 山形理文セン第1集の第75・76図）や鶴岡市野新田遺跡（1996 山形理文セン第40集の第82図）、村山市西海澗遺跡（黒坂雅人1992）に類例が見出せる。西ノ前遺跡の資料は口部分が管状に折れ曲がって口部分がやや梢円形に整形されているものがあり、報告では植物の管を束ねたものを芯にして粘土を巻きつけたものと想定した。野新田遺跡の資料も同じように管状の折れ曲がったものである。これらと比較すると中川原C遺跡出土の管状土製品はやや口径が小さい。いずれも用途は不明であるが、なんらかの容器に取り付け、注ぎ口のような役割を担っていたとも推測される。縄文時代中期中葉の時期に出土する事例が多く、この時期に特徴的な土製品と考えられる。

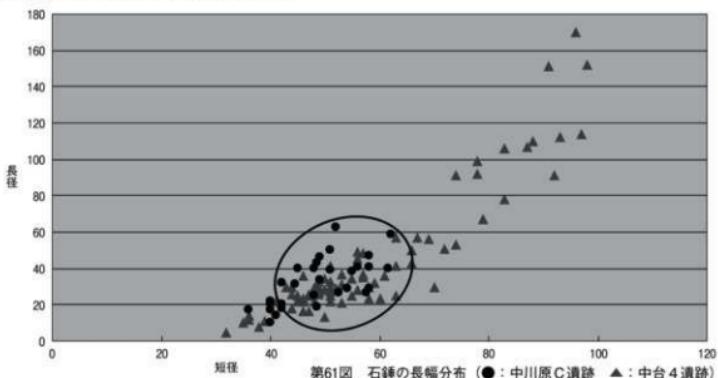
(3) 石錘について

中川原C遺跡第3次調査のE区でも同様の石錘がまとめて出土した。最上地域では他にも戸沢村津谷遺跡・真室川町中台4遺跡・最上町かっぱ遺跡・水上遺跡から石錘の出土が報じられている。いずれも長径40mm～60mmの大きさにあるが、中台4遺跡の出土資料はやや大型である（第61図参考）。共通して標の両端に幅1～2mm程の溝が掘りこまれている。石材は軟質の凝灰岩や泥岩、黒色安山岩等を利用している。漁撈にかかる遺物として考えられているが未だ、装着や使用方法など不明な部分がある。

漁撈



第60図 舟形町西ノ前遺跡出土の
管状土製品



第61図 石錘の長幅分布 (●: 中川原C遺跡 ▲: 中台4遺跡)

(4) 石器石材

石器の材料となった石材は珪質頁岩が多いが、石礫に関しては黒曜石・石英・鉄石英・玉髓など原石は小さいものの硬く、加工しやすい石材が利用されている。石礫へのこのような多様な石材の利用は、最上地域では共通して看取でき、鮭川村小反遺跡（2006 山埋文セン第148集）、最上町かっぱ遺跡（2003 山埋文セン第114集）でも黒曜石や鉄石英・玉髓等が石器石材として利用されていることが知られている。石礫用石材としての利用割合の高さは共通する傾向にある。新庄盆地では立泉川や升形川・鮭川ではこれらの石材を河床にて確認することはできず、最上川や他の地点からの持ち込みが想定されてくる。黒曜石は気泡が少なく透明感のある石質を見せ、現在知られている月山の箇所ではなく、月山周辺の他地点の可能性が高い。

3 中世の遺構と遺物について

中川原C遺跡第2次発掘調査（F区）において中世と思われる13棟もの建物跡が検出され白磁皿・瀬戸美濃の灰釉皿・珠洲系の壺・瓦質火鉢・すり鉢などが出土した。陶磁器の年代から
 15 世紀建物は15世紀頃のものと推定された。そして遺構の状況から一般の集落跡とは趣きを異にする遺構群であることが指摘された。今回の調査区はF区から約100m離れた調査地点に当たるため、建物群の広がりが予想されたが中世以降の建物や関連する遺構は検出されなかった。しかし
 SD 18 SG20河川跡やSD18溝跡等から中世に遡る珠洲系陶器や瓦片が出土したことは、中世の遺構が近くに存在することを裏付けるものである。遺跡南東部分のエリアに中世の遺構が広がることがより明らかになってきたと言える。

4 まとめ

中川原C遺跡から土塙等11基、ピット群、溝跡などで住居跡の検出はなかった。遺物は縄文土器を中心にして石器・陶磁器・石製品・土製品が出土した。遺物の出土状況からは以前の圃場整備による包含層や遺構の削平が確認された。造成工事の影響を受けなかった谷地形の範囲から遺物が集中的に出土した。小規模な谷の周辺と土塙群の近くに住居が営まれていた可能性がある。

出土した縄文土器は大半が縄文時代後期初頭～前葉に比定されるもので、時間的に限られた資料であった。また第3次調査のE区出土の土器とも共通する土器群であった。最上地域では戸沢村津谷遺跡から縄文時代後期前葉の土器がまとまって出土しており、当該期における追加資料となつた。まとまって出土した石錘も縄文時代後期前葉の時期のものと想定され、ある程度の生業を復元することも可能となってきた。

遺跡面積60,000m²もの広がりを持つ中川原C遺跡は、縄文時代中期、後期、中世の遺構遺物の内容から他の比類をみない大規模な遺跡であることが伺える。遺跡や周辺は今後も開発がかかる地域であることから、今後も継続して慎重に調査を進めていく必要がある。

主な参考文献

- 佐藤庄一他 1996 「富沢I遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
小間真司他 1997 「津谷遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第46集
阿部明彦 1990 「川口遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第151集
水戸部秀樹 2003 「かっぱ遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第114集
黒坂雅人他 2001 「中台4・5遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第84集
佐藤正俊他 1980 「水上遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第24集
名和・阿部 1981 「水上遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第40集
田中利和他 1986 「六反田遺跡発掘調査報告書」仙台市教育委員会
佐竹桂一 2002 「中川原C遺跡 立泉川遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第84集
水戸部秀樹 2006 「小反遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第148集
大類 誠 1982 「漆坊遺跡発掘調査報告書」尾花沢市教育委員会
黒坂雅人 1992 「山形県村山市西海瀬遺跡」『日本考古学年報43』日本考古学協会

写真図版



調査風景



重機稼働状況



表土除去



遺構検出作業（中央区）



遺構検出作業（南区）



記録作業状況



記録作業状況



調査説明会（6月28日）



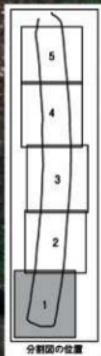
調査終了 埋め戻し作業



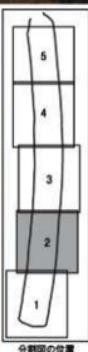
調査区全景（上空北から）



調査区全景（上空南から）



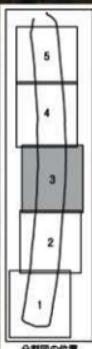
遺構完掘状況 1 (上空から)



遺構完掘状況2（上空から）



造構完掘状況 3 (上空から)





遺構完掘状況 4（上空から）



遺構完掘状況 5 (上空から)



基本層序（中央西壁）



河川跡検出状況（北から）



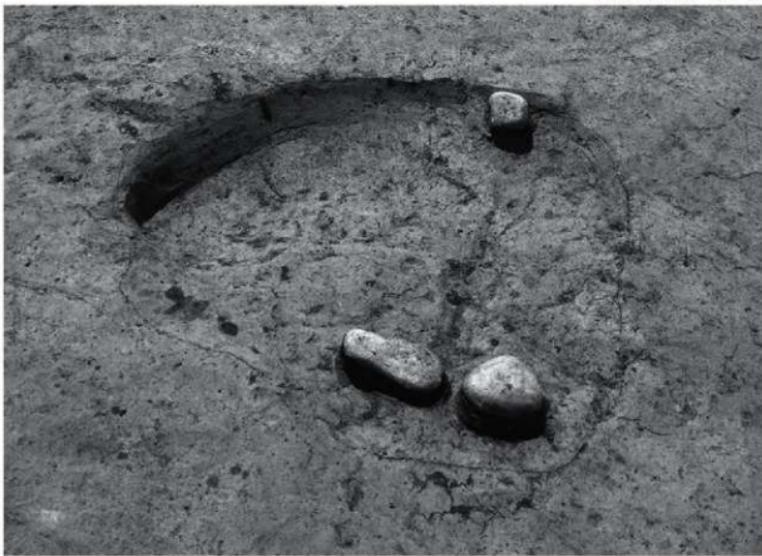
中央区遺構確認状況（北東から）



SX13検出状況（北東から）



土壤群確認状況（東から）



SK10完振状況（南から）



SK11 遺物出土状況
(北西から)



SK12完振状況 (東から)



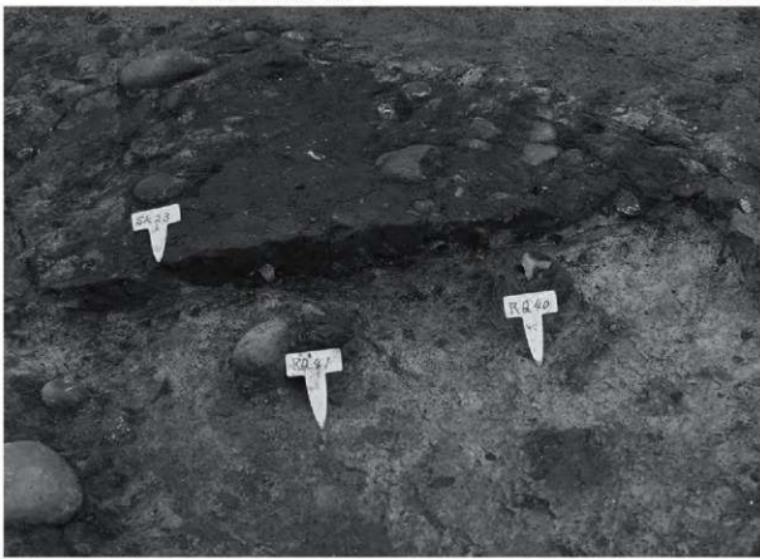
SK14 掘出状況 (南から)



SX15遺物出土状況（北から）



SX15完掘状況（北から）



SK23遺物出土状況（西から）



SK16断面（西から）



SK16内管状土製品出土状況
(上層)



SK16内管状土製品出土状況
(下層)



SK16完掘状況（北から）



SK17遺物出土状況（西から）



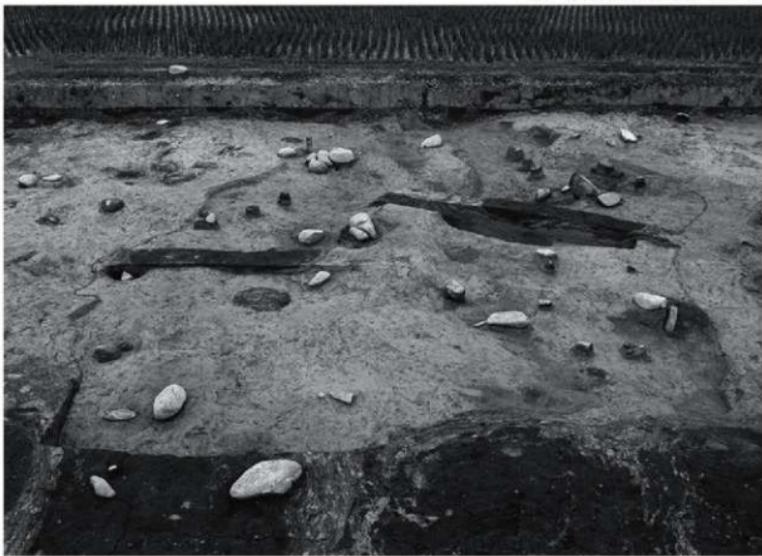
SD18溝跡 遺物出土状況（東から）



SD18溝跡 断面（西から）



SG2 SG3河川跡株出状況（北から）



SG2 SG3河川跡完掘状況（東から）



SG1遺物包含層(F2)確認状況（北東から）



SG1遺物包含層(F5)精査状況（北東から）



SG1遺物包含層完掘状況（北東から）



SX21検出状況（東から）



焼土確認状況（北東から）



磨製石斧（RQ68）出土状況



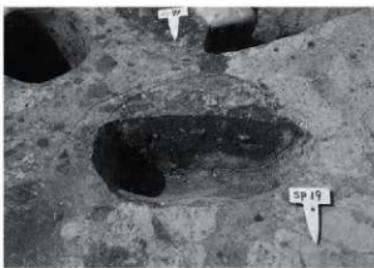
石錐（RQ28）出土状況



SG20河川跡棟出状況（南東から）



SG20河川跡側からの石錐等出土状況（北東から）



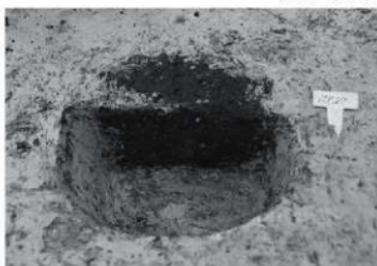
SP19 (西南から)



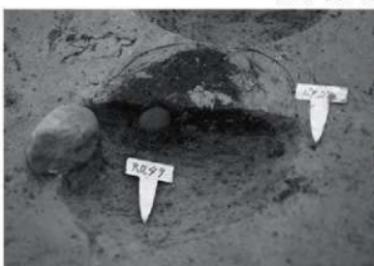
SP22 (南から)



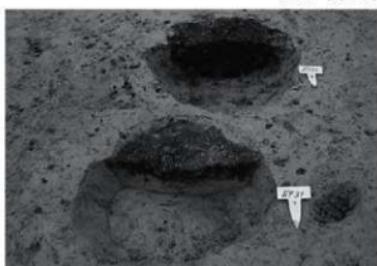
SP26 (南から)



SP27 (南から)



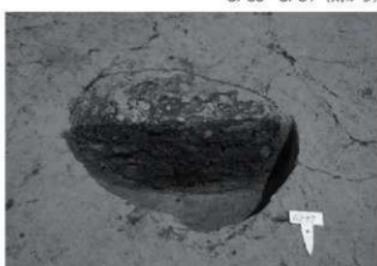
SP28 (南から)



SP30 SP31 (南から)



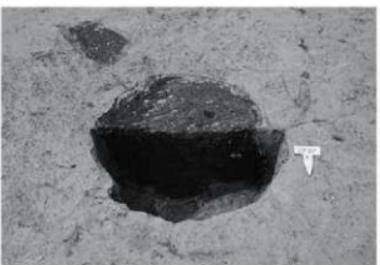
SP32 (南から)



SP37 (南から)



SP40 (南から)



SP41 (南から)



SP51 (西南から)



SP54 (西南から)



SP56 (南から)



SP57 (南から)



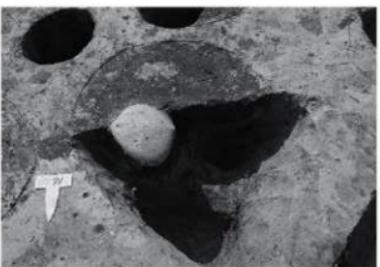
SP59 (南から)



SP60 (南から)



SP65 (南から)



SP71 (東から)



SP71 SP80 (南から)



SP77 SP81 (南から)



SP87 (南から)



SP82 (東から)



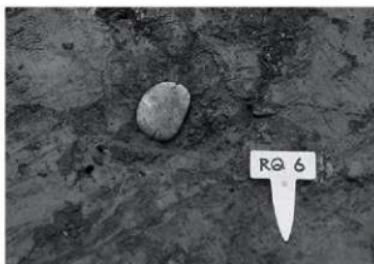
SP81 (南から)



SP91 (南から)



唐津系碗 (RQ5) 出土状況



石錐 (RQ6) 出土状況



石英 (RQ13)



SG3内 水晶 (RQ16) 出土状況



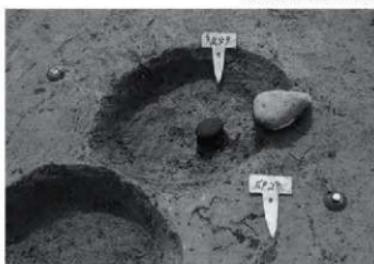
SK23内石錐 (RQ40、RQ41) 出土状況



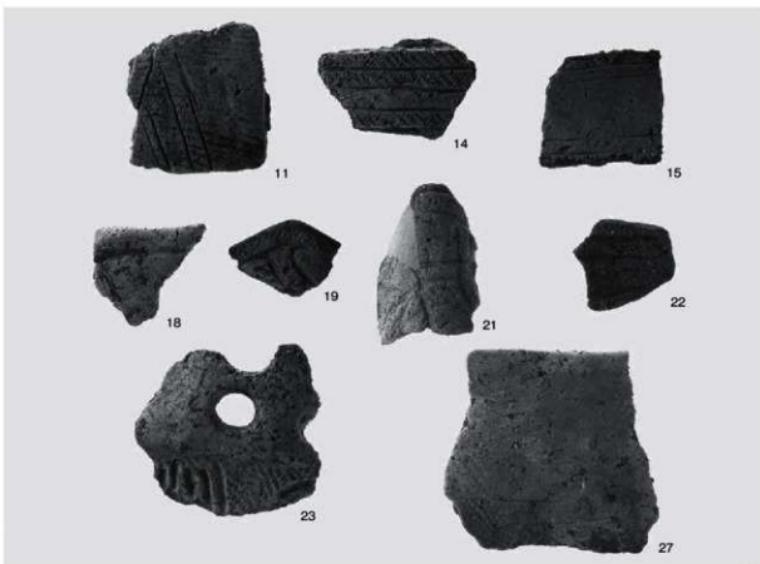
SP22内石錐出土状況



SX15内石錐 (RQ63) 出土状況



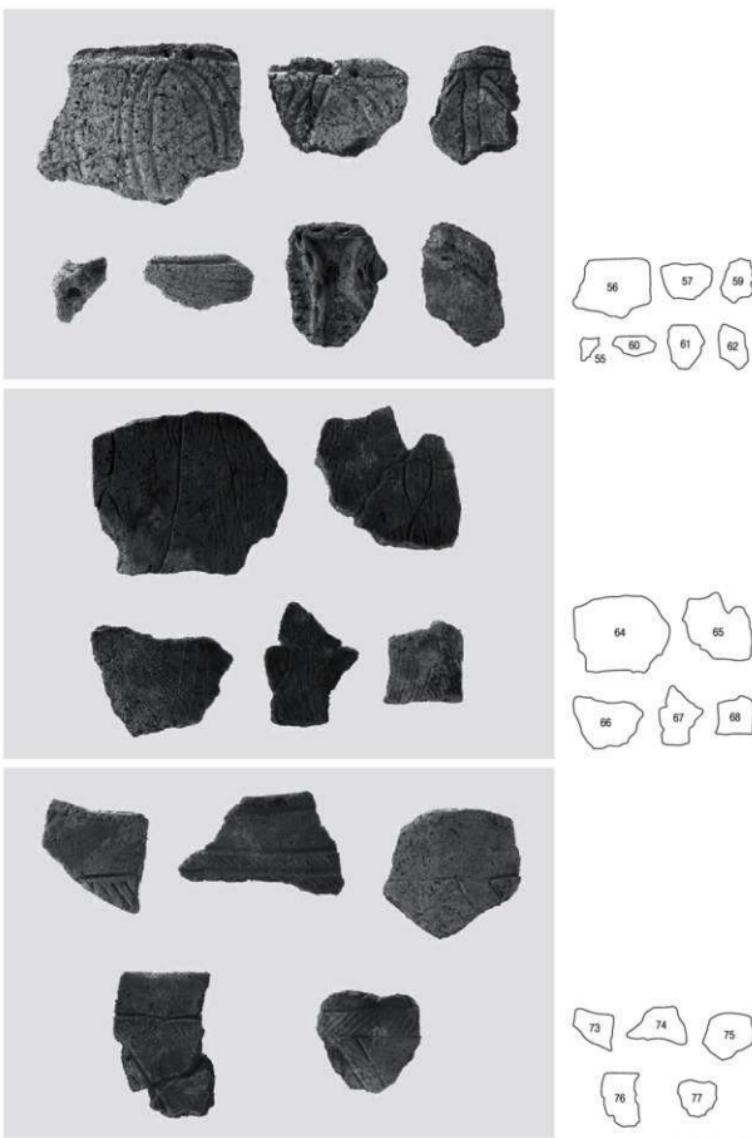
SP28内石錐 (RQ49) 出土状況



縄文土器（1）



縄文土器 (2)



縄文土器 (3)



縄文土器 (4)



101

103



119

120

121

122

123

表



119

120

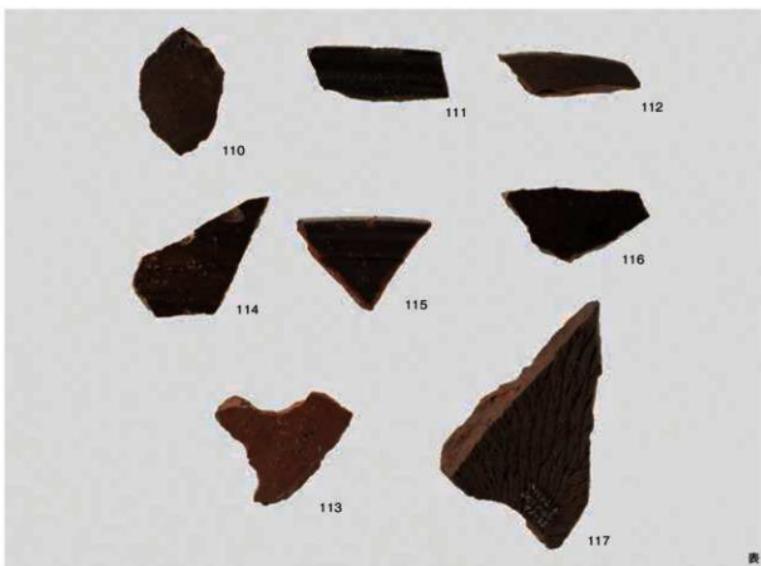
121

122

123

表

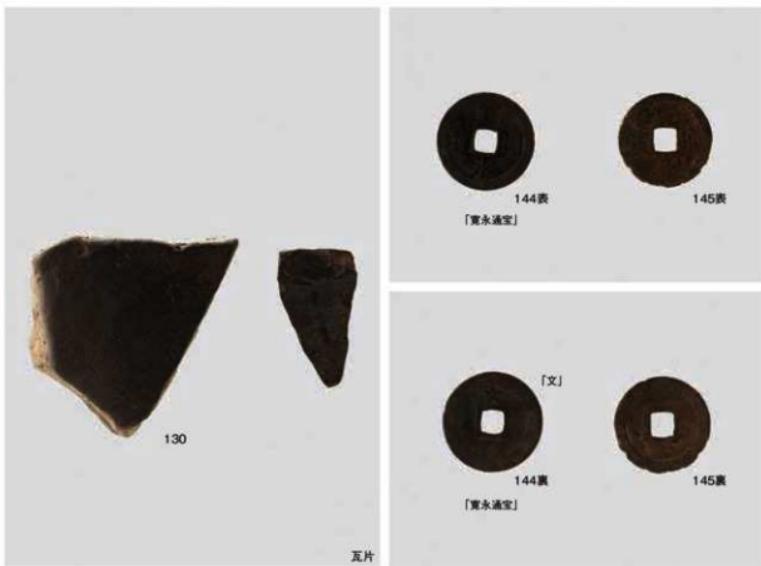
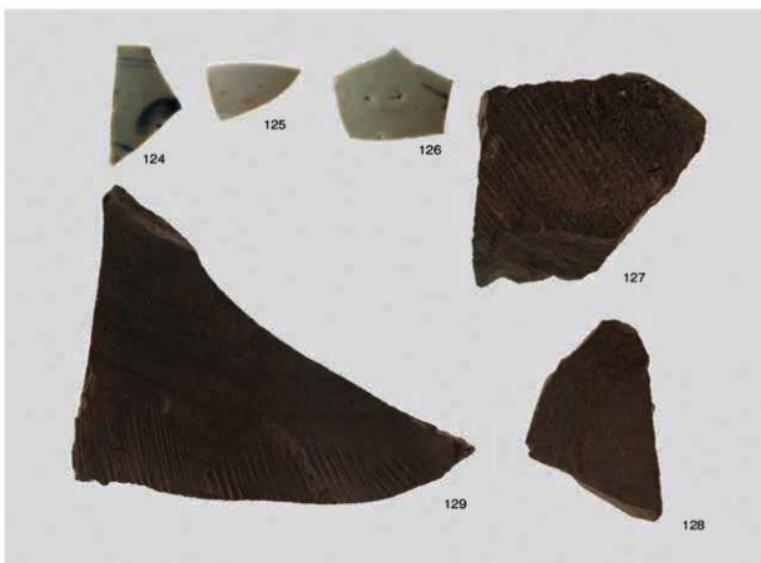
绳文土器 (5)・陶磁器類 (1)



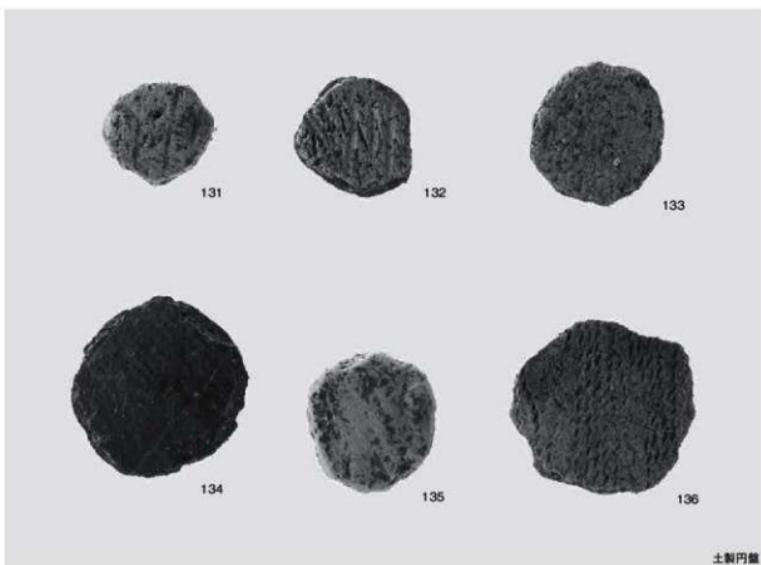
真



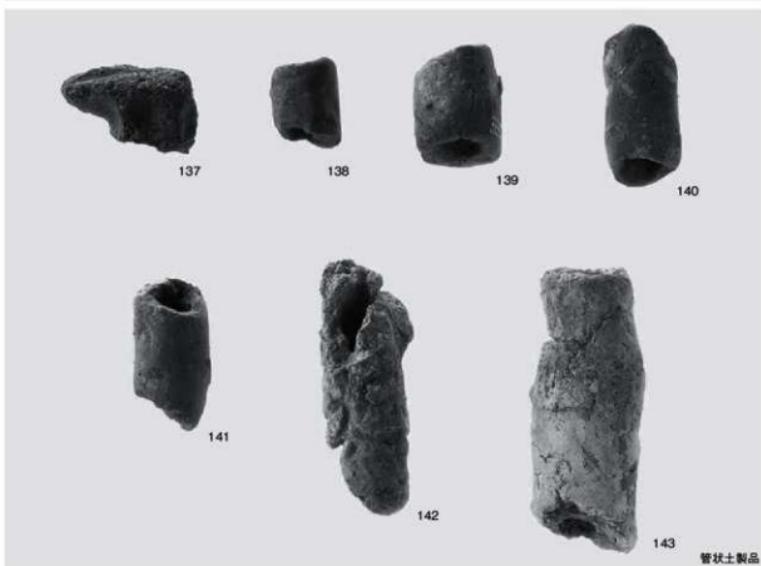
真
陶磁器類 (2)



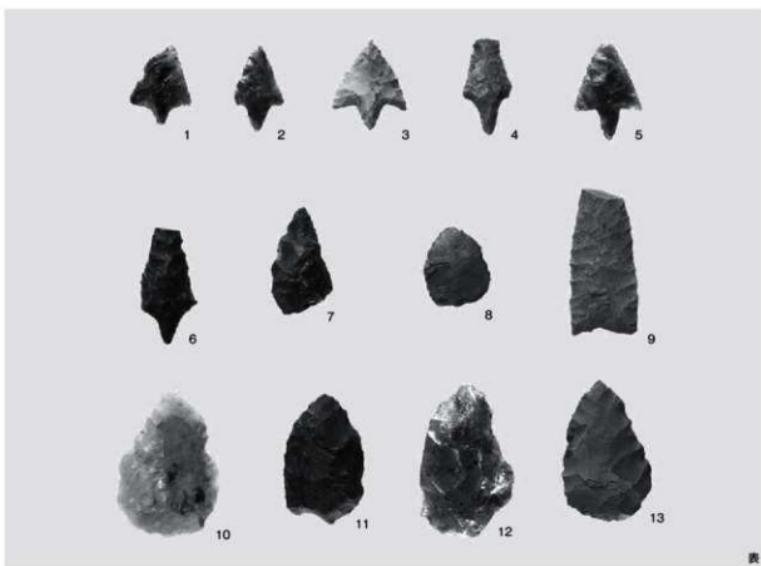
陶磁器類 (3)・瓦・古錢



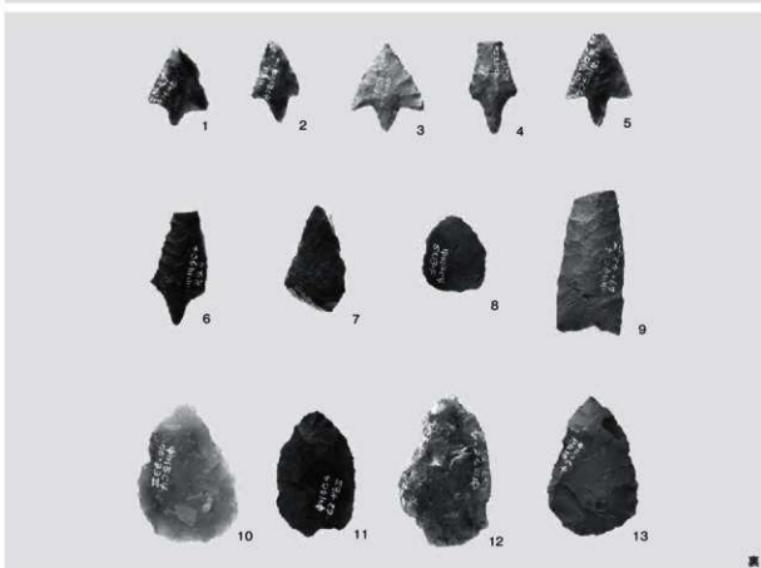
土製円盤



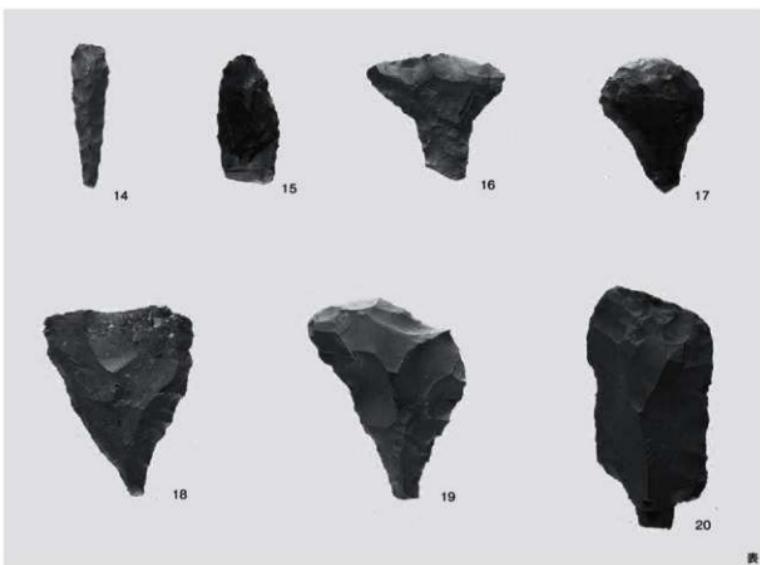
管状土製品
土製円盤・管状土製品



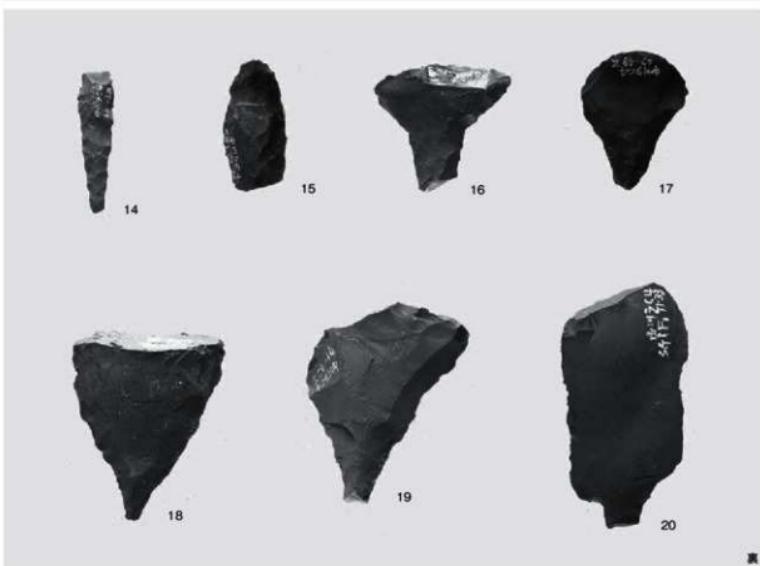
表



真
石器



石錐



石錐



21



22



23



24



21



22



23



24

表

真



25



26



25

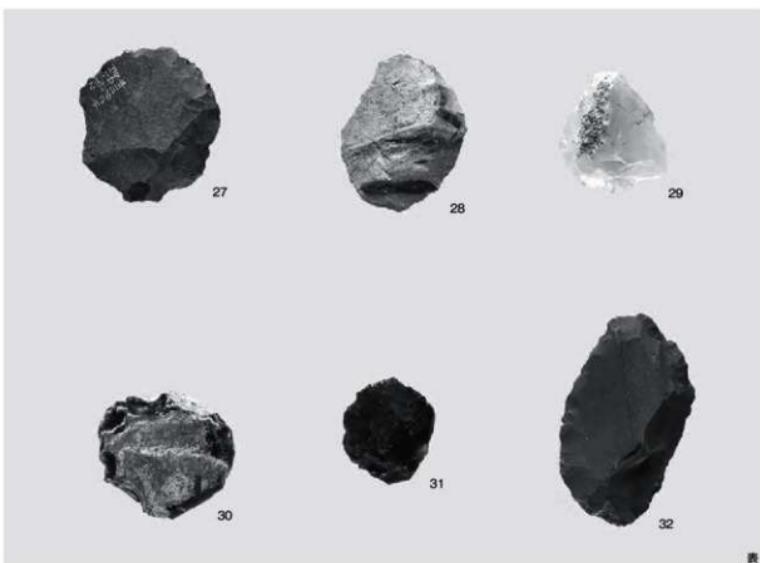


26

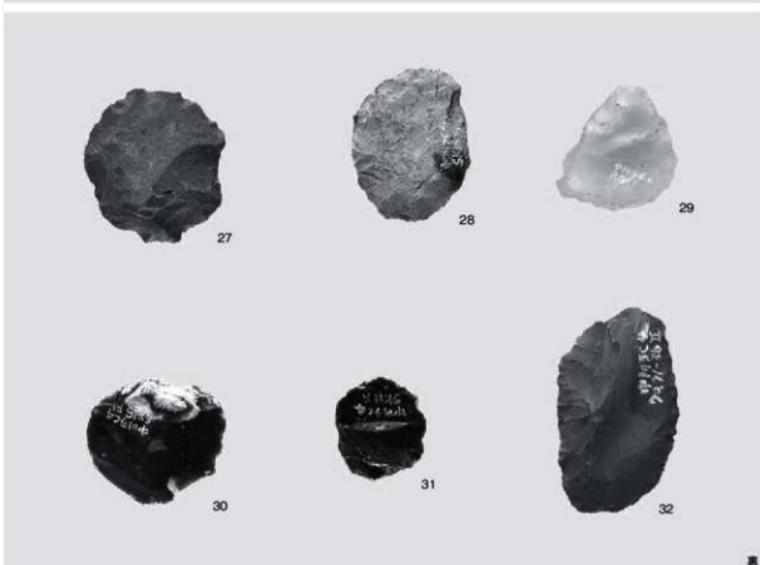
表

真

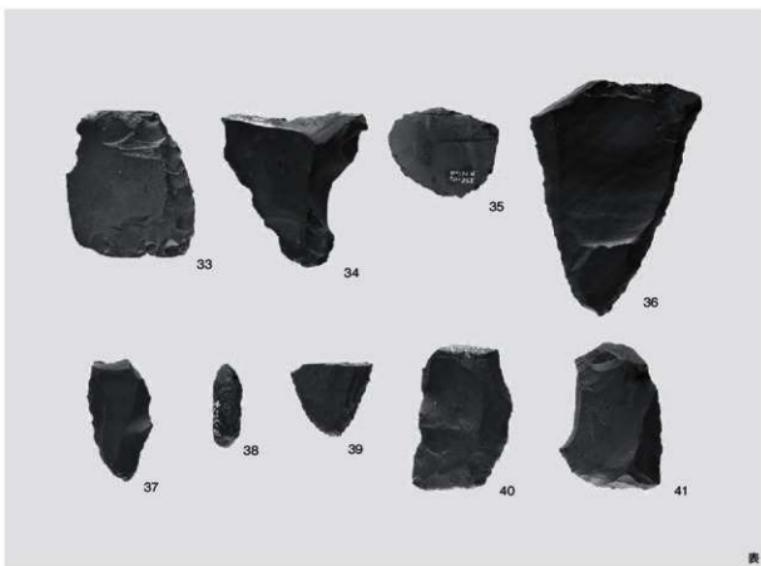
石匙·範状石器



圖



寫真圖版36
小型圓形搔器





表



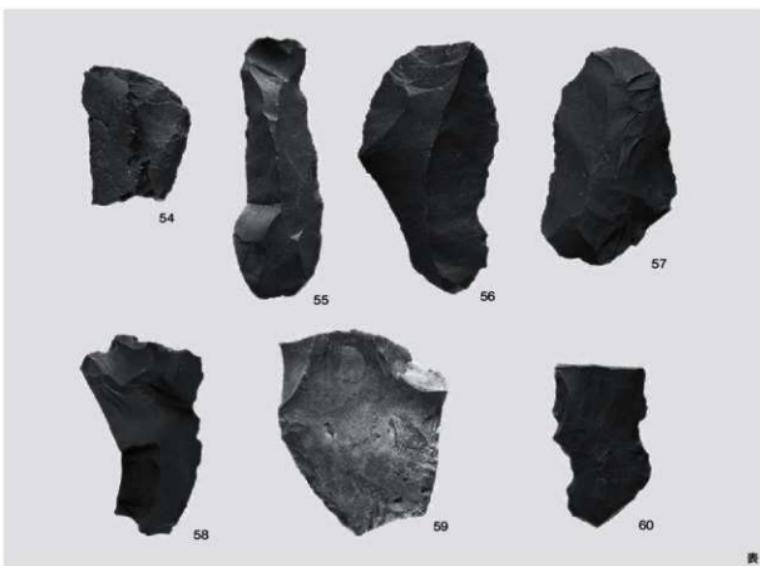
削器 (1)



真



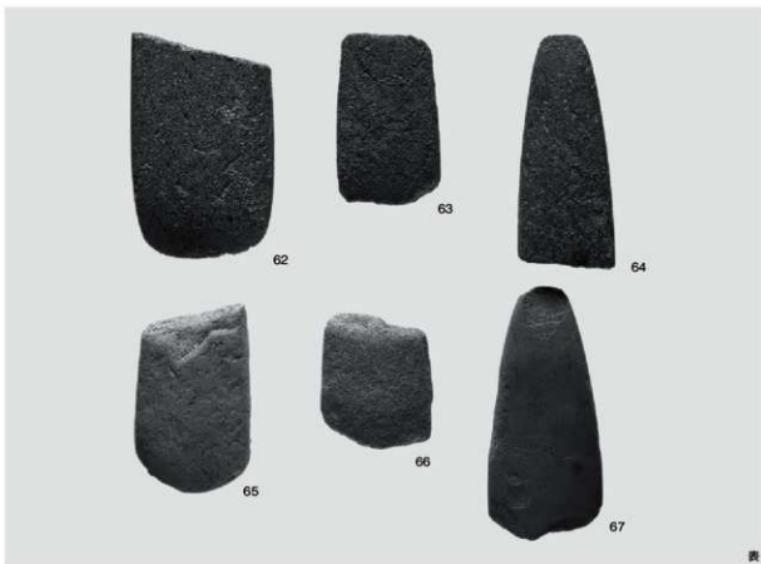
真
削器 (2)



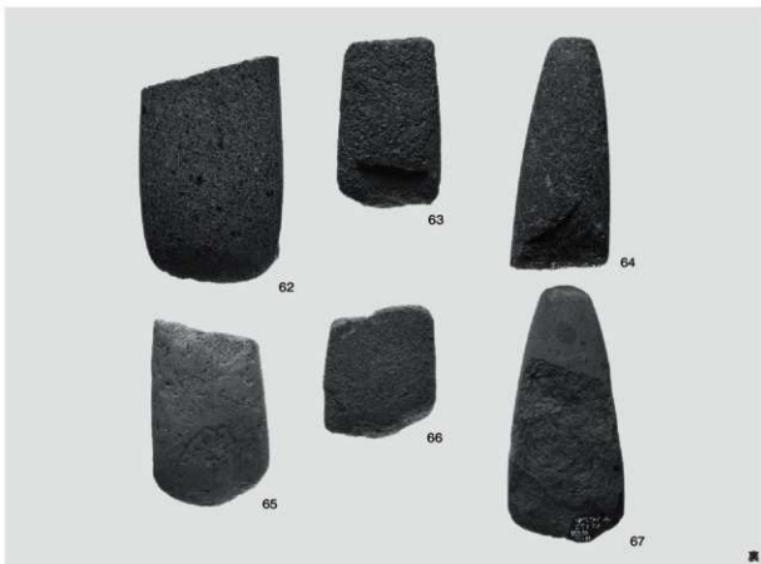
表



真
削器 (3)



真

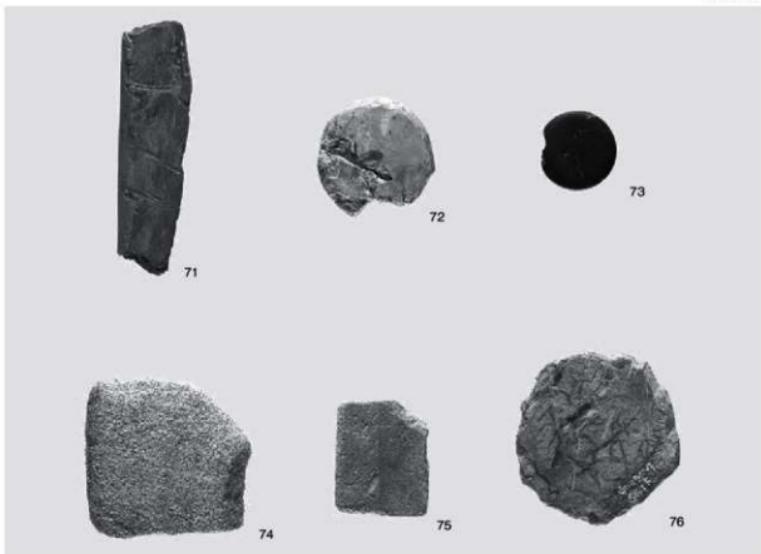


真

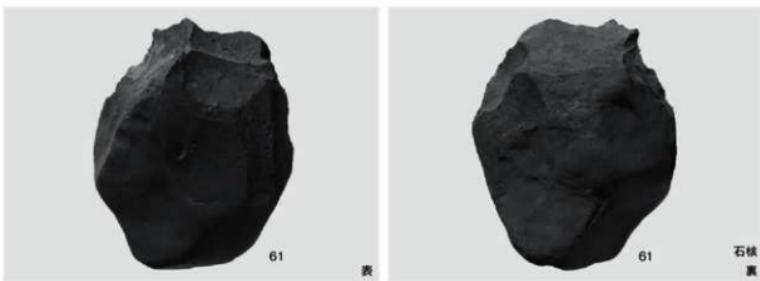
磨製石斧



磨製石斧



石製品等





凹石・磨石・石皿

報告書抄録

ふりがな	なかがわら Cいせきだいよじはくつちょうさはうこくしょ						
書名	中川原C遺跡第4次発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第163集						
編著者名	石井浩幸						
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301						
発行年月日	2007年3月28日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (nf)	調査原因
なかがわら Cいせき 中川原C遺跡	山形県 新庄市 十日町 字中川原	06205	平成8年 登録	38度 47分 31秒	140度 17分 37秒	20060511 20060707	1,000 ふるさと 農道緊急 整備事業 (野中地区)
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
集落跡	縄文時代	土壙 ピット群	縄文土器 石器類	縄文時代後期の土壙やピット群が検出される。特に多数の石錘が出土したことが特筆される。			
	中世以降	溝	中世陶器 近世陶磁器	(文化財認定箱数: 18)			

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第163集

中川原C遺跡第4次発掘調査報告書

2007年3月28日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 藤庄印刷株式会社
〒990-0821 山形市北町1丁目3-1
電話 023-684-5555